
僕は彼女の夢を見る。

斉戒 新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は彼女の夢を見る。

【Nコード】

N1338Y

【作者名】

斉戒 新

【あらすじ】

僕はどこにでもいる高校生だった。

突然の出来事。

突然の不幸。

それは僕のせいでもなく、

誰のせいでもなく、

それは誰にでもありえることだった。

だからこそ。

だから僕は受け入れることができなかったのかもしれない。
この不条理の世界から。

向き合うことはおろか、自分すら見つめなかったのだろう。

普通の高校生のはずだった、そんな冬のお話。

一章

人に与えられた最後の願い、それは死ぬことが決定しているものだけに残された奇跡。

西尾公園の真ん中にベンチがある。

ベンチは木々に囲まれており、木々はある種の思念を放っているかの様に、ベンチを見守っていた。秋になると木々の葉はもみじ一色に移り変わり、木々たちの描いた真つ赤な葉は人々を魅了し、見栄えのある情景は郷愁を抱かせた。けれど紅葉は永劫と持たず葉は落ち、枯れ果て、木々は季節の変わり目と共に迫り来る冬に力を蓄えた。

それは晩秋だったと思う。

木蓮の囲むベンチの真ん中で僕は一人で座っている少女を見た。

彼女は木蓮をずっと見ていた、というより呆けていたのだろうか。その様子はおかしいところ一つなく元々そこにあつた様な一体感があつた。

それが僕と凛花^{りんか}がはじめて会った時だった。

第一章 日常との別れ

地元の高校に通いだして初めての秋。

季節の始まりを告げる木枯らしに街は冬に向けて準備をしていた。

「うゝ寒い、寒い。最近になって急に冷えだしたな」

幼馴染であり、さらにはクラスメイトである修平^{しゅへい}とこの日も一緒にいた。少し茶髪かった修平の髪色は高校生にしてはちよつと浮いてけれど、本人は「みんなやっているから大丈夫」なんて軽薄なことを口走っていた。

「律、今年のクリスマスはどうするんだ？」

「えーと、特に予定はないよ」

すると修平は驚いたような表情を浮かべた。

「えー、クリスマスぐらいデートしろよ」

少し反抗的になった僕は「そういう修平はどうなの？」と返す。

修平はそう聞かれることを待っていたのか、にんまりと余裕のありそうな表情を見せた。

「クリスマスはこの間話した、香織ちゃんとデートだぜ」

「早っ！ もう予定埋まってるんだ」

「はははっ、お前も今年は女の子と遊べよ」

「……だといいいけどね」

本当にそうだといいいと神頼みする気持ちだった。正直修平はいいなと内心思いつつ、けれど今思えばいつも通りだった。だって修平はもてるから。

「修平、今日はどこにいくの？」

「おう、今日は香織ちゃんのプレゼントを探しになっ」

僕の問いかけに修平は満面に笑った。

「へー」

きめ細かい心配りは修平のいいところだ。修平は一回のデートでも何かしら相手を喜ばせるプレゼントを用意していた。僕は雑貨屋、服屋、アクセサリーショップ、と色々迷いながらも無難にマフラーを買うことで収拾をつけた。

「律、今日はありがとな。おかげでいいもの買えたわ」

買った物袋を手にした修平は満足げな顔だった。

「うん、こんなことでよかったらいつでも付き合うよ」

帰りの電車の中、僕たちは理想のクリスマスデートをネタに会話を楽しんだ。

僕たちは地元の駅で降り、修平とは駐輪所の前で別れた。修平が先に帰るところを見送り、僕はちらりと時計をみた。時刻は七時過

ぎ　そろそろ夕食の準備が出来ているころだ。

今から帰ればちょうどいい頃合に夕食に間に合うはず。駅から家までは小さな公園を抜け、橋を越えてすぐだった。かじかんた手でハンドルを握り、自転車にまたがると今日は厚着でなかったことに少し後悔した。

「クリスマスか……」

はぁ、と白い吐息が身に包み、空気を裂くようにペダルを漕いだ。自転車の座席から街を見渡す景色は何だかいつもと違った気がした。季節が変わったからなのか、それとも町全体が変わってしまったのか。

「……そんなことよりも早く家に帰ろう」

肺に溜め込んだ息を吐き出し、雑念を振り払うようにペダルを強く踏み込んだ。しばらく自転車を漕いでいつも公園を通りすぎようとした時、普段とは違った情景に目が奪われた。

「あれ？」

無意識的にブレーキをかけた。そのまま自転車を路傍に止め、公園に入ってみる。そこに飛び込んできたのは公園の真ん中にあるベンチだった。

「なんで、こんな所に？」

誰かが遊んでそのまま放置したんだと思った。けれど僕の視線はベンチではなく、ベンチに腰掛けている女の子を見ていた。知らない女の子だった。

コーティングがかかった様なつややかに伸びた黒い髪、真ん丸い愛らしい目。今まで見た女の子の中でも群を抜いている容姿だった。年は同じくらいに見えるけど、すごく大人びて見える。

でもそれだけじゃなくて　彼女はどこか神秘的に見えた。

「……つまんない」

彼女は下を向いたまま言葉を発した。誰かに言ったのかもしいない。でも僕の周りどころか、公園には僕と彼女しかいなかった。

「つまんないって言っているんだけど！」

二度目に発せられた言葉にようやく僕に言っているのだとわかった。慌てて謝りながら、女の子に駆け寄る。

「ごめん、ごめん。どうし……」

近づいた僕は思わず言葉を失ってしまった。彼女の顔立ちは遠くで見るよりも断然に艶やかだった。うわ、どうしよう。

「なにっ」

「な、なんでもない！」

かわいくて見とれていたなんて絶対に言えない。

「ふーん」

彼女は怪訝そうに僕の顔をじろじろと見た。僕は白を切るように口を開く。

「そ、それよりさ。なんでこんなところにいるの？」

「見てわからない？ 暇なの」

「で、でもこんな時間だよ。家に帰ればいいんじゃない？」

「それはいや」

女の子は即答する。

「親が心配するよ？」

「……ううん、それは大丈夫」

彼女は何かを考え込んだ様に下を向いた。しまった、何か聞いてはいけないことを聞いたのかもしれない。

「気にしないで、両親は疎遠なだけよ」

彼女はそう言って笑顔を見せた。

「あ……そうなんだ」

「とは言っても今度いつ帰ってくるかわからないけどね」

「……………寂しくないの？」

「全然。一人の方が楽なもの」

彼女の言葉に僕は納得する。ああ、だから彼女の雰囲気は少し変わっているのか。

「あつ、そういえば自己紹介がまだだったね。僕は浦山^{うらやま}律^{りつ}」

「遠藤^{えんどう}凜花^{りんか}、こちらこそよろしくね。良かったら座って」

「うん」

寒い夜空の中、僕達は遅くまで話した。彼女はどうかやらの別の高校に通っているらしい。それ以上は彼女が何も言わなかったのも、こちらからは何も聞かなかった。僕達はいつの間にか盛り上がってしまい、僕が公園にある時計を見たときにはかなり時間が経っていることに驚いた。

「ああ、もう帰らないと！」

彼女も時計を見るが驚いている様子はなかった。でも僕はさすがに心配される　いや母さんに怒られる。

「そ、それじゃあ僕、先に帰るねっ。またね」

「私もそうしようかな。うん、それじゃあ……………また明日、かな？」

「あ、ああ、うん」

ベンチから飛び上がる様に立ち上がり走って公園から出た。急いで自転車に跨がり、後方に立っていた彼女は両手を合わせて見守っていた。

「それじゃあ」

ペダルを踏み込む、緩やかに自転車は前進を始める。彼女は僕の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。僕は自転車をかつ飛ばしたけれど夕飯の時間にはとくに間に合わず、家に着くと母さんは力ンカンに怒っていた。

「こら、律！」

「あー、はいはい。今日はご飯いいからっ」

「待ちなさいっ」

怒り狂った母さんを僕は無視して二階へと逃げ込んだ。急いで階段を駆け上がった自分の部屋までたどり着き、真っ暗な部屋で僕を迎えた。ほとんど何も見えなかったけれど、僕は電気も付けることなくベッドに突っ伏した。

「親か…………」

彼女の言葉が脳裏に木霊した。

「ごめんね、凜花……父さんは行かないといけないんだよ」

スーツに身を包んだ男の人が悲哀に満ちた顔を女の子に送る。

「うん、わかってる。お仕事だもんね」

女の子は年不相応な凜とした顔を作り、男の人を見上げた。

「そうだよ。凜花はいい子だね、本当にいい子に育った」

「うん、凜花いい子！ だからお父さんが帰ってくるまで待ってるよ、公園で遊んで待っているよ！」

ばいばい、と女の子は毅然とした顔で父親の姿が見えなくなるまで見送る。父親は内心不安だったけれど、彼もまた行かなくてはならないので、仕方なく公園の外へと歩き出した。

朝。

けたたましいアラーム音が耳朶を打った。

「……………」

耳を塞ごうが嫌でも聞こえてくる音に僕はついに耐えきれず、仕方なく気だるい体を起こした。ベッドから片手を伸ばして目覚まし時計のアラームを止め、続いて布団を前に蹴飛ばす。

「なんだっただんたろう……？」

昨日見た夢のことだった。妙にリアルで不思議な夢だった、どうして僕があんな夢を……？

「あ」

こんなことをしている場合じゃなかった、学校の準備をしなくちゃ。ベッドから飛び跳ねて脱出し、卓上に置いてある鞆に手をかけた。

「今日は国語の宿題があつたなあ。後は……うん、多分、大丈夫」

必要な分の教科書を適当に鞆に詰め込んでゆく。続いてクローゼットを開き皺一つない制服に袖を通す。そのまま鞆を持って一階のリビングに下りると、父さんと母さんが既に朝食をとっていた。

二人は仲良く話していた。いつものこと、いつもの光景だった。そこに僕、という不穏分子が入る。すると二人の会話はどこかたどたどしくなった。僕は無言で椅子に座る。小さな声でいただきます、と目の前に並べられた朝食に手を合わせた。母さんは一目、睨み付け、僕は目を反らした。ああ、昨日のことでもまだ怒っているんだ。

「律、今日は何時に帰るの？」

母さんの刺々しい口調が僕を突いてきた。

「知らない」

「知らないって……ねえ、あなたも何か言つてよ」

母さんは父さんに言葉を求めたが、父さんは新聞で顔を隠して逃げた。ぼそりと「いいんじゃないか」と独り言の様に呟く。

「もう、お父さんったら。……とにかく、昨日みたいに遅くに帰るのはやめなさいよ。それと今日、お父さんとお母さん二人で出かけるから夜遅くなります」

「はいはい、わかったよ」

僕の返事に母さんは一瞬、眉をひそめたけどそれきり黙った。

「ご馳走様」

自分だけに聞こえるように小さく呟き、食べ終えた茶碗を洗い場に持っていった。机に戻ると、お弁当と少しばかりのお金が置いてあった。僕はそれを黙って受け取る。

「……じゃ」

父さんと母さんに顔を合わせないまま、心許ない言葉だけを残してリビングを後にする。リビングを出ればお母さんが僕の後を追ってきた。母さんはいつも玄関先まで見送ってくれる。僕が家を出る時だって、父さんが家を出る時だって 毎回、玄関先まで見送ってくれていた。

僕は靴を履いて玄関を飛び出すと、日差しが全身を覆った。太陽が昨日よりも輝きも増し、コンクリートの道路を照り返していた。もうすぐ冬だっていうのになんだってこんなにも暑いんだ。

「行つてらっしゃい」

振り返れば母さんが手を振っている。

「……」

僕は母さんの顔を見ずに、軽く手をあげて歩き出した。

その頃、僕は理由もない反抗期だった。

今も冷戦状態だ。でもそれがいつだったからか僕はあまりに覚えていない。

そしていつだったのだろう、僕がこんなにも家族に干渉しなくなったのは。

学校に着くと、修平が熱心に勉強していた。いや、よく見ると雑誌を真剣に読んでいる様だった。

「修平、おはよ」

「おう、律おはよう！」

「……なに読んでいるの？」

「おう、これか？ ファッション雑誌！」

修平が見せてくれた見開きのページには彩り鮮やかな服を着ていた人達が映っていた。いわゆる、ティーンズファッション雑誌だった。

「……ふーん」

「おいおい、そんな釣れない反応するなよ。何か聞くことでもあるんじゃないのか？」

「いや……僕あんまりそういうたもの、興味ないからさ」

そうじゃなくて、と修平は笑う。

「律、それは冷たくないかあ、親友の俺が困っているんだぜ」

「？ 修平、困っていたの？」

「そつだよつ！ 実はな、今週の日曜日に香織ちゃんとデートすることになったんだ！」

「え、また？」

香織ちゃん、という子は今修平が猛アタックしている子だ。今週の土曜日にも修平と遊ぶ予定だったはずだけど……連日で？

「ん……それなら土曜日を参考にすればいいんじゃない？」

「まあ、確かにそうかもしれないけどさ。実際、連日遊ぶんだから、似たような服装になりそうなんだよ。それじゃあ、だめなんだよ」

「ふうん？」

僕には修平の考えがよくわからない。

「だから一応他の人の意見を、その参考に……な？」

すると修平は「どれがいい？」と雑誌を僕に向けてきた。本当に用意周到というか、小心者なんだな、と思った。僕はろくに考えもせず「これでいいんじゃない？」と雑誌の一面に写っていたモデルの服を指さした。赤いチェック柄のネルシャツに黒いジーパン、よくも悪くもない無難な格好だと思う。

「おお、じゃあこれにするよ！ 律、ありがとな！」

「どういたしましてつ。こんなことならいつでもどうぞ」

ちょうど会話が一段落ついたところで予鈴が鳴る。

「やつべ、予鈴が鳴っちまった」

修平は急いで雑誌を鞆の中にしまう。僕も自分の席に戻ると、教室のドアが横にスライドした。先生は教室に顔を出すなり、いきなり大きな声を張り上げた。

「ちゃんと席につけよう！ おーい、その女子！ もうチャイム鳴っているぞ、自分のクラスに戻りなさい！」

担任の白井楓先生は、女の人にしては気性が荒いけれど、男女ともに人気があった。僕も好きな先生だ。

「おい、浦山。何をボーっとしている。今日はお前が日直だぞ」

先生にじろりと睨まれて僕は気がつく。完璧に忘れていた、僕が日直だった。

「あつ、はい。起立！ 礼！ 着席！」

皆が席に着いてそこでようやく落ち着くことが出来た。その間に楓先生はホームルームの連絡事項を伝えていた。

「……………」

皆が先生の方を向いている中で僕は窓の外を見ていた。

今日は少し暑いけれど雲ひとつない、晴天と言えるいい天気だった。学校の周りに生えている草や木々は、風に揺られ気持ち良さそう仰いでいる。小鳥達は木々の枝に身を休めていた。

ああ、なんだかあつたかいなあと思った。

いつものように学校があつて、自然がそこにある。

ちよつとうるさい先生だけど、それも心地よいものだと思っていた。

けれどそんな日々は 続かなかった。

「律、律！」

「ん……………」

「起きろ律！ もう授業終わったぞ！」

「なんだよ、修平……………」

「なんだよ、じゃないって！ もうすぐ昼休みが終わるぞ！」

つんのめっている顔をばつと、起こした。

「え、えー！ 昼休み、もう？ 早く起こしてよ、修平！」

「いや、何度も起こしたんだが……………」というか授業中も先生が何度も起こそうとしていたぞ？ でも全然起きないから、そのうちに起きるだろうって思って放っておいたんだよ」

「……………」
「そっか。ごめん、なんかありがとう……………」
「あ、そういえばご飯」
修平はため息をついて首を横に振った。

「もう無理だろ。授業と授業の合間に食べるしかないな」

「うん。そう、だね。……………」
「後、日直っ」

「あー、大丈夫。俺が代わりにやっておいたよ」

「ご、ごめん……………」
「修平」

「いいよ、全然」

それじゃあ、と言って修平はそのまま自分の席まで戻っていった。修平の後ろ姿を見て思う　なんだろう今日は。ホームルームまでの記憶はあるけど、その後のことが全く覚えていない。

どうしてだろう？

そういえばたくさん寝たのにも拘わらず、体はだるくて椅子に張り付いているみたいに重い。頭はふわふわと浮いている感じだけけれど、どこか心地が良い。ちょっと変な感じだ。

正面の時計は十二時を回っている。やっぱり本当に昼休みまで寝てしまったらしい。昨晩は夜更かしなんてしていないし、疲れていなかった気がする。原因はなんだろうと考えたけれど、突き詰めることはできなかった。

僕はその後の授業中も夢の中に誘われた。

途中で夢を見た。またあの夢だった。

前にみた女の子は一人、公園の砂広場で遊んでいた。今度の夢はそれを遠方で観察するかの様に、保護者の人達が女の子を見て話をしていた。

「ねえ、あの子……いつも一人で遊んでいるわね」

「まあ、かわいそう。両親の方は？」

「それがいつも夜遅くまで仕事みたいなんですって。しかも今回は出張みたいで……まだあんなに小さい子なのに、かわいそう」

「他の子達の話聞く限り、あの子ずっと待っているみたいですよ、えらいけど……逆に気味が悪いわ」

「そうね、なんか嫌だわ……。私の子もあんまり近づかせないようにするわ。今の内からなるべくいい子とお友達になってもらわきゃ」
「ええ、そうしましょう」

今度は視界がぼやけ、映るすべての輪郭が崩れてきた。

次に声と背景が遠くなり、周りが暗転し始める。物音一つしなく

なっと思ったたら、今度は耳の傍らで何か聞こえてきた。

「……で……そうしなく……いけ……」

誰かの声が聞こえた。けれど電波妨害にあつたみたいなノイズ音ばかりが聞こえてくるばかりでよく分からなかった。声は少しずつ遠く、奥行にある場所に追いやられる感覚が全身をよぎる。と、気づいた時には視界が暗転、続いて感覚がよぎってきた。

音、匂い、温度、すべての五感。

温度や音の感覚は徐々に現実味を帯び、自分にぶつけられている様だった。

「こ……こは？」

暑い。

熱がじわじわと体に纏わり付く。目を開ければ太陽が近く、まるで手に届く所にあるようだった。足元には雲がうようよと浮遊していた。

「浮いている……？」

ふわりふわりと自分の体が浮いていることがわかった。下に視線を落とせば眼下の天気が一遍した。にわか横風が僕のバランスを失い、徐々に高度が下がっていった。頭天边まですっぽりと雲に入ると、完全に雨雲は僕を捕まえた。雲の中は雷雨が吹き荒れ、ひどく視界が見づらい。雨雲は次第にどんどん勢力を伸ばし、四方八方に雨が僕を叩きつけていた。僕に逃げ場なんてなかった。

視界は真っ暗で、雨は僕の体温を奪う。雨、風の猛威に僕は息をすることすらもままならない。手を伸ばし、もがきもするが誰も助けはこない。雨脚は治まることを知らず、無作為に僕の体を痛め続けた。

苦しい、苦しい　　苦しい。

「誰か、助けて……」

僕はそこであきらめた。

次に目が覚めた時には終礼の時間はとっくに過ぎて、下校時間と

なっていた。群青色の空はすっかり暮れなずんでしまっていた。

「あれ？」

時計を見れば十七時を回っていた。教室にはもう誰もいない。

「もうこんな時間！ どうしたんだろ、今日。誰か起こしてくれればいいのに……」

誰もいない教室を見渡して僕は悪態をつく。朝と変わらない鞆の重さを実感しながら僕は教室を後にした。校舎を一人で出て校門を跨がろうとし、そこで何か既視感を覚えた。

なんだろう。

胸の奥が重く、磐石か何かがずっしりと、胸の中心に重くのつているかの様だった。動き一つさえも捕らわれる感覚に陥り、胸騒ぎが止まらない。勢いよく振り返る　サハラ色のグラウンドには誰もいなかった。

多分、気のせいだ。そう自分に暗示をかけて踵を返し、足を動かした。

空から見える太陽は西へと姿をくらまそうとしていた。日が落ちるにつれて光の包括する範囲は徐々に収縮した。カーテンで光を遮るように暗闇を作り、まるで世界の断片を切り離しているよう。夕方の道歩く人は学生の姿はあまり見かけなかった。

朝と同じ場所なのにいつもの光景とは印象がまるで違った。今はどこか虚しく、少し寂しい。服の上から胸を握りしめ、やりきれない思いとやるせない思いが僕を締め付けた。途方にもない想い、捨てる場所のない感情。なんとなく僕は家に帰りたくなかった。僕は自転車にまたがろうとした所で、凜花の言葉を思い出した。

『それじゃ、また明日』

自転車と小さな影は公園の方向に伸びていた。

でも多分、凜花はもう帰ってしまっているだろう、と半ば諦めた気持ちで自転車を公園に向かわせた。

「また、あの夢見ちゃった」

凜花は自分の横たわっている体を起こす。頬が濡れていることに気づいて、すぐにハンカチでふき取った。もうずっと前の記憶のことなのに。辺りを見渡せば、空はいつの間にか群青色からオレンジ一色に変わっていた。どうやらだいたいぶ寝てしまったみたいだ。

「……それにしてもこないなあ」

今日初めてのため息を漏らした。

すると自転車の甲高いブレーキ音が聞こえた。自転車は公園のそばに停めると、今度は荒々しい呼吸音がこちらにまではつきりと聞こえてくる。もしかしてきたのかな、と凜花はぴんと姿勢を正し、顔をまっすぐ上げて、公園に入ってくる人物を待った。

そこに一人の男の子が公園に入ってきた。成熟しきっていない痩躯はまだ少年らしさを仄かに漂わせていた。男の子は足取り重く、顔を重たそうにうな垂れていた。男の子は一步、公園に踏み込み、ゆっくりと顔を上げた。男の子の顔はすぐに真っ青に染まった。罪悪感に満ちた彼の顔はいたたましく、見ていられなかった。凜花は笑顔を作ると、彼もぎこちなく笑った。

「やっときたわね、律」

「……ごめんなさい、ちょっと寝過ぎしちゃった」

律は苦しげに笑った。

「寝過ぎした？ なにそれ」

「そ、そうじゃなくて!」

律は言い訳がましく今日あったことを説明し出した。要約しなくてもすぐに分かった、つまり彼は寝過ぎしたということだった。

「こんなこと初めてだよ、どう思う？」

「知らない、そんなこと私が知る訳ないじゃん。……ねえ、それよりも名前。何で呼んでくれないの？ さっきから私は律って名前で

呼んでいるよ？」

「え、……いいの？」

律は目を丸くし、驚いた。

「うん、凜花でいいよ」

「りん……か」

訥々と律は名前を紡ぎ出してゆく　ん、なんだかこそばゆい。

そんな風に言われていると逆にこっちが恥ずかしい気持ちになる。

「ええと……うん……ん、その……。た、多分、律もそのうちに慣れるよ、きつと」

「そ……かな？　りん、か」

凜花、と律は何度も小声で名前を復唱していた。けれど全部、丸聞こえだった。

凜花は少し恥ずかしくて遠くを見る。暮れなずむ空には一羽の鳥が羽ばたいていた。無限にも思える空を羽ばたく鳥は自由に見えたが、広い空に一人ぼっちなんてちよつと寂しい気がした。

「なんだか寂しい空だね……」

律はそう言つて一羽の鳥が見えなくなった空虚の空を見た。鳥は凜花達の視界には捉えられないくらいに遠くに行つてしまい、目の前に見える空にはその形も輪郭も見えなくなっていた。

何もいなくなった空を凜花は見つめる。律の言つとおりだ、なんだか寂しいと凜花も思う。空は赤色と黄色のコントラストが空いっぱいに広がり、時間が経つにつれて陽光は息を潜めるようにだんだんと色を失われていた。ついには空を照らす光は失われ、一面にあった光は色濃い闇へと吸収されていった。

「……もう、こんな時間ね」

「え？　そうかな？」

律は呑気にそんなことを言つた。

「もう七時を回ったわよ」

「うん、つてもうこんな時間?!」

「親が心配するから、ちゃんと連絡も入れた方がいいわよ」

「ええと、一応大丈夫。今夜は親が出かけているから」

親　凜花は律の言葉が少し引かかる。

「そう？　でも帰らないとね。んー、じゃあそろそろ私は帰ろうかな」

ベンチから立ち上がって背伸びをした。律も一緒に立ち上がる。

「それじゃ、また明日ね。律」

「……うん、またね凜花」

律は公園の外に向かって歩き出す、凜花も一緒に歩く。凜花は律が自転車に乗って、その姿が見えなくなるまで見送った。律の体は無限の闇に吸い込まれていく。凜花は踵を返し、誰もいない公園を限なく一瞥する。

「……………」

と、凜花は急に声を張り上げた。

「出てきなさい！」

ぴん、と空気が張り詰める。

「……好きだね、君も」

脳に直接語りかける声がどこからなく聞こえた。何にもないなかった風景の一角に歪みが生じ、すばつと真横一直線に風景が歪んだ。中からすすべるように下半身が現れ、全身はすぐに公園の土を踏んだ。全身真っ黒の布に身を包み、伸びた黒髪が目についた。形状は人だったけれど、風貌は異質そのものだった。そいつは氣にくわなそうに凜花を睨み、

「へえ、間近で見ると案外人間に近いものだな」

と小馬鹿にする物言いで笑った。凜花も負けじと皮肉で返す。

「あなたも同じでしょ？」

運び屋さん、と凜花は卑しく笑って見せた。

「ふん。俺が想像していた天使っていうのは、もっと神々しいオーラを放っていると思ったが……まさか、餓鬼のお守りをしているとはな」

くくく、と明らかに嘲笑を含んだ笑みをして、凜花を見た。

「で、あの子に何の用なの？」

「用？ 運び屋の仕事って言ったら、一つだけだろう？」

「……そんなことはさせない」

「は？ 何、言っているの、あんた？」

男は凜花の瞳を見つめ、すぐに大層おかしそうにお腹を抱えて笑った。あつはつは、と体中の酸素を出し切るくらい笑い焦げた後に凜花を睨みつける。

「あ？ あんなやつ、邪魔なだけだろ？ どうせ一人じゃ生きられなくて、他人に迷惑かけるだけだ。あんなやつ」

生きていても意味はない、と吐き捨てるように男は言う。

「意味なんて、なくはない」

「いいや、ないね」

男は断言する。ああ、と凜花はこれで合点がいく。恐らく男とは意見が全く合わない。こいつは嫌いだ。

「どちらにせよ、結果は一緒だ」

「させない、私はあの人だけは必ず救うわ。それに一人になっても、私が絶対に死なせはしない」

男はため息をついた。

「は？ 結局のところ所詮はお前の勝手な判断だろう？ 俺は違う、常に中立にバランスを取っているんだ。それに第一、これ以上苦しまない方が本人にとっても幸せだろう。なあ？」

「そんなの結局、誰かの いいえ、あなたの都合だわ」

「くく、だが今死なせれば苦しまずに済む。いわゆる、安楽死つてやつだ。そいつのためにもなるし、周りのためにもなる。俺から言わせれば、それこそが正義だ」

「そんなのおかしい」

「おかしくないさ。結局、誰かの都合だろう？ だからこそ、俺が公平にバランスを取るんだ。それこそ正しさであり、正義だろう？」

「誰かを犠牲にすることで決着を付けるのはおかしいわ！」

「犠牲、ね。……ふん、結果はすぐに分かる。それじゃあな、また

会おうぜ天使ちゃん」

「ちよつと！」

男は再び風景を歪ませ、断面に身をすべらせると、凜花の前から飄々と姿を消した。

僕が家に着いたのは八時近くだった。けれど家の明かりはついていなかった。

「ただいまー……ってなんだ、まだ誰も帰ってきていないのか」
靴をぶつきらばうに脱ぎ捨て、家へとあがっていく。二階へと上がり自分の部屋に入ったところで一息ついた。ふとズボンのポケットの重みに気がつき、そういえば朝からずっと携帯に触っていないかった。

「ずっと寝ていたからな……メールが溜まっているだろうなあ」
携帯電話にはやっぱりきていた。メールが一件、着信履歴が二十件。

「何この、着信履歴」
全部知らない番号からだった。ちなみにメールは修平から僕は先にメールから確認した。今度は着信履歴の番号を見つめていた。その時、一階にある固定電話がけたたましく鳴り響く。慌てて一階まで駆け下り、受話器を取った。

「はい、もしもし……」

「もしもし、浦山さんのご自宅でしょうか。私、愛知県警本部の西崎と申します」

「はい、浦山ですけど」

「なんだろう警察？ 僕には全く身に覚えがない。」

「浦山律、君？ 今、大丈夫かな？ 申し訳ないけど、大至急、今から言う病院にきてもらえないかな？」

「はい……？ え？」

「落ち着いて律君。とりあえず、今すぐ西尾総合病院にきてくれな
いかな？ 詳しい話はそこで」

「は……はい。わかりました」

電話が切れると力が抜けて腕がだらりと落ちた。次の瞬間、目の
前が真っ白になった。警察、病院。何が起こっているんだ、誰が、
何をしたんだ。

父さん、母さん。

ふと脳裏に浮かぶ二人の姿。僕は半ば放心状態で固形電話の記録
を見れば、ここにも何件も電話が入っていた。すべて携帯にかかっ
てきた番号からだった。

「どうなっているんだよっ」

半ばやけになって僕は電話機を床に叩きつけた。

前かがみに身を乗り出し、自転車のペダルを力いっぱい踏み込む。
信号は黄色信号でも迷わず突っ切り、くだり坂でもブレーキを踏む
ことはしなかった。ただただ、一心不乱に自転車のペダルを漕いだ。
「はぁ、はぁ、はぁ」

病院に辿り着くと自転車は入り口前のロータリーにそのまま投げ
捨て、息も整う間もなく病内に入った。病院の中は受付の明かりだ
けが点灯して中は真っ暗だった。受付の奥に仄かな明かりが確認で
きたので、そこに向かって歩き出す。側面にある非常口の明かりを
頼りに足を進めていると、明かりが途絶え、覆いかぶさるように大
きな影を見つけた。顔を上げれば、三十代半ばの肩幅の広い男性が、
僕を見下ろしていた。端正な顔つきをしたその人は安堵する表情と
何か険しい目つきで僕を見つめていた。

「……浦山律君、だね？」

「はい」

「先ほど電話で話した西崎です。とにかく急いでこっちへ」

西崎、と呼ばれる人に僕はついて行った。廊下には誰もいなくて、
西崎さんと僕の足音だけがやけに響いていた。行き着いた先には「

手術中』と赤く点灯している文字がある場所だった。西崎さんは足を止めて、僕を振り返った。

「あなたのご両親は今日の十八時頃にトラックに轢かれてしまったね。今は二人とも 手術中だよ」

いきなりだった。轢かれた？ 手術？ 僕は言葉が出なかった。嘘だろう、と心の中で繰り返していた。西崎さんの言葉で途端に、体の力が抜けていくことがわかった。視界ザアザアと砂嵐飛び、意識が途切れかけた。足元はふらつき、ソファに触れるとそのままずとん、と腰が落ちた。

「大丈夫か！ 律君！」

背中をソファに預け、上を向いた。天井はまっくらで模様も色もよくわからない。僕は考えることを拒絶し、ゆっくりと瞼を閉じた。西崎さんは痛いぐらいに僕の肩を揺すったけれど、僕は答えなかった。

そんなのは嘘だ、僕の心はそう叫んでいた。

どの位こうしていたのだろうか。

ひっそりと明かり一つない暗闇を照らしていたのは皮肉にも『手術中』とかかれた電灯だった。遠くでは非常口の緑色の明かりが見えるだけだった。

やがて手術室というランプが消灯した。中から医師が出てくる。

先生の胸あたりはびっしりと汗で濡れていることがわかった。医師は肅々とした態度で僕に近づいてくる。

「ご家族の方ですか？」

「はい。……あの、父さんと母さんは？」

「手術は成功しました。ただ、ここからは本人の体力次第ですね。

……それでは私は」

先生はただ一度も僕の目を見ず、それだけ言って立ち去ってしまった

た。

「……ありがとう、ございました」

釈然としない思いを胸に残して、僕は暗闇に消えてゆく先生の背を見つめた。その僕に西崎さんの手が僕の肩に触れた。

「今日はもう遅いので、帰りなさい。明日の朝もう一度向かえに行くから」

「……………」

西崎さんの大きくて暖かい手に支えられながら、まだ点灯の余韻が残った場所から離れた。廊下を歩けば僕と西崎さんの足音がやけに耳に張り付いた。靴の踵と床がぶつかり合う足音は、どこか僕の小さな心に大きな波紋を投げかけている気がしてならなかった。

病院の外は真っ暗で満月が星空の主役になっていた。ただ月光是足元をはっきりと映しだすには十分ではなく、どことなく僕の気持ちを沈ませた。心算に病院を振り返ると、いてもたってもいられない気持ちになった。

「ねえ、大丈夫だよ……？」

西崎さんに聞こえないように一人、呟いた。

病院からは西崎さんに送ってもらった。

家の中に入った途端に肩に何かの重圧を感じて、僕は怖くなって自分の部屋に逃げ込んだ。真っ暗な部屋の端にあったベッドに倒れるように突っ伏した。疲れたからすぐに眠られると思ったけど、そうじゃなかった。

不安という呪縛に心が縛られ、僕は葛藤した。結局その日は一睡することも出来ず、暴は何もできずに蹲っていた。吐き気と頭痛が猛威を振るう中、なんとか携帯電話を取り出し、修平に学校を休むという内容のメールを送信してまた蹲った。

「誰か、誰か助けてよ……………」

午前六時頃になると、ようやく外は明るくなり始めた。まるで昨日のことは何事もなかったように新しい一日が始まっていた。万全

とは程遠い身を起こし一階まで下りた。テレビはアナウンサーが揚々と今日の天気を話していた。アナウンサーの明るい口調は現実感がなく、気持ち悪かった。まるで自分だけ取り残されているような感覚に陥る。僕はテレビを消し、ソファに腰掛けて漫然と天井を見つめた。

天井を見つめているとインターフォンが鳴った。多分、西崎さんだ。僕は起こし、適当にコートを羽織って玄関まで駆けつけた。扉を開けると西崎さんがそこにいた。西崎さんは僕の意図を察するかの様に黙って車に乗せてくれた。道中、僕はずっと流れる景色をなんとなく見ていた。

「ついたよ、律君」

車はいつの間にか病院についてしまい、僕は西崎さんに言われるがまま車から降りた。肌寒い風が肌に触れ、僕はコートの袖を握りしめ病院の中に入った。受付前のソファには朝なのに、かなりの人で賑わっていた。僕と西崎さんは受付を通り過ぎて、道幅の広い廊下を進んだ。父さんと母さんの部屋はすぐに見つかった。病室の前にはネームプレートがあつて、名前と集中治療室という文字が書かれていた。僕がドアノブに手をかける　　が、通りかかった看護師が慌てて止めた。

「せっかく来ていただいたのに、ごめんなさい。今は面会謝絶中なんですよ……」

「……………え？」

看護師の人は残念そうな顔を浮かべ、語を継ぐ。

「お気持ちはわかりますが、すみません。今は顔を合わせることが出来ないんです」

看護師の人は申し訳なさそうに頭を下げた。

意味がわからなかった。僕は再びドアノブに手をかける。が、今度は西崎さんが僕を止めた。

「すまない、律君……私もいささか浅慮だったよ」

西崎さんはドアノブに掛かっている札に視線を落とす。そこには

『面会謝絶中』という札が掛かっていた。

「そうです、か……」

僕は潔くドアノブから手を離す。けど納得がいかない。僕はそのままドアの前から離れることなく立っていた。

「律君……？」

僕は父さんと母さんの家族なんだ。それなのに、それなのにどうして家族の僕が会ってはいけないんだ。なぜ、どうして、どうしてなの？　僕は一步ドアから離れると、背を向けて思いっきり地団駄を踏んだ。

「くそ！」

病院にそぐわない大きな音を立て、通りゆく皆が僕に視線を集めた。それでも僕のやりきれない思いをどうすることもできず、近くにあったソファに腰掛けて頭を抱えた。

「くそ、くそっ」

答えの出ない自問が僕の頭の中を支配していた。僕はずっと同じ言葉ばかりを繰り返した。なんで、どうして。

僕は答えが欲しい、それだけだった。

トラック、

ひき逃げ、

交通事故、

ぶつ切りの言葉しか、僕の耳には入ってこなかった。

「場所は駅近くのコンビニだよ……それでね、律君……」

西崎さんの話は続く。けれど僕の頭の中には言葉一つ入る余裕はない。

「……ということだよ、律君。私達はひき逃げした犯人を追っている」

僕は前のめりになって、頭を垂れていた。西崎さんの声は遠く、

ほとんど何を言っているかわからなかった。

「……………」

僕の様子を察した西崎さんはそれきり黙った。廊下に差し込む光は前よりも落ち着いて、僕たちのいる光の届かない場所は薄暗い闇に包まれていた。西崎さんの言葉も闇に全部飲み込まれてゆく気がした。僕は少しだけ顔をあげて、廊下には光を確認してもう一度頭を下ろした。

それから僕はどのくらい頭を垂れていたのだろうか。考えることをやめ、呆然とすることしか出来なかった。次に顔を上げた時には、前の方にあつた光は勢いをなくし、どんどん後退していった。その日は父さんと母さんと顔を合わせることも叶わず、家に帰ることになった。

「……はあ」

家に入って靴を脱ぎ捨て真っ先にリビングに向かった。僕はリビングのソファに体をうずめ、身をすべて任せた。無音の部屋の中、唯一沈黙を破っていたのは壁時計の音だけだった。

何も、やる気が起きなかった。

食べることも、寝ることも、考えることもすべて拒否し、何かを待つかのように目を閉じた。何度か携帯が鳴ったけれど、僕は取ろうとしなかった。僕は学校にも、修平にも、誰にも連絡はとらなかった。とれなかった。

また夢を見た。もういつ見たのかも定かではない。内容もわからない、ただ夢を見たということは確かだった。

僕は夢の中で願った。世界中の紛争が終わって欲しいとか、そんな大それたことではなくて、僕個人の願いだった。小さな　願い。それは僕のがままかもしれないし、傲慢な願いかもしれない。もしかするとそれは無意味かもしれない。

でもそれでもいい、と僕は願った。それが例え世界の定理がひっくり返すようなことでも、と僕は願う。

父さんと母さんを返してください。

僕はまだ伝えていなかった、あの人達に。

暗澹とする世界の中で僕は一人で蹲る。そこに誰かの声が僕の耳に入ってくる。懐かしくもない、うれしさもない。聞こえてきた声は聞いただけで、僕は戦慄した。声はどんどんと大きくなり、近づいてくる。僕は抵抗して耳を押さえるけれど、そいつの声は耳の中に割り込んでくる。

「ほら、捕まえた」

不気味に笑ったそいつは、僕の耳元でそう囁いた。

半日ほど起きているか寝ているか曖昧な生活をしていると、学校の先生と修平の二人が一緒に家にやってきた。二人は僕の顔を見たりすぐに顔を青くして、裏で合わせたかのように「とりあえず学校にいこう」と僕の肩を掴んだ。僕は何も考えずに頷いた。

翌日。

久しぶりに学校に赴いたその朝に不幸は音沙汰もなく訪れた。ポケットにある携帯がけたたましく鳴り響いた。携帯のディスプレイには病院の名が刻まれていて、僕はすぐさま電話を取った。電話越しには慌しい音と、早口に看護師の声が耳に入る。

「今、お父様が」

ああ。

体の何か、心の糸が切れたような、鈍い音が内側から聞こえた気がした。看護師の人の慌ただしい声、それだけで僕が受話器から離すのは十分だった。僕はかばんを投げ捨て学校から飛び出した。病院までの記憶はほとんどなかった。多分、必死だったから。閑散とした病院の中、僕は迷うことなくうるさい足音を立てて、

足を進めた。目的の病室の扉を開けると、医師も看護師は僕が到着したことに気がつかずに蘇生術を繰り返していた。

「心拍数、戻りません！」

一人の看護師が心電図を見て叫ぶ。先生は僕の姿に目をくれずに心臓マッサージを繰り返す。僕は病室の中に入る。

「なにこれ、嘘でしょ……？」

僕の目の前に広がっていたのは現実とは思えなかった。

「やめて……」

先生と看護師の人達は、僕の存在に気がつかない。

「やめて、よ……」

先生と看護師の言葉が病室内に飛び交う。僕の言葉はすぐにかき消された。

「もう、やめてよっ！」

僕が叫んだ。すると病室にいた全員は思わず手を止めた。僕はベッドに駆け寄って父さんの周りにいた人達を追い払った。そこにいた全員を僕は睨んだ。

「もうこれ以上、父さんに触らないで……」

これ以上父さんを苦しませないで欲しかった。機械にがんじがらめになった父さんはとてもじゃないけど可哀想に思えた。動けない父さんをいいことに好き放題されているのを見るのが僕にはつらかった。

「……わかりました」

僕と唯一目を合わせていた先生はそう淡々と言った。先生は胸ポケットからペンライトを取り出し、父さんの瞼を開けて目をこらした。

もうやめて、なんて言えなかった。

もうわかっていた。もうこの状況がどんなことになっているのか、これから何を言われるのか。僕は何もかも遅すぎたんだ。先生が瞳孔を確認すると一回だけ首を横に振った。看護師が時間の仔細を読み上げる。九時十三分、心停止、および心拍機能の活動が見られな

かったため、と何かメモ取りながら。

「父さん……」

僕は帰らぬ人となった頬を触れる。手のひらの感触はざらざらしていて、それが父さんだと分かる。けれど父さんの顔は別人の様に白かった。まだぬくもりのある頬は父さんが死んでしまったことに、僕は理解できなかった。ただ父さんの穏やかな顔を見つめていた。

感情は何もわき上がらない。僕は涙一つ流すことなく父さんの顔を見つめる。それが自然の摂理で、当たり前のことかのように。

「……ああ」

でもこれだけはわかっていた。捕まってしまったんだ、と。

深い、深い　闇の中に。

父さんは死んだ。誰にも見取られずにたった一人で。病室という閉鎖的な空間の中で、父さんの人生は静かに幕を閉じたのだ。

もう一つ嫌なニュースが入った。

母さんが脳死状態だということを知らされた。僕は特段に驚きもしなかった。でも悲しかったし、声を上げて泣きたかった。けれど現実の惨状に、僕の頭は理解が追いついていなかった。

患者で溢れかえる廊下を渡り、僕は母さんのいる病室まで向かった。仰々しい扉を開けると、そこには森閑の森を彷彿させるような空間があった。まるでそこだけ時間が止まっているかのようなパイプ椅子を引つ張りだして僕はベッドの横で母さんを眺めた。

僕は手を伸ばして母さんの腕に触れるけど何も反応しないどころか、指は一つ動いてくれなかった。窓の外はじりじりと太陽が暑さと元気を振りまいていた。母さんを見つめていたけれど僕の焦点はどこにも向けられていなかった気がする。

「ああ、疲れたよ……母さん」

僕の中で何かが壊れる音がした。

凜花は泣いていた。

いつもの公園で、いつものベンチで、凜花は大粒の涙を砂利いっぱいに吸わせていた。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

何度この言葉を繰り返しただろう、今まで何度こんな事を繰り返したのだろう、と凜花は自分の不甲斐なさを痛感していた。

西尾公園には誰もいない。公園から見上げる夜空からは月だけが、その月明かりさえも凜花を慰めてくれなかった。さらには木枯らしまでも無作為に凜花の体を痛めつける。凜花は絶望と悔しさに打ちのめされる中、立ち上がった。

「まだ……まだ、終わっていない……」

そうだ、こんなところであきらめてはいけない。凜花は口内にしよっぱさを感じながらも、歯ぎしりをたてるほどに強く噛み締めた。「願いは、まだ終わっていない」

「律君！」

父さんが亡くなったことの知らせを受けて一番に駆けつけてくれたのは、近所に住んでいる親戚のおじさんだった。おじさんは他の人はまだ仕事だから、と残念そうに顔を歪めた。

おじさんは僕に顔を合わせると、すぐにどこかに行ってしまった。何やらお通夜や葬儀社、その他にも病院の手続きがあるらしく、そのまま僕を病院の廊下に残した。僕は病院のソファに腰を下ろし、頭を垂れ、疲れた体を休めた。けれどそこからはゆっくりしている暇なんてなかった。その日の夜からお通夜、三日後に葬式、出棺と僕は忙しかった。葬式の時、修平と顔を合わせたけど、ほとんど会話を交わすことはなかった。

忙しかった、本当に。

だからかもしれないけど、僕の中で悲しみは一度もわき上がらなかった。葬式の時も、納棺している時も。悲しかったけれど、次はどうしようと、常に何かに追われて頭がいっぱいだった。僕と親戚の皆がようやく落ち着いたのは火葬場で父さんの体が焼かれた後のこと。皆は僕の家を集まり、僕はそれまでお世話になった親戚の皆をもてなししていた。

「僕、飲み物持ってきます」

ちょうど飲み物がなくなっしまい、僕はダイニングまで飲み物をとりに行っていた。皆は玄関を上がって、すぐ右手のリビングに集まっていた。僕は飲み物を取ってリビングまで戻ろうとすると、何やら皆は神妙な面持ちで背中を丸めて話しているところが見えた。……何を、話しているんだろう？

皆の真剣な表情が怖くて咄嗟にリビングとダイニングの間に身を隠した。

「どうすんだよ、あの子？」

「うーん……」

「それは後で考えればいい。それよりも遺産の相続は……どうする？」

「通例は配偶者である母親がもらうはずだが、今はあんなだし……ということとは実質的にあの子にほとんど渡るわけだ。兄弟である俺に幾分か取り分があるはずだが、雀の涙ほどでしかない」

「そうだよねえ……」

うーん、と再びその場にいた全員が頭を捻った。すると一人が「あ」と声を上げた。

「じゃあ、あの子を迎え入れれば、それだけで遺産のほとんどがもらえるということ？ どうせあの人も……長くはもたないでしょ？」

「それにあの子はもう高校生だし、教育費もあまり……」

「なるほど」

「じゃあ、私が受け持つわよ」

一人が勢いよく席から立ち上がった。床は振動し、机のコップが

僅かに音を立てる。

「いやいや、僕が」

「あんたは関係ないだろ。ここは長男の俺に責任があるっ」

全員がソファから立ち上がる。さっきまでの神妙の空気はなくなり全員が感情を露わにしていた。と、僕はここで持ってきたお茶を床に落としてしまった。そして全員が口を噤み、一斉に僕の方を見た。一瞬だけしまった、という顔を全員はしたけれど、すぐに皆は僕に笑顔を振りまいた。

「り、律君。良かったらうちの家に」

親戚のおじさんは緩くなった顔のまま僕に近づいてくる。僕はそれがとてつもなく 怖かった。

僕は身を引いた。

「ねえ、どうせならうちにくればいい」

「いや、律君はうちの大切な親戚だっ。だから、俺の家に！」

三人は同時に迫ってくる。フロリングの床が摩擦音を立てて、ダイニングの照明がちかちかと頼りなく僕を照らす。僕は一步下がる、けれど皆は二歩踏み出す。そしてついに僕の背中は壁に行き止まり、それ以上後退することが出来なくなった。

「ねえ、どうする。律君？」

皆は僕を見て笑う、興奮と期待の感情を顔にすべてぶちまけて。目にはぎらぎらと激情が溢れていた。僕はこんなにも人が恐ろしいものだと初めて知った。

「どうせならうちに来ないか？」

「なあ、律君」

けれど。同時に僕の中で煮え立つもう一つの感情が出てきた。

「……くるな」

自分の口から出たとは思えない、鋭利な言葉。

「くるな！」

許せなかった。父さんのこと、母さんのことを粗末に扱うことも僕を道具呼ばわりすることも、全部。さっきまでは厄介者扱いして

いたのに。僕は皆がすごく腹立たしかった。怒りが僕の中で渦巻き、感情を隠すことなく皆をにらみ付ける。

「……こっちへ来るな！」

「え、律君……どうしたんだい」

優しい声音、ただどその裏に隠された醜い欲望は僕の目にははっきりと見えていた。僕は机の上にあった鋏を取り出し、刃を開いて迫り来る大人達に突きつけた。

「お前等なんて帰れ！」

「り、律君……」

怪訝そうに見つめる目、困惑する親戚達。僕はもう止まらなかった。

「帰れ、帰れ、帰れ！　ここは父さんと母さんの家だ！」

右手に持っている鋏を横に一線、空気を裂く。すると皆はびびって何歩も距離を取った。

「律、君」

「うるさい、うるさい！　どっかいけよ皆！　ここは僕の家だ！」
さらに左右に鋏を振る。皆はさらに驚き、近づくことをしなかった。僕はこれ以上近づいたら斬りかかるつもりだった。皆は口を閉ざし、息を呑むほどに緊迫した状況に置かれる。

微妙な緊張が走る。そんな中、

「……もういい」

父さんのお兄さんにあたるおじさんが頷いた。

「こんな出来損ないの息子。誰が預かるか」

おじさんは僕を軽く睨みつけ、リビングから出ていった。僕はおじさんがリビングから出ていく最後までしっかりと見た。再び訪れる静寂、僕は二人に視線を定めた。おじさんが機先を制したおかげか、二人は後退していった。

「ねっ、律君。また来るから考えておいてね」

「何か困ったことあったら、おじさんが手伝うから」

そう言いながら僕に背中を向けることなく、ゆっくりとリビング

から姿を消していった。僕は皆がいなくなるまで鋏を持つ手を緩めなかった。

やがてリビングの扉が開けると、ほとんど変わらないタイミングで玄関の扉も開いた音がした。激しく怒鳴り狂う声、慌てて靴を履く音。こちらまで聞こえてきた。すぐにリビングは静まり返った。

「くそ……」

手に持っていた鋏が照明に反射する。高ぶっていた感情と、保っていた緊張は静寂と共に切れ、手に持っていた鋏を床に落とした。同時にずっと張っていた心の糸が切れ、押さえていた感情がここに来て浮かび上がる。

すぐに目端から涙がこぼれてきた。

「くそ……うう」

そこから一気に慟哭に変わった。僕は泣いた。悲しくて叫んだ。でもそれは父さんが死んでしまったことじゃない。

「ごめんなさい……！」

僕は父さんに対してきちんと送ってあげられなかったことが、悔しかった。

晩ご飯はコンビニで買ってきたお弁当で済ませ、食べ終わるとそのままベッド突っ伏した。

僕は何もかも忘れたかった。暗闇に紛れば少しは落ち着くだろうと考えていたけど、実際はそうじゃなかった。目を閉じてても睡眠は一向にやってくる気配はなく、無限のように広がっている暗闇は僕を不安に縛り付けた。暗闇の中、僕は答えを探し続けるが結局見つからず、僕をずっと悩ませた。そして気がついたときには、一条の光が差し込んでいた。

「朝……」

もう出ないと行けない時間だった。

倦怠感が抜けない体で支度をすまし、何も口にせず玄関を出ようとした。靴紐を結んで、立ち上がりうとした時、僕は振り返る。そ

こには母さんが最後に手を振っていた時の面影がそこにあつた気がした。

玄関を出て外に出る。太陽は燦々と光を降り注いでいたけれど、気持ちは一向に明るくはならなかった。それどころか、悲しみだけがでてきた。

呻き声みたいなものが自分の中から聞こえてきた。泣きそうだった。胸の奥からこみ上げる感情に押されかけ、自分で胸を叩いて痛覚でごまかそうとした。でも体は正直で必死で止めようとした感情は溢れようとしていた。視界が滲み始めていた。

だから僕は 走った。

「あああああ！」

自転車を取り出して全力でペダルを踏み込んだ。車輪は回転を始め、数回漕いだけでトップギアまで入る。僕は自分の持ち合わせている力と、感情をすべてペダルにぶつけた。そうしていなければ駄目になってしまったと思ったから。

流れる景色はいつもよりも倍に、吹き出る汗もいつもよりも多く、そして学校にはすぐに着いた。普段よりも早い時間に着いた僕は一直線に教室に向かった。教室にはもう何人かが来ていて、うるさかった。クラスはテレビの話、趣味の話、様々な会話が飛び交っていた。

「なあなあ、知っているか。浦山の親がさ……」

その中の会話の一つに、なぜか僕の名前が入っていた。教室の端っこにいた複数の男子のグループが僕を軽く指さす。

「……………」

僕は複数の男子を見返すと、そいつらは全員僕から顔を反らして気まずそうに黙った。僕は何も言い返すことなく、黒板を見つめていると、またも僕の話をしているのが聞こえた。

聞き覚えのある名前と内容はすぐに耳に入った。あまりにも軽薄すぎるその言葉は不快感と吐き気が一気に押し寄せる。なんでそのことクラスの子が知っているのかわからない。

「おい、今の誰だ！」

修平の怒号が教室に反響した。噂話をしていた生徒は修平の声音にびくつき、一步二歩後ずさりした。

「……っち、川瀬かよ」

なんでお前が、と男子達は修平を睨む。が、修平はひるむことなく、

「お前ら、ふざけんなよ！」

修平の怒鳴り声が教室中に響き渡る。皆の会話は途絶え、男子達と修平を見つめていた。立場が弱くなった男子達は皆クラスの視線を嫌い、口を閉ざした。そこに修平はさらに追撃をかける。

「なんだよ、ちゃんと律に謝れよ！」

そこにタイミング良く教室の扉が開いた。大塚先生が入ってきた。先生は入ってくるなりいきなり「ちゃんと席につけよー！」と生徒を一蹴した。皆は先生の言うとおりに席に足早に戻り、あわただしくホームルームが始まった。

その日の授業はあつという間に終わってしまった。僕は誰もいなくなった教室を見回していた。皆はもうとつくに帰ってしまったている、修平も皆も。僕は誰もいない教室で一人、やるせない気持ちだけになっていた。僕は静かに立ち上がる。

「……帰るか」

自転車置き場にある自転車は一人で寂しそうに佇んでいた。自転車を引っ張り出して椅子にお尻を置き、右足で半漕ぎ蹴った。ぐんとタイヤは回りだし、そのまま慣性に身を任せた。程よいそよ風が着衣の間隙をすり抜け気持ちがいい。感傷に浸ることなく、浮くような気持ちのまま公園の前を通りすぎようとする。と、僕は思いきりブレーキを勢いよく踏みこんだ。

「……なんで、また」

凜花がそこにはいた、いつものベンチに座って。なんで、どうして、いつもあそこにいるんだろう？　まるで、落ち込んでいる僕を

元気づけるかの様に、いつもそこで僕を待っているみたいだった。

「あ、律」

気がついた凜花は手を上げて僕を呼んだ。僕は自然と凜花の座っているベンチに吸い寄せられるように走っていた。

「なんで、まだ、ここに」

「……ごめんね、律」

「え？」

凜花はいきなり僕に謝りだした。僕にはよくわからなかった。凜花はずっと顔を俯き、顔を合わせてくれもしない。

「何にもできない、私……」

「何のこと？」

僕は凜花が謝っているのかわからなかった。凜花は口を嚙み、押し黙った。長く、重たい沈黙だった。でも僕はむしろ凜花に感謝をしているくらいなんだ。すると凜花は顔を上げて、少しだけ顔を綻ばせた。

「……ごめんね、こっちの話。なんでもないっ」

何か聞きたかったけれど、何も聞けない笑みを凜花は僕にした。逆にそんな顔を見せられると何にも聞けなくない。重苦しい空気の中、僕は自分の足下ばかり見ていた。

「ごめんね」

凜花はまたも謝った。そして今度もどこかぎこちなく笑う。凜花は何か逡巡して何かを言おうとしていることがわかった。僕は凜花の言葉を待つと凜花は口を開いた。

「ねえ」

凜花は身をよじり、まっすぐに僕の瞳を見つめた。

「律はさ……お母さんが好き？」

唐突だった。

「え、急に何？」

僕は病室のベッドで横たわっている母さんを思い出す。凜花は僕の身にどんなことが起こっているのかは知らない。父さんのこと、

母さんのことも、ましてや親戚のことも。

「ねえ。どうなの、律？」

僕は適当に答えようと思ったけれど、凜花のじりじりと距離を詰めてくる態度に誤魔化しの言葉は聞かないと思った。だから僕は、

「……………わからない」

紛れもない、僕の本心を言った。僕は凜花から視線を嫌った。

「……………どうして？」

凜花は僕に問う。けれど僕だってよくわからなかった。

「わからないんだ」

本当に僕はわからなかった。僕は確かに父さんと母さんのことは悲しい。でも、僕は未だに本当の意味で父さんと母さんに対して、涙を流していない。なぜなんだろう、どうしてなんだろう。

それは僕が二人のことを好きだったと言えるんだろうか？

「え？ でも、律のお母さんだよ？ 親子なんだよ」

凜花はさらに僕を問い詰める。けれどいくら問い詰めても今の僕にはわからない。

「僕だって」

「え」

「わかんないんだよ！」

僕はベンチから飛び出していた。凜花を置いて、全力で。僕は逃げた、凜花に答えられなくて、そして自分からも逃げた。僕は公園を出る前に一度だけ振り返った。凜花は腰を浮かせベンチから立ち上がった。いた。

遠目からでもわかった。凜花はとてもつらそうで悲しい顔をしていた。

その夜、夢を見た。

真紅に染まった世界、そこには一切の壁など存在しない終わってしまった世界。立ち上がるうとするが叶わない。指先一つ動かそうとするが、金縛りで動くことを許さなかった。

ぐしゃ。

何かが壊れる音がした　右腕が爆発するような感覚に陥る。それは紛れもなく自分の腕だった。一拍遅れて痛覚と電流が駆け巡る。「はっ、っはあ！」

声にもならない声で酸素をすべて吐き出した。誰かに踏まれている……いや、何か重たいものを直接落とされた感覚だった。続いて、左足。

「あぁっ！」

左足の神経が根こそぎ持っていかれたのか、左足に痛覚はなかった。代わりに残った四肢に痛覚がすべて流れ込む。呼吸しているか分からないほどに息を荒げ、痛みを必死にこらえた。僕は息を吸うことの上下運動しか許されなかった。僕の腕はおそらく血しぶきをあげているだろうが、視界は真紅に染まった世界で、全く何もわかない。ただ痛覚だけはやけにリアルにはつきりと伝わってきた。

「あああああ！」

どれだけ声をだそうと誰も助けは来ず、次第に助けを求める懇願から卑屈な叫びに変わる。容赦ない攻撃は少しずつ体を壊していった。右腕、左足、右足、左腕は粉碎され、肝臓、肋骨はほとんど折られ、無残にも腸が飛びでていた　それなのに、なぜか意識ははつきりとあった。

「……寒い」

痛みは限界を超え、なぜか凍えるような寒さの感覚だけ支配した。そこに誰かがつぶやいた。

「……ここか」

容赦のない攻撃は最後に僕の心臓を一突きした。生々しい肉をえぐる音と一緒に、意識は飛んだ。

目が覚めた。

けれどいつものように上手く起き上がれなかった。体がだるく、どこか頭も痛い。でも熱っぽいわけでもない。僕は理由なく学校を

休むわけには行かなかった。学校の用意を持った僕は玄関の前で凝然と立ち尽くした。

「いつてきます」

当然、返ってくる言葉はなかった。そんなことはわかつているはずなのに。その日は学校に遅くについてしまった。学校の駐輪所に停めた時にはホームルームの始まりの予鈴がなっていた。僕は遅れて教室に向かい扉を開けようとするが、そこで止まった。

「なんか、嫌だな……」

またクラスの皆に何か言われるのだろうか。修平が何か言ってくれるかもしれないけど。……でも、間違いなく何か思われる。それなら、と僕は教室から踵を返した。廊下を抜けて階段へ、そのまま学校の屋上へと向かっていった。

屋上へと入る鉄扉に手をかける。ゆっくりと開けると僅かな間隙から風が濁流のように漏れ、ちょっと引いただけで扉は豪快に開いた。強い風が屋上一帯を吹き返し、枯葉はその中心で渦まいていた。屋上には誰もいなかった。

外を見回せばそこら周辺の景色が映っていた。端にある手すりまで近づき景色を眺める。クラスから見える景色とは違い、少し眺めていると気持ちが悪くになった気がした。屋上から見える景色は無機質で自分が世界から切り離されてしまっている感覚だった。

ふいに空を見上げた。

空にはたくさんの雲があつてそこには微妙な変化があつた。本当に少しずつだが、動いているのだ。それを見て僕は面白い、と思つた。なんだか自分自身が生きているという実感を持てた。時間が確かに進んでいるということを感じられた。大空はどこまでも広く続いている。

ふわりふわり、と。

僕は手を伸ばす。あそこにいければ、今の気持ちから解放されるだろうか？　こうやって考えることもなくて済むのだろうか？　でもこの気持ちはどこに行つてしまふのだろうか。

……わからない、僕にはわからなかった。

しばらく流れゆく雲の様子を眺めていると、やがてぷつん、と雲が途切れまっさらな青空に変わった。ちょうど僕の集中も切れたよう
うで　もう帰ろう、と至った。屋上から降りて僕は真っ先に職員
室に向かった。楓先生は僕を見るなり「あれ？」と声をあげた。僕
は先生の机の前に歩き出した。

「先生、僕早退します」

楓先生は僕の目を一線射止め、そして僕を何も咎めることなく頷
いた。

「わかった、教頭先生や他の先生には私から話しておこう」

「……先生、すみません。今日はなんだか気分が優れなくて」

「うん、わかった。一人で帰れるか？」

「大丈夫です」

「そうか。帰り道、気をつけなさい」

真っ直ぐお家に帰るんだよ、と念を押されて。

「ありがとうございます」

僕は先生に一礼をして職員室を後にした。退室前に見た時計はも
うすぐお昼休みの時間を告げていた。後数分で授業が終われば校内
は喧騒に巻き込まれる。その前に僕は早々に学校を出よう、と足を
速めた。

自転車を手に引いて学校の外に出れば、背中には皆の喧噪が聞こ
えてきた。それにも拘わらず目の前に見えていた昼前の街は閑散と
していて、静かだった。皆はどこに行ってしまったのだろう。僕は
のどかな田舎道を自転車でゆっくりと走り出した。

そのまま家に向かう途中で僕は自転車のブレーキを力いっぱい押
した。

「……なんで、また？」

公園のベンチにはなぜか凜花が、いた。

凜花は黒い長い髪に、白いレースのスカート、その上には肩筋か
ら胸元にかけてフリルがついた白いワンピースを着ていた。彼女は

僕を見つけると、「律一っ」と呼んで手を挙げた。

「何をしているの、こんなところで？」

「何って？　こうやって律を待っていたんだよ」

「……学校は？」

「さぼっちゃった、あはは」

「……そっか」

どこことなく僕を安心させる凜花の笑顔。けれど昨日、彼女の笑顔が悲しい顔に変えてしまったことに僕の心は締め付けられる。

「あの……、昨日はごめんっ」

凜花にはひどいことを言ってしまったと思う。それに大きな声で凜花を怒鳴ってしまった。僕は凜花を傷つけてしまった、あんなに悲しい顔は見たくはなかったのに。凜花は僕の気持ちをすべて察したかの様に柔和に笑顔を浮かべる。

「うっん、私も悪かったんだと思うし。……とりあえず座らない？」

ばんばん、と凜花は隣の席へと催促する。でも僕は凜花の誘いを断った。

「うっん……今日は、帰るよ」

こんなところにいる余裕はなかった。僕にはこれからのことを考えると悠長に遊んでいられなかった。凜花の表情が一瞬だけ曇ったけれど仕方がない。僕は立ち上がろうとするが、その前に凜花が立ち上がった。凜花はそこに落ちている木の枝を手に取って土の上に複数の円を描いていた。

「……何しているの？」

凜花は僕の声に構うことなく土に円を描き続け、それを繰り返していた。やがて複数の円が僕らを囲むように一周し、凜花は枝をそつと土に置き、そして輪の中に自ら駆け出した。

「えいつ、やあつ、よつと！」

凜花は声を上げてスキップした。円が一つの時は片足で、二つの時は両足でぴょんぴょんと跳ねて円の中をぐるぐると回り出した。艶めかしい息を荒げながら凜花は円を一周する。凜花はちょうど一

周したところで足を止めて無言で僕に手を差し出した。

「えと……」

僕は戸惑いをみせながらも手をゆっくりと凧花に差し出すと、凧花は僕の腕を強く自分の方へと引っ張った。

「凧花、これ何？」

「やったことない？ ほら、一つの輪の時は片足でケンケンして、二つの円の時は両足で踏むの。それを繰り返すの」

「やったことない……って面白いの、これ？」

「んー、わかんない。でもいいじゃん、とりあえずやってみようよっ」

凧花は僕を置いて、先に円の中を回りだした。

「あっ！ ちなみスタートはそこだよ！ 律が鬼だから、私が三分間逃げ切ったら勝ちね！」

「え？ 鬼とかあるの？」

凧花はいつの間にか半周していた。

「ちょ、ちよつと待って」

「待ったはなしよ！ はい、もう十秒経ったわね！」

そう言っている間に凧花は円をどんどんと回ってゆく。僕は慌てて凧花を追いかける形で一つ円に飛び込んだ。

「わ、わかったよ！」

急いで僕は円の中に入り、猛スピードで凧花を追いかけた。

「えっ、はやっ！」

凧花は一瞬振り返り驚く。

「っは、はっ」

「ちよつと律、反則だよ、それ」

「えー、でもハンデがあつたじゃん？」

わざとらしく僕は笑う。僕は毎日の通学で足には自信があるのだ。すると凧花はむきになって、スピードを少し上げた。けれど僕の方が早く、半周の差はみるみるうちに縮んだ。眼前に凧花の背中が見えたとき、凧花は急にスピードをあげた。

「負けるもんかつ」

先ほどよりも数段早く凜花はかけた。僕よりも早く 圧倒的にふわりと軽やかな足取りで、どんどん先に、前に、進んだ。その姿は宙に浮いているようだった。

三分を知らせるアラームがなると同時に、僕の敗北が決まった。

「……負けた、しかも女の子に」

無理やらされた勝負事とはいえ、その上に僕は脚力には自信があった。さらには女の子に負けたという屈辱はトリプルの意味でショックだった。凜花はふたたびベンチへと座ると息を吐き、涼しんでいた。僕もまた整っていない息で凜花のすぐ隣に腰掛ける。

「凜花、なんでそんなに早いのか？」

「ふふ、内緒っ」

余裕の笑みを凜花は浮かべた。

「えー……」

「でも、律も早かったよ？」

「それ慰めになってないし……」

凜花がくすつと、笑う。僕もつられて笑う。公園の外灯も光が僕達を灯していた。そこで僕は我に返る。なんでこんなに楽しんでいるんだろう、こんなことをしている場合じゃないのに。僕は唐突に立ち上がる。

「……どうしたの？」

「……」

僕は凜花の問いかけに返事すらししない。

「ごめん、帰るよ」

凜花は黙って何もいわなかった。僕は振り返ることなく、歩きだすと後方から声が聞こえた。

「また、明日」

一瞬ぴたりと歩を止めるけど、僕は再び歩きだした。

僕の日常は今や非日常になりつつあった。

夜になれば眠気がやってくるはずだが、そんな日常はない。目覚まし音が夢うつつの状態から現実へと無理やり引き戻した。反射的にアラーム停止ボタンを押す。時計はそろそろ登校しないといけない時間を指していた。

「……もうこんな時間か」

まだベッドに入ってから少ししか経っていないように感じた。体を起き上がらせると、いつも以上に疲れているのがわかる。体が重い。でも日常はとまらなくて時間だけは刻一刻と進んでいく。それは僕だけが例外ではないんだと、わかっていた。

『おはようございます』

一階には昨日付けっぱなしにしていたテレビから声が聞こえてきた。画面越しのアナウンサーが今日も快活に挨拶をしている。声は部屋中に反響して、僕の心身まで響かせた。

僕は、これから一人だ。

もう立ち止まらない、誰も助けしてくれない、もう一人なんだ。一人では広すぎる部屋を見渡して思った。僕は 強くならなきゃいけない。それも今すぐにそうしなければいけない。僕は一人で朝の準備を済ませ、玄関を飛び出した。僕は玄関を出て、家を振り返れば、そこにはまだ家族があったという欠片が残っていた気がした。先ほど決心した思いが一瞬にして揺らぐ。

「あ……」

手に持っていた自転車のグリップを強く握りしめる。感情が溢れ、視界が徐々に不鮮明になる。溢れてきた感情は涙に変わり、ついには頬から涙がこぼれようとした。その寸前に誰かが僕のまぶたをふさいでいた。

「だーれだ？」

陽気で明るい声。聞き覚えのある声だった。

「あつ、ひどい。本当にわかんない？」

ぐりぐりと頭をこすりつけてくる。知らないわけがなかった。

「……凜花」

「うん、そうだよ」

凜花は視界に現れ「ん？」と彼女は首をかしげながら僕を伺っていた。

「あつ、大きなあくびしていたでしょ？」

凜花はポケットからハンカチを取り出して、僕の涙をふき取った。
「だらしないなあ、もう。律、学校にいくよ！」

凜花は僕の手を強く握って、駆け出した。凜花の長い髪は激しく乱れて統制を失う。最初は凜花についていくことが必死だったけど、振り返る凜花の笑顔につられていつの間にか自分の足で走りだしていた。

凜花は律を学校に送った手前、これからどうしようか決めあぐねていた。

「どうしようかな……」

凜花の背中はずらざらとしたモルタルの壁に預けていた。凜花は何度も左後ろに意識を向けていた。そればかりではなく、見るからに怪しそうに何度も視線を送っている。その先にあるのは学校、自分とあまり変わらない同年代の子が校門の中へと吸い込まれてゆくのを凜花は食い入るように見つめていた。

「入ってみたいなあ」

そんなことを凜花は思う。だめだめ、と首を左右に振って顔を上げた。と、凜花が見たのは制服を着ていた複数の訝しむ目だった。歩いていた人は見るからに、不審者の彼女を怪しんで見ている。その上、彼女は私服だ。どうして平日に一人で出歩いているんだろう、と凜花を見る視線はさらに疑問は深まるばかりだった。

「す、すみませんっ」

凜花は顔を真っ赤にして踵を返す。彼女はため息一つ、誰もいない壁に向かって吐き出した。その行為はさらに怪しさは増していた。「だ、駄目よね、私この学校の生徒じゃないし……」

ぶつぶつと凜花は壁に向かってしゃべりかける。諦めの悪い彼女はもう一度校門前に視線を泳がせた。校門前には上下ジャージのガタイのいい男の人が入ってくる生徒達の風紀チェック、さらには学校周囲に不審者がいないか睨みを利かせていた。

「やっぱり駄目……かぁ」

凜花が再びため息をついていると、

「ねえ」

後ろから声をかけられ、凜花は驚いて振り返った。

「あなた、ここの生徒じゃないよね？ 何しているの？」

制服 凜花は声をかけてきた一人の女子生徒の制服が目映る。

「あの、聞いている？」

凜花は顔を上げる、さきほどよりも幾分驚いて。

「す、すみません！」

凜花の口からはそんな言葉しか出てこなかった。男の子の様なショートカットをした女子生徒は「いや、別に私はいいんだけどね」と苦笑いを浮かべた。端正な顔立ちの女子生徒は笑うと爽やかな感じに見えた。

「で、何をしているの？」

ずいっと、小麦色の肌が凜花に近づく。凜花は慌てる。

「ごめんなさい！」

凜花は身をよじりながら立ちはだかっている女子生徒の脇を抜け、そのまま逃げるように走った。

「ちよつと待」

女子生徒は振り返って呼び止めようとする。が、彼女は絶句した。白いワンピースをした女の子は学校の外堀を遙か飛び越えて跳躍していたのだ。ふわり、と人間離れた女の子に対して女子生徒はこ

う感想を口にした。

「あの子、何者？」

同刻。

川瀬修平は口うるさい教師から茶髪を指摘され、ふて腐れながら校舎へと歩いていった。

「つち、めんどくせえ」

悪態を吐き、ふと顔を上げた。と、そこにはありえない光景が修平の視界を横切っていた。

「なんだ、ありやあ……」

修平は言葉を忘れてしまっぐらいに驚いた。

校庭の真上の空をふわふわと一人の女の子が横切っていたのを修平は捉えた。女の子はそのまま校舎の屋上の方へと向かっているのが見えた。修平は最初、UFOかと目を疑ったが、やっぱり修平の目に映っていたのは一人の女の子であった。同じぐらいの年の白いワンピースを着た女の子。

天使みたいだ。

そう修平は思った。けれど修平が口にした言葉は違った。修平は地上、女の子は修平の真上の空。すると、必然的に修平が見たのはワンピースに下に履かれた布。

「パンツ」

純白のパンツだった。

僕が勇気と会ったのは結構前だったけれど、久しぶりに再会した時の言葉は僕の予想外だった。

「律、律、律、律！ あ、その、お、女の子が！」

教室の扉をぶっ壊してしまうぐらいの勢いで教室に入ってきて、僕の席へと駆け込むように走ってそんなことを言っていた。

「……はあ、はあ……女の子……が」

どうやらかなり急いで走ったきた様で勇氣は息が上がっている。少しは女子らしく振る舞った方がいい、そんなことを考えながら勇氣を見つめていた。

「え、何」

「いたの！　そ、そう、女の子が！」

勇氣は僕の机に両腕を叩きつけた。小麦色の肌からは汗が吹き出て、机にじめりと滲ませていた。

「だ、だから女の子って」

そこに慌ただししい足音が一つ、教室に聞こえてきた。慌ただししく教室に入ってきた修平は「律！」と叫びながら走って僕に向かってきた。

「今、私と話しているんだけど！」

勇氣と久しぶり修平と会ったのにも拘わらず、怒鳴り声を上げていた。

「うつせえ！　俺だって律に用があるんだ！　それになんだよ、久しぶりに会ってそれかよ！」

二人はにらみ合う。けれどそれは一瞬だけで二人共ほとんど同時に何かを思い出したかのように首を振った。そして二人は僕に詰め寄って同時に言葉を吐く。

「女の子！」

「パンツ！」

僕には何のことがよくわからなかった。

お昼休みになると僕は購買部へと向かった。無事に欲しい品を手にとってそのまま最上階へと足を運んだ。右手に牛乳パックと、左手には総菜パン。階段の行き着く果てには鉄扉の扉が僕を待っていた。

ゆっくりとドアノブを回す。

「うわっ」

ドアを開けるといつきに風が吹き込んできた。吹き付ける強い風は僕の体に一瞬留まり、最後には体を通り抜けた。身体は新鮮な空気を纏い、体が喜びに満ちていることがわかった。細胞が活性化している感じだった。

屋上には誰もいなかった。僕はふらふらと歩き適当に場所を決めて床に座り込んだ。そのままごろり、と寝そべる。

「冷たっ」

外に晒されているタイルは冷たい。さすがに十二月は無理があった。けれどしばらく仰向けに寝転がっていると体は慣れてひんやりとしたタイルは気持ち良くなっていた。

僕は空を見る。

大きい雲、小さな雲、飛行機の軌跡が生んだ不思議な雲、そしてスカイブルーの青空。それだけでなんとなく気持ちが落ち着いてくる。いつのまにか、お昼休みにこうやって雲を見ることが日課になりつつあった。

「ここはやっぱり落ち着くな」

目を閉じる。体の力を抜く。考えることを停止させる。

真っ暗な闇が僕の目には見えただけれど何も不安はなかった。体には風が吹き付けるのが感じる。けどその感覚すら少しずつ感じなくなってきた。体が軟体生物になっていく様に感じ、手足の感覚は徐々になくなっていく。

屋上に降り立った凜花は自分の軽薄な行動に後悔をしていた。

「やつちやつたよお……」

凜花は壁に向かって何度もため息を吐いていた。凜花のいるその場所は屋上の上の給水塔だった。そこなら誰にも見つからなくて誰から変な目で見られることはない。凜花は壁に向かって何度も自分の不始末にため息を漏らす。

凜花はそうしてずっと屋上にいた。凜花は律のいる学校を見て回りたいと思ったが、今の凜花にそんな余裕などなかった。それに私服の彼女がいつ学校を歩き回ればいいのかわからなかった。幾度かチャイムが鳴ったことを凜花は耳にしていたけれど、はたしてどんなタイミングで回ればいいのか皆目検討もつかなかった。

「はあ……」

凜花は再びため息をつく。と、ここで屋上の扉が開く音が凜花の耳に入った。凜花は姿勢を低くして、屋上に入ってくる誰かを注視した。が、すぐに凜花の緊張はほどける。

律だ。

凜花のよく知っている律はきよろきよろと周りを気にしながら、屋上の先までうろつきながら歩いた。手には牛乳パックとパンを抱えて。律はそのまま適当に場所を決め、その場で寝転んだ。

え、何してるの！

凜花はここで身を乗り出して律に声をかけようとした。だが思いとどまる。律は寝転び、目を閉じた。凜花はそれを見て声をかけるのをさらに躊躇した。凜花はしばらく律の様子を見ていたけれど、律は相変わらず目を閉じて寝転がっていた。

凜花はハシゴから降りて恐る恐る律に近づく。もし目が覚めてもバレないように後ろに回り込む。凜花は律の前に立って影を作ったけれど、本人は全く気がつくことがなかった。それどころか気持ちよさそうに寝息を立てていた。

寝て、る……？

くす、と凜花は笑った。なんて可笑しいんだろう、こんなところで一人で寝ているなんて。凜花は膝を曲げて、ひんやりとしたタイルに膝を付けた。そしてゆっくりと律の頭を持ち上げて、ゆっくりと自分の太ももの上に乗せた。

「ごめんね、律……」

律は凜花の太ももの上で寝息を立てて眠っていた。凜花は今だけでもいい夢を見せてあげたかった。凜花は手のひらに力を込めて律

の額にそつと触れる。凜花はせめての気持ちをたつぷり込めて、魔法のおまじないを律にかけた。

「……………」

すると律の表情はさきほどよりも穏やかになった。それはほんの一瞬の、ささやかな幸福の時間だった。

「ん、ん……………」

律は目を覚まして飛び上がって起きた。目を瞠目してぱちくりと何度もまばたきをした。

「え、え、ええ？　どうして凜花が……………」

「ん、駄目かな？」

凜花は答えもなっていないとぼけたことを言ってみる。すると律は不思議そうに凜花を見た。

「ええと、律の学校も見てみたいなって」

「え、でもどうして急に……………それにもうすぐお昼休みは終わっちゃうから　あ、予鈴が鳴っちゃった」

「ううん、大丈夫。ちよつと見たら私も帰るから」

「ふーん、そっか。ご、ごめん凜花、僕、授業にいかなきゃっ」

律は急いで立ち上がった。凜花から一步、距離を開けた。

「じゃあ頑張つてね」

「うん」

律は屋上から慌てて出ていった。凜花は律が階段まで降りてゆくところまで確認すると、立ち上がった。空は青く、屋上は今も強い風が吹いている。耳元に聞こえてくるのは風の音、階下の生徒達の声はここには聞こえてこなかった。誰もいない屋上、静謐を保っているその場所。

そして凜花がその場所の異変に気がついた時には、目の前の空間に一点の漆黒が広がっていた。

「趣味悪……………いつからそこにいたの？」

漆黒から表れた長身の男は凜花を睨んだ。男はちょうどアスファルトに足裏を届かせていた。

「ずっと前からここにいたよ」

凜花の目の前に大きな闇が形を成し、そこから人間の形へと形状を変えていった。

人間の形をした何かは悠然と佇立した。浮き足というより、浮いている様な感じに見えた。真つ黒い総髪に全身黒の服装、締まった顔立ちと、線の細い体つきをしている。彼はつまらなそうにこちらを見ていた。

「君さ、いつまでこんなことやっているの？」

「……そんな私の勝手でしょ？」

「ふん、そうだね。でも、気をつけた方がいいよ」

こいつと話しているだけで気分が悪くなる、早々に立ち去ろう。

「じゃあ、私は用事があるから、もう行くわ」

踵を返そうとする凜花に男は気になる言葉を投げた。

「へえ、用事なんかあったんだ？ せっかく、今日のイベントを話してあげようと思ったのに」

そういうと男はくすくす、と気味の悪い笑顔を浮かべた。凜花は思わず足を止める。

「イベント？ なんのこと？」

「急いでいるんじゃない？」

「……もったいぶらないで聞かせなさい」

「案外せっかちな、君は。もつとフレキシビリティがあるやつだと思っただのに……まあいいよ。教えてあげるよ。今日、一人が誘われるだけだよ」

「誘われる？ え、それって……まさか」

「その方が楽になるからね」

男はさらに相好を崩す。男はアスファルトを蹴り、ふわりと後方に飛んだ。重力の法則を無視して宙を浮き、そのまま少しずつ上昇していった。

「待ちなさい！」

「くくく、もう遅いよ。これは決定事項だ」

男の足下は少しずつ砂上の様に崩れ、最後には姿は跡形もなく消えてしまった。凜花は男の最後の笑みを見て、こうしている場合じゃないと思った。

「……本当はもうちょっと律の学校を見たかったんだけどね」
凜花もまた早々にその場から去っていった。

「よう、律。今日あいているか？」

その日の授業は終わり、時間は三時十五分。僕は帰ろうかな、と思つて立ち上がると修平と勇気が声をかけてきた。

「ほら、どうせ暇でしょ？」

「あー……………ごめん、修平に勇気。今日は母さんの見舞いに行かないといけないんだ」

勇気はきよとした顔で僕を見つめた。

「見舞いつて？」

「ああ、母さん今入院しているんだ……………」

「え、嘘！　じゃあ、私も見舞いに行かなきゃ！」

修平は勇気の前をさつと手を伸ばし、止めてくれた。

「ごめん、二人とも。今日はちよつと無理なんだ」

「気にするな律。俺ら友達だろう？　お前ならいつでも待っているよ」

「ありがとう、修平。ごめん、勇気」

勇気はむすつとした表情で修平と睨んでいた。修平はふてくされる勇気を無理矢理につれて教室を出てくれた。僕も少し遅れて、誰も居なくなつた教室から立ち上がった。

帰りには僕は西尾公園に寄つた。けれどそこには凜花の姿はいなかった。

「……………今日はいないのかな」

ちえつ、と心の中で舌打ちしていた。今日はなんとなく会いたか

ったんけど。

家に着くと、学校の用意をすべて部屋に置いた。一階の冷蔵庫に向かい、飲みものを取り出してコップに注いだ。そのままコップをリビングのソファの前のテーブルに置く。一日の疲れを吐き出すかのように一息ついて、僕はソファへと腰をかけた。すると、急に眠気に襲われた。

が、その眠気を一発で吹き飛ばすほどの出来事が起きた。
一階にある電話が鳴り響いた。

母さんの病室の前には電話をかけてきた張本人が立っていた。
「待っていたよ」

「西崎さん。どうしてここに……」

「そのことは後で話すよ、今は早くご両親の元に行ってあげなさい」
西崎さんを横目にすぐさま病室の中に入った。中にはベッドでうなだれている母さんとその周りに医師と複数の看護師がいた。僕は何か言おうとしたが、それさえも口にしてはいけない気がした。

「よくきましたね」

医師はとても優しい目で僕を見つめた。

「お母さんの症状は知っているね？」

「……はい」

「最後は……お母さんのそばにいてあげてください」

僕は頷くことしかできなかった。何となくこうなってしまったこと僕は予感していた。

「……すみませんが、母と二人つきりにさせてください」

医師と看護師は互いに顔を合わせ頷き、何もいわず静かに病室から出て行った。扉が閉まると音の残滓が僅かに病室に残った。誰もいなくなつた病室には僕と母さんしかない。

「母さん……」

僕の目に映っている母さんは僕が知っている母さんではなかった。真っ白い肌、血色の失せた顔。こんな母さんは見たことがなかった。髪にもつやなく、そこには生きていると感じすらなかった。けれど、逆にそれが現実味を帯びて僕に突きつけていた。

「お……母さん」

僕の声は震えていた。

「ごめんなさい……」

もう僕の声を抑える人はそこにいなかった。僕は他の人に知らないように、そして母さんに悟られない様に、静かに、深く、噛み締めるように泣いた。

僕は自分の無力さに、ただただ悔しかった。

突然、声が聞こえてきた。

背景をすべて黒に塗りつぶしたその空間の中で、僕の名前を誰かが呼んでいた。律、律と僕を呼ぶ声がある。

「……誰？」

聞き覚えのある、懐かしい声だった。そこに誰かの手が僕に向けて差し出していた。その女の子の顔はどこかで見た覚えのあった気がしたけど思い出せない。僕は女の子の手に応えなかった。それでも女子は必死で手を伸ばして僕の手を掴もうとした。お願い、と懇願する声が聞こえる。

僕は手を伸ばそうとしない。もう母さんのいない世界なんて、こんな理不尽な世界なんてあるもんか。僕は完全に心を閉ざそうとしていた。すると女の子は僕のおでこに口づけをした。

「……………え」

女の子は笑顔で、僕を見つめてくる。僕はこの笑顔を知っていた。僕は何も考えず、彼女の手を握る。二度と手を離さないようにしっかりと。そして二人で一緒に祈る。

母さんの無事を。

奇跡が起こった、と先生は言った。

僕も奇跡が起こった、と母さんの顔を見て喜んだ。

母さんは何とか持ちこたえてくれた。母さんの表情は先ほど見たときの表情とは違い血色はよく、肌も肌色を取り戻していた。いつの間にこんなにもよくなっていたのか、僕は覚えていない。

僕は夢を見た気がする。そう、彼女がいた夢だ。

医師は母さんが安定していることを確認して部屋を出て行った。

残った僕は安堵するように深く息を吐いた。相変わらず母さんの様子は大丈夫そうだった。根拠のない自信だったけれど、今この瞬間だけは安心していられる気がした。

ただ、一つだけ気になることがあった。

現実か夢かわからないけど、僕はさっきの出来事を思い返していた。彼女は僕におでこに口づけした後、僕に何度も「ごめんね」と謝っていた。でもそれだけじゃない。僕は彼女の手を握った時に彼女は何か呟いていた。聞きづらかったけれど確かにこう言っていた。

私は律とずっと一緒にいられないの、と。

二章

第二章 葛藤

なぜ、と男は繰り返す。

男は目の前に立つ少女に訝しみの意を込めて、目を細めた。

「……なぜお前はあの様な人間をそんなに庇うんだ？　今まで似たような人間を見て、そいつらを送ってきただろう？」

背丈の高い男はどこか憮然とした態度で自分に立ちふさがっている少女に問う。少女は力のある瞳で男を睨むと一回だけ首を振った。
「全く……相変わらず天使の考えはよくわからんな」

男は少女の体に纏っている光の粒子を氣にくわなそうに見て、半歩だけ身を引いた。

「……似ているから」

少女は言う。男は踵を返そうとして、振り返った。

「律は私と似ているから。……律には私と同じ思いなんてしてもらいたくない」

「それは生前の記憶か？　また随分と押しつけがましい話だな」

「そんなことはない、彼には救いが必要だわ。それに私、だって…

…」

「それが例え、結果が変わらないとしてもか？」

男の冷徹な言葉に少女は押し黙る。が、すぐに首を縦に振った。

「まあいい、今回は少しだけ大目に見てやる」

男は少女の後ろにいる昏睡している女性を見ると、くるりと反転した。

「結果は、変わらないさ」

空は青くて、広く、僕の手の届かないところにあった。

「気持ちがいい……」

だからこそ僕は安心出来たと思う、曖昧だったけれど、確かにそこに存在するのだから。

学校のお昼休み、僕は屋上で空を見上げていた。仰向けにひんやりと冷たいアスファルトに頭を置いて流れる雲を見ていた。目を閉じれば風が空気を裂く音さえも顕著に聞こえる。と、ここで一緒に階段を駆け音で上がってくるのが聞こえてきた。きい、と古びた鉄扉が錆びた音と共に誰かが屋上に入ってきた。

「律、いるか？」

「……うん、いるよ」

体を起こすと、修平が僕を見下ろすように立っていた。

「おはよう」

「うん、おはよう」

険しい怪訝そうな顔つきで僕の顔を見つめる。

「……今日、大丈夫か？」

「多分、大丈夫」

僕の前向きな台詞を聞くと、修平は険しい表情を解き、愁眉を開いた。

「よかった。じゃあ、今日の放課後に校門前でよろしく」

「……うん」

久しぶりで三人で遊ぼう、

幼なじみの勇気は旅行の興奮から冷めないのか、それとただの気まぐれがよく分からなかったけれど、勇気は僕と修平にそう言つて、話を持ちかけてきた。修平と僕は二つ返事で了承した。修平と二人で遊ぶことは今でもよくあるけれど、三人で遊ぶことは中学に上がってからめっきり減ってしまった。高校に入ってから僕達三人でどこか出掛けることなんて、初めてだ。

「なんか勇気が行きたいところがあるってさ」

修平も詳しいことは聞かされていないみたいなの口ぶりだった。

僕はその日、掃除当番だったので二人には待ってもらうことにした。掃除が終わり、駆け足で校門へと向かった。既に校門には修平と勇気は待っていてくれて、僕が二人の自転車に寄り添う様に並べると、すぐに歩き出した。

「結局、どこに行くの？」

「さあ」

先頭を走っている勇気の背中を僕と修平は自転車を並べて見つめていた。

「おっそいよお、二人共」

前をかつ飛ばしていた勇気が振り返って僕達に叫ぶ。ちょっと危なかったりする。

「うつせえー！」

修平は身を乗り出して立ち漕ぎを始めた。修平は勇気が何かを言う度に何かと意地になったりする。僕も二人に負けない様にと、ペダルを強くこぎ始めた。車輪の回転は増し、勇気の背中中は少しずつ大きくなってゆく。横の修平はぴったりと僕の横を走らせ、僕はどこかワクワクしていたんだと思う。

僕ら三人が向かった先は駅前にあるデパートであった。

「え、なんでここなんだよ？」

「いいじゃん別に」

ほらほら、と入口の前に突っ立っている僕と修平の背中を勇気は押した。店内は勇気が前を先導して僕らはその後ろについていった。勇気は行き着いたのは最上階のフードコートだった。

「勇気、行きたいところってここ？」

「うん」

「なんでこんなところに？」

修平は不思議そうにそう尋ねた。

「ん、なんとなく。懐かしいなーって思って。ほら、うちら三人でよくここで遊んでいたじゃん。」

「そりゃあ、まあ……」

確かに僕も三人で遊んだ記憶はあった。けれど、この年になってわざわざこんなところにこなくても、と思った。フードコートには数人の主婦集団と僕らぐらいしか見当たらなかった。フードコートの脇には雑貨洋品店が展開されていて、元のゲームセンターはもうその面影すらない。

「昔はこのゲームセンターでよくあそんだよね？」

「でも、もうないな」

修平はちよつと寂しそうに言った。

「うん、でもフードコートが残っていたからいいや。何か食べていこうよ」

「だな」

勇気はいくつかのお店の中からチェーンストアのラーメン店を選んだ。僕はメニューの中でラーメンをオーダーした。修平も同じのを頼んでいた。勇気はというと、一人ラーメンの大盛り頼んでいた。『そんなに食べるの？』

僕は勇気にそう聞いた。

「だって大盛りできる店舗ってあんまりないんだよ。だから大盛り食べないと勿体ないかなーって」

「……こいつの言っている意味がよくわからんのは俺だけか？」

「うん、僕も……」

「えー、律まで！ ふーんだ、物足りなくても知らないよ？」

つふ、と修平が薄ら笑いを浮かべた。

「その大盛りのラーメン、昔お前残していたぞ」

「そうだったけ？」

「それを残して代わりに俺が全部食べることになっていたぞ……。今日もし食べ切れなくても知らないぞ」

「今日は大丈夫、大丈夫」

あはは、と笑う勇気。始めは張り切って麺を嚙っていた勇気だったけれど、次第に顔色悪くなっていった。

「もうだめー、おなかいっぱい」

端を置いた勇気はあっさりと食することを諦めた。どんぶりにはまだ半分近く残してギブアップ宣言をしていた。

「なあ、勇気。俺がさっきなんていったか覚えてるか？」

「さあ？　おいしいとか？」

「うん、それは言ったな。いや、それじゃなくて、だな……」

「ん？」

はあ、と修平はため息をついた。修平は勇気のラーメンの方を指さした。勇気はその指を察したのか、自分のラーメンを修平に差し出した。修平は無理やり受け取らせられると、再び勇気の元にラーメンを返す。むっとした勇気はもう一度修平に渡そうとした。そのやり取りが何度も続き、ついには修平が口を開いた。

「おい」

「何さ」

「これはお前がちゃんと食べるんじゃないのか？」

「うん、食べたよ。でも修平がほしいんじゃないの？」

「そんなことは一言も言っていないのだが……」

「え？　でも指さしたじゃん。てっきり『そのラーメンよこせ』と言っているかと」

「んなこと誰かいうか、俺は野蛮人か。その残ったラーメンはどうするのかと聞こうとしたんだ」

「だから、はい」

勇気はどん、と修平の前にラーメンをおいた。

「私、これ以上食べられない」

「俺は最初に知らないって言ったんだが。……それにお前が言う『だから』の意味がわからない」

「ごめん！　やっぱ無理！」

勇気は手を合わせて修平にお願いしていた、なんの恥じらいもなく。

「待て。お前今日は全部食べると言っていたよな？」

「無理、無理、無理、無理！ 余裕で無理でした！」

「勇氣……いい加減にしろよ」

「な、何さ、食べられないって言うだけじゃん！ 今日とはまたま胃が小さくて、たまたま朝ご飯を食べ過ぎて、たまたま盛りラーメンが出てきたんだから」

「たまたま……ねえ」

はあ、と修平はため息をつく。

「……あーもうわかったよ！ 食べればいいだろ？」

「さっすが、修平、頼りになるよっ」

麵を勢いよく食べる音が聞こえる。しばらくすると修平は勇氣の分のラーメンを平らげていた。「もうおなかいっぱいだー」という声が修平から聞こえてきた。その後食器を洗い場に戻し、デパートの中を見ることにした。

四階建てになっているデパートには特に目新しいものはおいてはなかったけれども、それでも勇氣ははしゃいでいた。僕は一階にあるアクセサリーショップに興味があったので少し立ち寄ってみることにした。ショーケースの中にはたくさんのリングやネックレスがおいであつた。その中でも僕はスピードマークがリングの上に隆起しているリングに目が止まった。

「これ、かっこいいなあ」

そのリングは特に変哲もないリングでリングの中心に少し大きなスピードマークがあるだけのノーマルリングだった。

「何かお探ですかあ？」

僕がスピードのリングに興味を示したのを店員は見つけて近づいてきた。ふんわりと柔和な雰囲気で気さくに話しかけやすそうな女性の店員だった。くしゃ、と笑う笑顔が可愛い。

「ああ、thirteen'sですね？」

「……サートーンズ？」

「はい、有名ですよ。音楽界のエアロスマスのメンバーの一人が愛用されているんですよ？」

「へー」

「ちよつと見てみます?」

そういうと店員はショーケースから目当てのリングを取り出してくれた。僕は手にとると、その光沢さ魅了された。小指の第一関節くらいの大きさのシンプルなシルバーのリングに、中央には大胆かつ繊細に描かれたスピードのマークは一風変わった印象を受けた。

「やっぱりかっこいいな」

が、値段を見て驚愕。なんと一万六千円もするのだ。僕のおこづかいでも買える額じゃない。

「ええと、すみません。これ、ありがとうございます」

「あ、そうですか? 良かったら他のも見に行ってくださいね」

「は、はい」

僕はそそくさとジュエリーショップを後にした。そのまま店を出た後、二人と合流してデパート内を閲覧した。特にほしいものはないわけだけど、三人で話しながらデパート内を歩きまわるのは楽しかった。一段落したところで僕はデパートを出た。

「たまにはこういうのもいいかもな」

「ねー、楽しかった。律は?」

「うん、なんか懐かしかった」

僕はデパートを出た所で別れた。

「それじゃあなー、律」

それぞれの帰路に向かった。家に着くと僕は今日見つけた、指輪について検索をかけた。インターネットにはたくさんの指輪やネックレスが紹介されていた。

「やっぱりかっこいいな」

ついでにスピードの意味も少し気になったので追加で検索をかけた。検索の結果、“スピード”『剣』を表し、軍隊や王侯を意味していることがわかった。また通説には、スピードは季節の冬と表すもの、と書かれていた。またこれはおそらく迷信か何かと思うがスピードを関連させるもので“スピード”死”というのをヒットした。

「うわ、何これ」

確実な説がなかったため流言飛語の類だと思った。でも逆にどこからか分からない情報は僕を不安にさせた。気味が悪い。それから検索をかけるが、出てくる説は見つからず、どれも迷信的に不確かな情報に過ぎなかった。結局、それらしき説は見つからず、一息ついたときに時計を見た時、八時を回っていた。

「……そういえば、ご飯」

すぐさまご飯の用意をし、軽い夕食を作った。僕は一人でいるのは幾分慣れてしまったが、それでもこの広い家を使いこなすことには足らなかった。僕はその日、すぐ寢床についた。

そこは紅蓮の世界だった。

空はうす気味悪い彩色を放っている。首を捻って辺りを確認はできた。けれど、僕は全く動けない。金縛りにあっているのか、それとも誰かが動けなくしているのか。

始まった。

幾重にも重なって重々しい音が世界に満ちた。何かの僕の体に鈍器を叩きつけていた。鋭利な刃物を僕の体を突き刺していた。僕はその痛みに悶えた。声は出なかった。誰にも届くことはなかった。僕は攻撃に耐える中、相手の顔すらみることが許されなかった。僕の意識はどこか宙へ浮き、僕がいたぶられている様子が見えた。意識が宙に浮いたと思ったら、また僕は元の姿に戻っていた。体は元に戻り、痛覚は再びやってくる。それがずっと続いた。

朝は永遠にこないじゃないか、と思った。

「はあ、はあっ」

時計を見ると朝の七時前で目覚ましをセットした時間にはまだ早かった。それでも僕は体を無理やり叩き起こした。起き上がろうとすると体に少し違和感を覚えた。ちくりと刺すような痛み。

「……っ」

ベッドから降りると、そこで膝がカクンと折れた。そのまま膝をつく。するとちくり、とした痛みは電流が如く大きく、荒々しく身体を駆け回った。

立ち上がろうとする　が、上手く立てない。二、三度立ち上がろうとするが力が入らなくて上手くいかなかった。四度目でようやく立ち上がることができた。

「疲れているのかな……？」

最近は精神的に疲れている気がする。思い当たる節はないわけではなかった。僕は朝食を終えて、学校に向かった。学校に着いた時には朝に感じた違和感は綺麗になくなっていった。教室には修平がもう席に着いていた。

「おう、おはよ……って、どうした？　なんか、体調悪そうだぞ」

「そうかな？　そんなことないよ、全然平気っ」

「そう、か？　……ならないけど」

修平は少し安心した顔を見せると自分の席まで戻っていった。

その日の授業はあまり集中できなかった。昨日の夢のこと、スपीドの死についてずっと考えていたら授業が終わってしまった。

僕は自転車を引っ張って、一人で歩いていた。修平には先に帰るということを書いて帰った。僕は途中から自転車に乗ると、いつもの様に公園に向かった。凜花に会えば何か落ち着く気がすると思った。僕は凜花を見つけた時、内心ほっとした。凜花は今日も公園のベンチに一人で佇んでいた。

「おはよ」

凜花が僕に気付いて声をかけた。

「おはようって……もう夕方前だよ？」

「今日初めて会ったからおはようでいいのよ」

「そっか」

二人の間に沈黙が走った。でもそれは緊縛した空気ではなく、互いに何から話したらいいかわからなかったからだ。僕が先に口を開く　凜花に聞きたいことがあった。

「あの夢……凜花でしょ？」

自分でも何を言っているんだろう、と思った。僕はもし凜花が首をかしげたら、すぐに話題を変えようと考えていた。けれど凜花はこくん、と一つ頷いた。凜花はそのまま顔を合わせようとせず、申し訳なさそうに頭を下ろしていた。何で凜花が顔を上げないのかわからなかったけれど、僕は凜花に伝えたいことを告げた。

「ありがとう、凜花」

凜花は頭を振った、何度も何度も。

「うっん、私は何も……律のお父さんの時だって」

「父さん？」

凜花はしまった、と口を押さえた。目を丸くして僕の顔を伺う様に何度も視線を送り、そして言った。

「ねえ、律」

「ん？」

「……私はね」

凜花は唐突に話し出す。口ぶりは少しだけ逡巡があったけれど、言葉には力があつた。どくん、僕の心臓が鼓動を上げた気がした。

「あなたのお父さんに願われたの」

「……………」

かける言葉 そんなものは見つからなかった。意味がわからない、どういうこと？

「私はね、本当はいてはいけない存在なの」

凜花は強い意思を持って僕に話している様だった。いちゃいけない存在？僕は何の話かわからなかった。

「……ごめん」

凜花は謝った。既に僕は凜花の言っている言葉も、何で凜花が謝っているかわからなくなっていた。

「どういうこと？」

その言葉が僕の精一杯だった。凜花はようやく笑うと、語を継いだ。

「ごめん、いきなりだったね。そうだな……願い事を一つ叶えることが出来る天使みたいな存在なの……私」

「願いを叶える……？」

「ただ……その願いは人の最後のお願いごとなの」

凜花はつらそうな表情をした。自分の心臓の音がした。凜花のその言葉でパズルのピースが繋がり始めた。じゃあ、と僕は凜花に聞いた。

「……父さんの願いはなんだったの？」

「ええと」

ここで凜花が自らの口をふさいだ。

「ごめんね、これ以上は私からは言えない」

「……もしかして、さ」

凜花の言葉が僕の頭で連鎖した。父さん、願い、いちゃいけない存在　以前から感じていた凜花の持っている神秘的な雰囲気。僕の中で嫌な想像が出来上がる。

「凜花は……消えちゃうの？」

凜花は急に口を閉ざし、頭を下げた。

「……………」

長い沈黙と間だった。凜花はそれきり黙って微動だに動かなくなった。僕は横から凜花のいつもの様子とは違って、明らかに体がこわばっていることが見て取れた。

「……凜花、なんか言ってよ」

嘘だと言って欲しかった。

「ねえ、凜花」

冗談だと僕を笑い飛ばして欲しかった。

「ねえ！」

僕は大きな声を上げた。木枯らしが吹き付け、木々の葉が微かに音を立てた。

「嘘だ……」

凜花は動かない。黙って俯いて、僕の問いかけに首を振ろうとし

の奥底から痛みを感じ、心臓の鼓動が直接耳を当てているかの様に大きかった。体はその場で硬直した。

靴を脱ごうと右手を伸ばす手が小刻みに震えていた。腰を下ろし、靴を脱ごうとしたが、思うようにいかない。手も足も言うことを聞かない。苦戦して靴を脱ぐだけで十分程かかって、ようやく立ち上がろうとしたが、これもまた思いようにいかなかった。

体が、おかしい。

僕の体の歯車が合わなくなっていた。自分が自分になくなっていくような感覚は怖くなった。

僕は、おかしくなってしまったのだろうか？

僕は本当にどこにでもいる学校生活を全うするただ高校生だった。ただ当たり前の世界が広がっているはずだった。それなのに。を踏み外した覚えはないのに、僕の世界の地盤は崩れてしまっていた。ようやくの思いで台所までなんとかたどり着いたけど、何もする気力など残ってはいなかった。残った体力と神経を振り絞り、台所を後にし、階段を登った。階段を上りきって、自分の部屋に入るとそのままベッドに倒れこんだ。

ぷつん、と緊張の糸が切断されると同時に僕の体の機能は停止した。そのまま眠りにつけばどんなに良かったか。けれど幸い、ベッドに倒れこんだら、先ほどのようなちくりと刺す痛みは無くなった。今日はこのまま眠ることにしよう、と思った。けれどその夜、朝までとうとう寝付けなかった。

「……………」

睡眠というもののがやってこなかった。まるで、その感覚だけが切断されて、どこかになくしてしまったような感覚だった。眠気は全くない、でも目は冴えているわけではなかった。ようやく朝がやってきた頃、心身の疲れは全く取れることはなかったけれど、僕は仕方なく体を起こした。少し時間は早かったが、学校の支度をした。

昨晚の違和感不思議となかったように思えた　玄関にたどり

つくまでは。そして、玄関で靴を履くときにまたも異変は起きた。腰を下ろして、靴を履く。後は靴の紐を結ぶだけだ。が、どうも上手くない。結ばうとするが、また手が震えた。震えるなんて生やさしものではなかった、まるで振り子のメトロロームが解き放たれたよう、小刻みに激しく振動した。震えるその手を思いっきり握り閉める。

「止まって、お願い止まって……！」

結局、震えは止まることなく震えるその手で僕はやりきるしかなかった。どのくらい時間がかかったのかわからない、ただ紐を結びの全神経を集中させた。

苛立ち、焦り、不安、すべてが滂沱の汗と変えて床に滴り落ちた。時間はかかってしまったが、靴の紐はなんとか結べた。ひどく歪で、今にもすぐ解けてしまいそうだったけれど、それが僕の限界だった。時計は登校する時間を示し、急いで自転車を引き張り出した。

いつもよりも早くこいだおかげか、学校には少し早くついた。学校に着いて下駄箱で一人靴を脱ぎ上履きへと履き替えているその時、修平が後ろから声をかけてきた。

「律、おはよう」

振り返れば、そこには修平がいた。どうしようかと思った。

「あ、うん。おはよう、修平」

僕はまだ震える手を隠しながらも、平然を装って返事をした。靴は足を使って脱いで手で自分の下駄箱に入れる。上履きを取り出し、床に置くと、手を使わず乱暴に履いた。僕と修平はそのまま一緒に教室まで向かった。途中、修平がなにやら神妙な面持ちで横から声をかけてきた。

「なあ、今週の週末、例の香織ちゃんとデートするんだけどさ……」

「へ、へえ、良かったね」

「うん……だけど二人だとなんか気まずいくてさ。なあ、律も一緒についてきてくれないか？　その他にもう一人女の子を誘って、俺とお前達でダブルデート……とかどうかな？」

「え、ええ？ でもさ。それじゃあ相手の方が気まづくならないかな？」

「いや……実は香織ちゃんの提案なんだよ。な？ 律、お願いだ」

修平は両手を拝むように合わせて、頭を下げた。

「で、でも。その、もう一人の女の子 あ」

僕はふっと、凜花の顔が脳裏に浮かぶ。

「おつ。その顔は思い当たりがあるみたいだな。な、とにかく頼むよ！ それじゃあ頼んだぜ！」

「修平！」

修平は僕を置いて廊下を走った。僕の有無を聞くこと無く一方的に決められてしまった。

「お願いだからな、律！ こういうのは人数が多い方がいいんだって！ それに俺等だけが全く知り合いじゃない、香織ちゃんが可哀想だからさ！」

修平は屈託の笑顔で僕の返事を待った。はつきり言ってそういう言い方はかなりずるい。

「ん……わかったよ」

「ありがとう、さすが律！ じゃあ、待ち合わせ場所は駅前に十一時集合な！」

「う、うん……」

修平は僕の返事を聞くと喜びながら教室の中に飛び込んだ。僕は修平が教室に入ってゆく姿を見て、そこで安心した。良かった、修平は気づいていないみたいだ。

僕の右手はまだ痺れていた。

手の痺れが引いたのは最後の授業が始まる頃で、僕はその日の授業のノートは一切取ることが出来なかった。誰かにノートを貸してもらおうかと思ったけれど、その日のノートを全部貸して欲しい、なんて言えなかった。先生に聞こうかと考えたけど、多分……それも無理だ。怒られて職員室を後にするのが、容易に想像出来た。

僕は痺れが無くなった右手を一瞬だけ見て、自転車から見える流れる景色を見つめていた。学校を少し離れば、広がる田園がずっと続いていた。その先々に見える山の稜線、そして生い茂る林に深緑の色は跡形も無くなっていた。田園を抜けて、坂をいくつか越えて、町中に入ると僕の息は少しだけ荒くなった。

胸がちくちくと痛み出した。

自転車の速度は変わらない。けれど見える景色は少しずつ変わっていて、その先の景色には何が待っているのかは僕には分かった。た。

西尾公園が近づいていた。

胸の痛みが大きくなる。僕の中にある後ろめたさが体に伝わり、足にかけていたペダルは力を失っていた。西尾公園が見えた。もうそこまで近づいていた。

僕は流れる景色の中で一つだけに焦点を当てる。西尾公園の中には誰も人がいる気配はなかった。流れる景色は止まり、自転車も止まっていた。

「……………」

ベンチは今日も公園のど真ん中であつた。けれど、凜花の姿はいない。

僕は公園に入ってベンチに腰かけた。ベンチはひんやりとして、お尻に冷たさが伝わった。僕は腰掛けるとすぐに視線を左右に揺らし、それが足りないと感じつくと首を回してまでも辺りを見渡した。凜花を、探していた。

視界の端。隅に追いやられた砂場に僕は小さな背中を見つけた。

その背中小さく、どこか儚くも見える。それが凜花だと僕は瞬時に気がついた。気がついた時には口から言葉が出ていた。

「ごめんっ！」

乾いた空気に張った声は遠くまで響いた。凜花の背中では僅かにうごめき反応を示す。が、それ以上は動くことはない。僕はその背中に向かってもう一度大声で謝る。

「ごめん、凜花！」

その言葉に凜花は振り返った。

「……律」

凜花の瞳にはうつすらと涙が浮かんでいた。

「り、凜花」

思えばあの時みたいだった。それは凜花と最初に公園で出会った時。

「……凜花。その……ご、ごめん」

今もあの時と同じ様に二人でベンチに腰掛けていた。

「凜花……ごめん、本当にごめんなさい！ だから……ね。顔を上げて？」

それに最初から僕と凜花の関係性は変わることなくて、僕はいつだって凜花のペースに巻き込まれてしまうのだ。そんな関係が傾くことは一度だってない。

「ごめんなさい、本当にごめんなさい！」

まだ顔を上げない凜花に誠意を見せようとして、僕は膝を地面に押しつけた。もうこうなれば土下座でも何でもすればいい、だって僕が悪いのだから。僕はそれだけ凜花に悪いことを言ったんだ、当然謝るのも

「くすっ」

沈黙していた凜花が突然くすりと笑った。僕は驚いて顔を上げる間もなく、

「あははははは！ おっかしー、律！」

笑い出した。凜花はお腹を抱えてベンチを何度も叩いた。

「あはは、律……っは、はーお腹が痛い」

「え、え？」

僕はよくわからなかった。凜花が何で機嫌を直しているのか、何

で笑っているのか。凜花は僕を値踏みするかの様に笑い、

「嘘」

短く僕に言った。そして凜花はもう一度言った。

「嘘だよ、ごめんね」

えへへ、とはにかみ凜花は謝っていた。凜花の可愛い笑顔を向けられた僕は顔が熱くなる。ああ、そんな顔をされたら怒ることなんて出来ないじゃないか。

「うつん全然……大丈夫。それに僕が悪いんだし」

僕は恥ずかしがって凜花から視線を外すと、背中に凜花の言葉が刺さった。

「確かにそうかも。んー、あれは傷ついたなあ。じゃあ、じゃあ！ 私から罰を受けてよ」

「え、罰？」

僕が素っ頓狂な声を上げて振り返る前に凜花は「えい」と声をあげた。僕がちよと振り返ったところに凜花の拳が待っていた。

「ぱんち」

凜花の可愛い声とは裏腹にその威力は想像以上だった。僕は声を上げる暇なくぶっ飛び、体はベンチから少しはみ出て地面に突っ伏していた。

「だ、大丈夫？！」

凜花が心配そうな顔を見せて僕に駆け寄ってくる。

「軽くやっただけだったんだけど……」

凜花のその言葉は本当か嘘かもよくわからなかった。殴られた左頬はひりひりと熱かったし、自分一人で立てる気がしなかった。

凜花は僕を支えてベンチに戻すが、ひたすら僕に「ほんとに、ほんとに？ほんとに大丈夫？」と聞いていた。僕は凜花に殴られたせいか口内が切れて、口を開けるだけで痛い。

そうだ、ちよとだけ凜花をからかってみよう。

「うつ……やばい。全然大丈夫じゃ、ない……死ぬ、かもっ」

「ええ、どうしよう！ ええと応急処置とか何も出来ないし……あ、

そうだし、もしかしたら誰か知っているかもしれない！ あ、そうじゃ
ん、それなら律自身を天界に持って行ってしまえば ああ、だめ
じゃん、律は」

「あの、凜花……？」

「え、大丈夫、大丈夫なの律！ ねえ、ねえ？」

凜花は僕の肩を何度も必死に揺すった。その真剣な顔はちよつと
怖くて、僕が嘘をついていることが申し訳なくなった。

「その、嘘なんだ」

「は？」

「ええと、だから多分……大丈夫」

凜花は押し黙った。につこりと笑顔のまま右腕を振り上げていた。

「……殴つてもいい？」

「待つて待つて待つて、やめてっ。ごめん、ほんとごめん！」

僕が必死に謝ると凜花は大きなため息をついた。

「まあ、本当に心配したんだから。でも、律が無事で良かった」

「………うん」

もう凜花をからかうのはやめよう、そう思った。どっちにしろ凜
花にはあまり心配はかけなくなかった。

「あ、そうだ」

「ん？」

今朝の修平の誘いのことを思い出していた。

「あ、あのさ……僕の友達の修平って子がいるんだけど。その修平
と女の子と、それに僕とで今度の日曜日に遊びに行くんだ。それで

……その、良かったらなんだけど、凜花も来ない？」

「え……でも、でも。それって私が行って……いいの？」

「うん、修平も大勢の方がいいってたってたしさ」

「んー……」

「ね、凜花お願い」

そういつと凜花は顔を赤くして、困った顔をした。

「そのお願いの仕方ずるい！ でも私も……ちよつと行きたい……」。

ん、わかったよ」

「本当？ よかった」

「何もそんなにも喜ばなくても……」

かぁ、と少し凜花の顔が赤くなっていた。僕は手を握っていたことに気付いて、さっと手を離れた。

「ええと、駅前に十一時に集合だから」

「う、うん。わかった」

こくん、と凜花は頷いた。すると凜花は立ち上がり、何かを決心したような顔をして「よし、決めた」と、気合を入れていた。

「どうしたの、凜花？」

「ううん、なんでもないよっ」

少し慌てた様子で凜花は顔の前で両手をひらひらと揺らした。

「そうだ！ 私、ちよっと用事を思い出した！ だから私、帰る！」

「え、凜花！ ちよっ……と」

凜花はベンチから勢いよく立ち上がり、公園の外に走り去っていった。

「えー………」

凜花はいつの間にかいなくなってしまった。

僕は公園に一人取り残される。

一人取り残された僕は、何か腑に落ちないまま帰路へとついた。

玄関の扉を閉めると、誰もいない家にただいまと声に出した。家内に音が響いているのは分かったが、取りとめて返ってくるものはなかった。靴を脱いで、床を数歩歩くとすぐさま今朝の感覚が蘇った。

「ま、た……か」

ばたん、と体のバランスを保てなくなりその場で蹲った。胸が熱い、体が軋む。ぎしぎしと目に見えないところで確実に悲鳴を上げている。一呼吸することもやっとなかった。

「はぁ、はぁ……」

左半身のほとんど、いや左半身が痺れて動かせない。痛みはないけど、ひどい胸焼けと吐き気を催した。両手はちょうど胸のあたりを押さえ、体をできるだけ小さく丸めた。心臓が脈を打つたびに、体は上下し、肩先から足先にかけて振動が伝わる。今にも何かが飛び出しそうだった。

「はあ……っ」

一呼吸、一呼吸、ひたむきに向き合い永遠かと思うような時間だけがゆっくり流れた。幾時の時間が経ったのかわからなかったが、時間が経つにつれて少しずつだがしびれがとれてきた。体を起こしようやく握力も取り戻したことを確認すると、いつの間にか完全に左半身の痺れが無くなった。淀みなく立ち上がると、さっきまでの痺れがうそのように体は軽くなった。

「あ……れ？」

それから体調が崩れることなく、普段通りに動けた。一人ご飯の準備をし、お風呂に入り、ゴロゴロと暇を持てあましていた。時計の針を見ると十一時を回っていたので、自分のベッドに向かった。その日もまた寝付けることができなかった。

いつの間にか朝になっていた。気がつくと朝だったという方が正しいのだと思う。もう何度目だろう、この感覚は。横目に時計を見ると昨日と同じ時間だった。まだ少し起きるには早すぎる時間、それでも体を起こす。ベッドの中では何も行動していないのに、体は休まっではない。頭は鉛の様に重く、頭も鈍器か何かが入っているかのようにすっきりと冴えない。しかしそれでも、日常は立ち止まらない。自分で自分を一喝し、気持ちだけで朝の準備をした。

これ以上修平や勇氣に迷惑などかけたくなかった。クローゼットから学校指定の制服を着、学ランを羽織る。ボタンを閉めるようにすると、ちくりと鋭い痛みが走ったと思いきや、右手が痺れる。右手が痺れ、ぶるぶると震えがとまらない。

「……くっ」

僕は仕方なく今からでも準備できることをしようとした。洗面所に行って顔を洗い、一階まで降りて、食事の準備に取りかかった。そのうち止まるだろうと思っていた痺れがご飯を食べ終わってもどうしても止まらない。それでも時刻は刻々と進み、一通り準備が終えた頃にはそろそろ家を出ないといけない時間になっていた。仕方なく家をでて、自転車にまたがり数メートルこいでいたが、さしては大きな影響はなかった。学校に着くころには右手の痺れは引き、僕はボタンを閉めて、校門をくぐった。

教室にはほとんどの生徒が席へとついていて。相変わらず、教室は騒がしく、男子生徒が右往左往に跋扈していた。予鈴が鳴るのと、ほとんど同タイミングに楓先生が入ってきた。

「おはよう、えーと……今日のホームルームは」

先生はその日の注意事項と昨日この地域であったこと、話題の二ユースなどを話してくれた。ここまでは普通だった。痺れも治まってきた。今日は難なく学校を過ごせるのだろうと思っていた。前みたいにノートは取れないことはないし、修平やクラスにだって普通に接することが出来るはずだ。けれど、

「……あ、……………らの……………は」

先生の声が途切れに聞こえてきた。視界も外側が真っ暗で見える範囲も狭い。あれ、おかしいな。皆が何を言っているのかよくわからない。クラスを見れば先生の話に皆が笑っている様子が見えた。けど、僕はよくわからない。

あれ、あれ？

視界を塗りつぶしていた真っ暗なモノは徐々に視界を狭くした。声はさっきよりも遠い。

そして僕の意識は飛んだ。

「見つけた」

凜花は瘦躯の背中に向けて言った。

「やっぱりあなただったのね、運び屋」

運び屋、の凜花の口調にはどこか恨めかしさを含んでいる。

「ふん、今更のことじゃないか」

男は振り返ることはしない。凜花は相手の言葉を聞くと、齒がゆかしく顔を歪めた。

「やめなさいとは言わないわ」

「おや？ 意外だね」

「だって言ってもあなたは律を苦しめ続けるでしょうから」

男はそこで手を止めて凜花を振り返った。男は凜花の鋭い目付きに睨まれながらも、けらけらとおもしろ可笑しく笑った。

「よく分かっているじゃないか。俺はこれからも彼を苛ませ続けるよ、夢の中でも現実でも……」

彼が死ぬまでね、と男は笑みを浮かべて言う。

凜花は男の言うことが気に入らない。が、男の発言に対して反論を言うこと無かった。代わりに自分に言い聞かせた言葉を持って彼女は男から背を向けた。

「二人は死なせない」

凜花の足取りには迷いがない。

「絶対に」

男は凜花の背中を黙ってみつめていた。

「……っ！」

僕は思いつきり席を立ち上がっていた。その衝撃で椅子はひっくり返っていた。授業中の先生は振り返り僕を見る。

「なんだ、浦山なんか見たのか？」

ガタッと強引に席に座った。周りはいくすくすつと忍び笑いが聞こえていた。

「大概にしなさいよ」

「す、すみません」

授業が終わると修平が僕の机に駆けつけてくれた。

「おいおい、律どうした。変なものでも食べたのか？」

修平はにやりとこちらを見ていた。

「いや、なんでもないよつ。ちよつと睡眠不足、あははっ」

「はあ、大丈夫か？ 何にせよ、お大事な」

ぐつと親指を立てて、修平は自分の席に戻っていった。

「……」

修平には悪かったけれど、このとき僕は凜花のことで頭がいっぱいだった。

昼休みになると屋上に向かった。片手には購買部で購入したパンと牛乳。最上階にある屋上までいっきに駆け上った。……体が軽い？ 夢を見るまえよりも明らかに体調が良くなっていた。階段を昇るたびに自分の調子を確認した。

がちや、屋上への入り口に繋がるドアをあけると目の前に飛び込んできたのは誰かが床で寝そべっている姿だった。

「凜花？」

ドアを全開まで開けると、屋上の地べたに寝そべっているのは凜花だった。近づいてみると、可愛い寝息を立てて眠っている。せつかなので起こさずに凜花の横にそつと座った。

「それにしても」

じつと凜花を見た。長く綺麗な髪、すつと伸びたまつげ、誰が見てもわかる整った顔立ち。改めて凜花を見とれていた。このかわいさは脅威すら感じるほどだった。しばらくすると凜花は起き上がった。

「ん……」

「起きた？」

凜花は起き上がり目を少しこすった。どうやらまだ寝ぼけている

ようだった。はつと凜花は我に返ると、少しびっくりした顔でこちらを見た。

「なんで、ここにいるの?!」

「そりゃこっちのせりふだよ。凜花こそなんでこの学校にいるのさ」
「……ええと、その」

本当は凜花が何をしていていたのか知っていた。夢の中で僕を守ってくれていたのだ。僕と凜花は昼休みが終わるまで屋上で一緒に過ごした。

「あつ、予鈴だ」

気付くと昼休みが過ぎていた。もう授業は始まっていた。すると凜花はこんな提案をしていた。

「ねえ、今日さぼっちゃおうか？」

「え、さすがにそれは……」

「大丈夫、大丈夫!」

「ええ?!」

凜花は立ち上がり、無理矢理に僕の手を引いた。僕は乗り気じゃなかったけれど、凜花につられて立ち上がってしまった。僕らは屋上を後にし、そつと誰にも見つからないように廊下を抜け、校舎を通りぬけた。そのまま自転車のある駐輪所まで向かう。

ここまで来たらもう大丈夫だった。

「これからどうするの？」

「……うーん」

凜花が考えこむ。

「そうだ、律の好きな場所につれていってよ」

「僕の好きな場所？」

僕はしばらく考える。好きな場所、好きな場所、僕の好きな……
そうだ、あそこはどうだろうか。

「ハヶ面山やつおもてやまかな」

「やつおもてやま？」

「うん、ここからちょっと行ったところにあるよ」

「じゃあそこに行こうっ」

凜花を荷台に乗せた自転車のペダルに力いっぱい踏み込む。ぐん、と二人分の重みを感じながら自転車はゆっくりと前進する。

「ええと、私重い……？」

「うっん、そんなことないよ。むしろ、軽いぐらい」

僕と凜花を乗せた自転車はぐんぐんとスピードを上げた、さわやかなそよ風が空気抵抗として全身にぶつかり、それを掻っ切って進んだ。

「いつ　　っちゃえええ！」

凜花はいつの間にか立ち上がって、僕の両肩を掴んでいた。答えるようにペダルによりいつそう力を入れ、さらにスピードを上げた。昨日一人で通ったハツ面の外周にさしかかるとやはり懐かしい気持ちになったけれど、今は凜花と一緒にだからなんとも思わなかった。ちょうど滴る汗が冷たい風で冷や汗に変わったぐらいの時、目的地まで到着した。

山頂の入り口は一応舗装されていたけれど、ただ、斜面が急なので自転車を漕いで山を登ることは難しかった。だから、僕らは山頂の手前の歩道に自転車を止め歩いて、山頂を目指した。

「んしょ……結構、斜面の……角度、あるね」

「うん……でも、山頂まではそんなにないから」

実際このハケ面山の高度はそんなになく、ほとんど谷に近いような感じだった。大人だったら、二十分もすれば山頂につけてしまうような高さだった。舗装されたアスファルトの山道を歩いていると、やがて景色が広がる山頂へとたどりついた。山頂に着くとそこにはここ一帯を見渡せられる景色が広がっていた。

「わぁー」

凜花は少し興奮ぎみに声を上げた。

「ここが僕のお気に入りの場所なんだよ」

そういつて、僕は路面が斜めになっていいる芝生の上に寝転んだ。続いて凜花もその横で寝転んできた。芝生に座るとふわっ、とした、

涼しい風が吹いてきた。寝そべっていても、ここからなら街全体を一望できた。

「気持ちいいね、ここ」

「うん」

「私もこの場所好きかな。……律はよくここに来るの？」

「たまにだよ。見ての通り来るだけでも大変なんだから」

僕は汗を書いたシャツをばたばたと仰いだ。

「私のお気に入りの場所にもしていいかな？」

「え、うん」

「えへへ。じゃあ、二人だけの秘密ね」

凜花はくすつとはにかむ。

「でも、こんな場所みんな知っているよ？」

「そうかな？ 知っていても意外とみんな来ないと思うよ。ほら」

そういつて凜花は周りを見渡した。確かに周りには僕らしか人はいなかった。凜花の言うとおり穴場かもしれない。

「うん、じゃあ二人の秘密ってことで」

僕らはしばらく、そよ風に吹かれた、芝生に寝転んで話をした。

それは青い蒼天の下に太陽の光は僕らだけを照らすように空間を画一したかのようだった。本当にここに来て良かったと心底思った。

僕は思い出すかのように、「あ」と声を上げ、顔を上げた。

「そういえば、ここ展望台があっただ」

展望台は僕らのいる場所から見えるところにあっただ。ここよりあつちの方がいい景色なのに、なんで最初に行かなかつたんだろうと思った。

「え、そうなの？ どこ？」

「じゃあ、一緒に行こうか」

体を起こして、まだ寝そべっている凜花を起こした。凜花の差し出された手を体ごと引き起こす。

「ほら、こっちだよ」

そのまま手をつないだまま凜花の一步先を先導した。斜面から平

地へと移動すると木々の頭から白い塔がひょっこりと姿を現した。展望台の入り口に入ると、螺旋階段が上までずっと続いていた。内装の白いペンキはすっかり剥げ、石段の階段は一昔に作られた素材のようだった。

螺旋状の階段を展望台に昇ると先ほどとは違った景色が目の前に広がっていた。塔の最上部には僕らしか人はいなかった。僕は手すりに手をかけると市内の景色を悠然と見渡した。

「おおーっ」

凜花は西尾市内の田舎風景を見てはしゃいだ。広大に広がる田んぼや、自分達が住んでいる住宅地、駅の方までは見えなかったが、いつも学校に通っている通学路までもがそこから見えた。その瞬間、なんだかこの世界を悠々と俯瞰している特別な存在になった気がした。

「なんか……不思議な気分だね」

僕は一人ごとのようにそうつぶやいた。

「どうしたの？」

「うん……僕もよくわからないけど」

僕は本当に自分でもよくわかっていなかった。

「……？」

不思議そうに凜花は見つめてきた。僕は展望台から見える景色を一望する。きつちりと区画された広大な野畑が手前に、その奥には住宅街が点々と広がっていた。舗装なれた道には人を乗せた車が何台もそこらを走っていて、よく見なくとも誰かが歩を進めて、どこかへと向かっていた。手前に視線を戻し、野畑をでこぼこの土道を小学生の集団が仲良く歩いているのを見て、急に視界が滲んだ。

「なんでだろう、よく……わからない。いや……知らないはずがないんだ」

僕は下を向く。凜花はずっと黙って頷いて僕の話の話を聞いていた。

「はは、おかしいよね。今頃になって、さ……」

僕のあたり前の日常、大切なもの　ぼた、と大粒の雫が僕の頬

に流れた。

「好きだったんだ、とてもとても。すごく大切なものだったんだ。いつもそばにいてさ……無くなるなんてなかったはずだったんだ。なのに……どうして」

ぽたっ、ぽたっ、と涙は止まらなかった。市内の景色はすべて涙で見えなかった。すると、凜花がぎゅっと僕を抱きしめ、頭をなでた。凜花はなにも言わず、ずっと僕の言うことに頷いた。

「凜花……うう……凜花ああ……」

ぎゅっと凜花の服をつかんだ。凜花はさらにぎゅっと抱きしめてきて、自分の胸の中に押し付けた。凜花の胸に顔を埋め、僕は安心してさらに泣いた。今までの我慢していた自分を開放して、偽りの仮面をはずして、自分の存在を忘れるほどに泣いた。最後には声にならないほど嗚咽をかみ殺して、涙がすべて枯れるまでそこで泣いた。

流れる雲はとてもゆっくり動いていて、眼球越しに見えたそのレインガ色の彩色は静かに僕の心がゆらりゆらりと落ち着いていくのがわかった。横目をやると凜花もその視界を見ていた。僕はそこでまた安心をして暮れなずむ、夕暮れを仰いだ。

「ねえ、律」

凜花は僕に説いた。何、と僕が聞き返す。

「律は神様って信じる？」

質問の意図がよくわからなかったが、それでも僕は考えたが、結局わからないよと答えた。

「じゃあ、質問を変えるね。律には神様がいてほしいって思う？」

「いてほしい、かな。でも」

僕はそこで口を紡いだ。凜花は語を継いだ。

「じゃあ良かった。神様っていうのは、誰かを信じたいって気持ちの表れなんだよ。だから神様は最後の皆」

「……最後の、皆？」

「うーん、そうだなあ。じゃあちよつと変えるね……律って神様っ

て見たことある？」

また凜花からよくわからない質問が飛んできた。僕は見たことがないと答えた。

「私も見たことがないよ。ううん、誰だっ てみたことないと思う。

……でも、皆はいるんだと信じている。それは皆が居るんだと信じたいから出来たものなんだよ。神様は私たちに与えられた希望の光」
ますます凜花の言っていることがよくわからなかった。

「つまりね」

「ごほん、と凜花は一つ咳払いをした。

「私達は何かを信じているから、希望を持てる、自分を信じているからこそこうやって生きていける。そうじゃない？」

凜花は僕に向かって話していた。僕の様子を伺うとまた話を続けた。

「どうしようもないとき、自分が信じられなくなったとき、誰かにそれを認めてもらいたくて、自分に自信が持てるようにって神様がいるんだと思う。だから神様は信じたいって思う人にとっての最初の希望、そして最後の砦なんだよ」

そう凜花は外を見上げて話してくれた。最後に凜花はこう聞いてきた。

「律はどうなのかな？」

僕は凜花の問いかけに少し心が浮かされた。

「……僕は信じたい。凜花も修平も勇気も母さんも、後自分のことも」

「うん、よかった」

「……ありがとう、なんだか少し楽になったよ」

僕は凜花に精一杯の感謝の言葉を口にした。「うん」と凜花は展望の手すりにひじを置くとうれしそうな顔でまた夕暮れの様子を眺めた。僕もつられて一緒に夕日を眺めた、あたりが暗くなるその時まで。僕らはまた会う約束をして、いつもの公園の前で別れた。帰路の途中、ペダルを漕ぐ両足はいつもよりも軽く感じた。

その日、家についても痺れは襲ってこなかった。連日も疲れもあってか僕は大事をとって少し早く就寝につくことにした。修平との約束はあさつての日曜日、明日は母さんのお見舞いに行こうと寝る前に決めてその日を終えた。

暗い。

ここはどこだ。周りをみまわしても何も見えなかった。そこにぽつと光が浮かび上がる。すると無数の光の玉が僕の前に現れ、そこに留まった。僕は手を伸ばし、光に触れると、頭に記憶の断片が瞬時に再生された。そこには誰かの記憶が詰まっていた。一つの光が僕に近づいて視界を真っ白になる。瞬く間に記憶は溢れるように僕の中に入っていくた。

見えてきたのはあの場所だった。八ツ面山の灯台。けれど、映っていた灯台は今よりもずっと綺麗だった。

「これは、父さんと母さんの記憶？」

僕が小学生の頃だった。その日は父さんと母さんと三人で八ツ面山に登っていた。山頂の麓に車を止めると僕ら家族は山頂を目指した。僕は父さんと母さんに引かれ山を登りはじめた。両親に繋がれている手を僕は力いっぱい握りしめて山頂を目指した。山頂で僕たち家族を待っていたのは、目の前に広がる芝生の広場とそこから眺める市内の絶景だった。

「ここで、ご飯にしましょ」

母さんは提案してくれた。僕と父さんは有無を言わず納得すると母はリュックサックからお弁当箱を取り出した。お弁当箱の中には律の大好物のハンバークやきつね色に焼けた卵焼きなどがたくさん敷き詰められていた。あらかじめ用意していたビニールシートを芝生の上に広げ、僕らはそこで昼食をとった。昼食を食べ終わると、僕は元氣いっぱいそこらを駆け回り、息が切れるまで父さんと母さんと走り回った。そこら一帯を走り走りまわっていると、白くてタワーのような建物を見つけた。律は父さんと母さんと呼んでその

建物に登った。

ほら、と父さんは指をさしていると、その先には僕らがすむ家が見えた。どうだ、といった様子で父さんは誇らしげに息子に見せた。当の僕はそんなことよりも自分の世界に見えるこの風景が興味をそいでいた。いつも見ている町がこんなにも小さかった。飛行機に乗った経験はなかったけれど、僕にとってのその景色はそれに近いものに違わなかった。

「よつと」

父さんは僕を持ち上げると、どうだ、すごいだろう、と父さんはうれしそうだった。その時思ったのだ、早く大人になりたいと。僕が見ている世界、そして知っている世界と父さんや母さん達が見ている世界はこんなにも違うのかと。早く大人になって色んなことを知りたい、父さんや母さんが知っていることも、全部。僕は今いるこの世界が好きだった。父さんがいて、母さんがいて、そして僕がいる世界、それは不変的なものであり続けるんだと信じ続けた。父さんは僕を降ろすとペンを取り出して壁になにやら書いていた。母さんはだめよ、と注意をしたがまあこのくらいいいじゃないかと勝手に文字を壁に書き付けていた。

僕は父さんが何を書いていたのかわからない。

またも視界が変化する。今度は世界が完全に暗転した。

やがて僕の見える視界はスライドショーの様に新しいシーンが写しだされた。父さんと母さんが一緒に歩いている、仲良く手を繋いで。僕はその様子を少しはなれた頭上から見ていた。父さんと母さんは駅前のケーキ屋さんに入った。父さんはケーキの予約をしていた。父さんと母さんはすぐにそこから出てくると思い少し待っていたが、なかなかケーキ屋から出てこなかった。不思議に思い、中の様子を伺うと父さんと母さんとお店の店長がなにやら話し込んでいた。話の内容は僕の話だった。お店の店長も僕と同じくらいのお子さんがいるようで話に花が咲いていた。その話している様子は僕に

とつて感慨深いものだったに違いない。父さんや母さんは僕の話をするときあんなに生き生きとしているんだ、まるで自分のことの様に誇らしげに笑み一杯で話をしていた。するとなにやら、頬をつたるものがあつた。僕は自分が涙を流していると気がついた。これは悲しいから泣いているんじゃない、うれしくて泣いているんだ。父さんと母さんはお店を後にすると父さんは足取りを軽く、歩きだした。

嫌な胸騒ぎがした。

僕の視界は少しずつズレはじめ、そこにゆがみを見せた。父さんと母さんは一緒に歩いていった。視界は急にスローモーションになり、僕の動きも緩慢になった。対向車線には一台の黒いワゴンが走行していた。よく見ると運転主は走行しながら携帯電話で会話をしている。父さん達と対向車にはまだ距離がある。ちょうど父さんと母さんはそのままガソリンスタンドを越えコンビ二まで差し掛かるところだった。

鈍い音。

それはタイヤが折衝する音だった。ワゴンは一瞬バランスを崩し、運転主はその衝撃にパニックになってしまい、そのままハンドルを左に思いっきり倒した。

激しいタイヤのドリフト音が響きわたった。黒いワゴンはそのままコンビ二の駐車場に突っ込んだ。誰も人がいないと見越して。父さんはワゴンが突っ込んでくるのが見え、咄嗟に母さんを庇った。父さんと母さんはワゴンに衝突し、その衝撃で十メートルほど飛ばされた。下はコンクリート、その硬いコンクリートに頭をぶつけて無事なわけがなかった。二人の頭から溢れるほどの血が滲み出ている。二人はぱたり、と動かなくなっていた。運転主はその光景を見てさらに動転してしまったのか、そのまま車を走行してその場を去ってしまった。近くにいた、ガソリンスタンドの店員がことの様子に気付き、救急車を要請した。僕は見たくもない惨状に目をふさいだ。視界は真っ黒になり、見たくない光景は消え去った。しかし、

今度は遠くからノイズが聞こえた。やがて、雑音は鮮明となり嫌でも耳に入るようになった。

「お前が、お前が……！」

「消えてしまえば、よかったのにねえ」

「何も使えないやつ、なんでここにいるの？」

「邪魔だね」

「どこに見ているかよくわかんないし、気味悪いよ」

「目障り」

「消えろ」

複数の声が聞こえた。たまらず耳をふさいでも、その音はやむことはなかった。ひたすら浴びせられる罵声に僕はひたすら耐えた。

「お前も一緒に死ねばよかったのにな」

「あはははははははは」

「お前の親父が死んでくれて、こっちは助かっているんだよ？」

「ふふふふふふふふ」

「ねえ、律くんって誰？ 存在感ないからわかんなかった」

「消えて」

「消えてよ」

「消えてよ、律君」

消えろという声がいつも間にかどの方面からも聞こえてきた。

僕を取り巻く声は消えるコールへと変化していった。何が悪いの？ 僕の何が悪いの？ 何か僕がしたの？ わからない。わからないよ。

聞き覚えのあるその声の主もやがて、きえろという声に参加していた。僕は頭に血が上っていく感覚がわかり、一人で叫んだ。しかし、声は途切れることはなく、言葉の暴力は脳裏に突き刺さった。頭痛は止まらなくなり、やがて息は荒くなり、息をすることさえつらくなった。僕の声は叫ぶ声から泣きすすする嗚咽に変わっていった。

「もう、やめて……よ」

それでもこの世界は終わることはない。

「僕なんて、僕……」

消えろという声は僕の脳裏に刻み続ける。気が狂いそうだった。もうこんな世界にはいたくない、早く出たい、助けて、助けて。僕は再び叫んだ。もう言葉にはなっていなかったけれど、声を聞かなくすることは出来た。叫び続け、意識が途切れても手足は闇の中でもがき続けた。意識が無くなる直前、男の笑いごとをずっと耳にして。

朝の日差しと共にけたたましい目覚ましが現実へと引き戻した。そこでようやく体は朝だとこと認識し、反応する。意識はまだはつきりとしておらず、その眠たい肢体は気だるそうに布団から出た。……体調は明らかによくない。ただこの間のような違和感はなかった。それでも体が優れないことは確かだった。茫然と起き上がったまま、僕は頭の中を少し整理した。するとまず真つ先に昨日の夢のことを思い出した。

「……」

何も考えなくなかった。気持ちが悪い夢、薄気味が悪い。そこで湧いた疑念たる思いはなかなか払拭することができず、いらだちを募らせるばかりだった。でもその矛先は見つからず、ただただ胸のうちに留めるばかりの自分がそこにいた。考えても仕方なく、起き上がって学校の支度をすませた。今日は土曜日で学校は午前中に終わるので午後は母さんの見舞いに行こうと決めていた。学校は午前中だけだ、なんてことはないと自分に言い聞かせていた。学校に向かう途中、なんとなく八ヶ面山が視界に入った。

教室に入ると、今日もクラスは騒がしかった。扉をあけると一瞬クラス中から視線を受けた。やけに視線が気になった。

「はははは」

「いやいや、ないって」

気のせいだと思うけれど、視線の中に自分を蔑むような嘲笑を感

じた。あれ、とクラスがいつもと違うことに違和感を覚えた。それでも僕はいつもの様に知り合い数人におはようと声をかけつつ自分の席へと向かう。席に座り、そこからクラスを一望する。改めてみると、やっぱりいつものクラスにしか感じなかった。授業の準備をするため僕は鞆や机の中を整理していた。

「つよ！ おはようっ」

修平が突然、後ろから抱きついてきた。おはよう、と修平に声をかけるとそのまま前を向き、授業の準備をした。

「ん、どうしたー？」

「なんでもないよっ」

少し明るい声質で話した。

「そっか。そういえば明日は大丈夫だろうなっ?! 頼むよ、相棒」

「うん、なんとかなりそう」

「おお、さっすが律だよ！ で、その子は誰なの？ もしかして律の彼女？ かわいいの？ どんな子なの？」

「いや……その、凜花はそう言うのじゃない……と思う」

「なんだよーそれ」

僕はほっとした様子で答えた。

「ホームルーム始まるぞー、席に着きなさい」

皆は先生に習って行儀よく席につく、それで今日も学校は始まりを迎えた。特段変化はなかった。なかったかもしれない。修平も先生も、クラスの様子も皆。ただ、違うとしたら、昨日ではなく今日の自分だったのかもしれない。

それは突然だった。気付いたらそうになっていた。授業が始まって数分のこと、一限目は数学、先生は数式を黒板に書き込んでいた。

先生が黒板にチョークを走らせる。

普段なら気にもならない音だったが、とてもうるさく感じた。ちくちくと耳鳴りにも感じる不快な音、時に痛みすら覚える。クラス内は静まりかえっていたが、それでも後ろの席で数人こそそそと話しているものもいた。話声は聞こえるのだが、何を言っているかは

わからなかった。目を閉じて耳を澄ませば他にも椅子を動かす音、外からは体育の授業の生徒の声や先生の声、複数の様々な音は確かに混在していた。それなのになぜかチヨークの音は途切れることはなかった。

チヨークの音は激しさを増す。

でも先生はゆっくりと丁寧な黒板にチヨークで書いている。先生は一通り書き終えたところでチヨークを置いた。と同時に音は消えた。そこでほつと胸を撫で下ろす。だが、しばらくするとまた先ほど聞こえたチヨークの音がどこからか聞こえてきた。その音はさつきとは比べものにはならないぐらい大きな音で。

「ぐっ！」

僕は耳鳴りに絶えられずなりふり構わず、耳をふさいだ。この姿がいかに不自然かは誰の目にも映ってしまうが、それどころではなかった。なりふり構わず、頭を伏せて両手を耳に押し当てる。それでも音は鳴り止まない。異変に気付いた教師はおそろおそろ僕の前に来た。

「どうした、浦山？」

先生は少し伺うように僕に尋ねた。

「あ……っ」

僕はそのまま言葉に出来ず、ただ必死に目で自分の異常を訴えた。その様子には皆は異変だと気づき始めた。

「どうしたの？」

「大丈夫か、あいつ？」

「何あいつ？」

時間が経つにつれてクラスの雑音は大きくなった、それにつれて僕に課せられる音は増した。その雑音はどんどん大きくなり僕の中にまで入ってきた。声はやがて疑惑から罵声の声として耳に入る。

死んじゃええ？ きえろ、と罵詈雑言に存在自体を否定される。

周りをにらみつけるが誰も自分に対して言っているものなどない。それでも聞こえる声は明瞭にはつきりと聞こえる。耳をふさいでも、

どこからか漏れたのか雪崩れ込むように罵声が浴びせられる。誰も言っていないとわかつているのに、なぜかはつきりと聞こえてくる……もう頭がおかしくなりそうで、これ以上耐えられる、気がしなかった。

その中で一人席を立つ　修平だった。修平は席を立ち上がり僕の目の前に立った。修平は先生に保険室に向かわせると伝え僕を立ち上がらせた。両手で両耳を押さえている僕の肩を持つことはできなかった。修平は腰に手を当ててそのまま保険室に向かわせた。僕の震える体を修平はがっしりと腰を持って保健室へと連れて行った。保健室に入ると下橋さんが対応してくれて、その間修平は必死に先生に何か訴えていた。その間、僕は相変わらず、両耳を押さえていた。正直、その後のことは覚えていなかった。

「ここは？」

気がついたとき、天井を見上げていた。真っ白ではなく黄ばんだ色の白。

「大丈夫？」

カーテン越しに誰かが声をかけてきた。声色からして多分下橋先生だと、思う。

「あ……もう平気です」

そうか、僕はあのととき気絶してしまったのか。急に音が大きくなつて……僕は。

「あの先生……すみませんでした」

カーテン越しからでも頭を垂れた。

「あら、いいのよ。そのための保健室だしね。まあ、それにここに運んでくれたのは川瀬君だし」

そっか、修平が。

「そっ、そりゃもう、血相を変えてここにつれてきたんだからね。」

多分本人も心配しているだろうから、後で顔を見せなさい」

「……はい」

かつん、と乾いた音と共に先生の足音が遠のいていった。ちらりと時計に目をやると四時を回っていたところだった。もう授業はとつくに終わっている時間だった。ベッドから起き上がり、自分の靴を履いた。先生にお礼を言っ出て出ようとしたら、先生に呼び止められた。

「ちょっと待って、律君」

思いのほか先生は真剣な眼差しだった。射抜くような鋭い視線にどきり、と不意を突かれた。

「はい、何ですか？」

「ここに座って」

先生は自分の椅子の前にある椅子へと促した。先生の言われるままにそこに腰をかけた。

「最近からだの調子はどう？」

そう先生は優しい口調で聞いてきた。

「……普通です」

「普通……そう」

先生は含蓄混じりに深く頷いた。

「あなたが話したくないならいいけれど、一度本格的に病院でみてもらうことをおすすめるわ。私から紹介しておくから、時間が空いているときに行きなさい」

先生は強い眼差しでそういった。これはお願いではなくて命令だった。そう訴えかけているようにも捉えられる。先生の真剣さに圧倒されたのか、僕は首を横に振ることはできなかった。

「……はい」

保健室を後にし、自転車を取りに駐輪所に行く途中、修平が校門の前で一人壁に寄りかかって立っていた。僕が校舎から歩いてくることを見つけると大きく手を振った。どうやら修平は僕が心配で待っていてくれたみたいだ。

「よう、もう体は平気か？」

「うん、もう大丈夫だよ。ありがとう、修平」

「いいや、別にたいしたことはしてないよ」

修平は心配そうな瞳で僕を見つめる。なあ、と修平は語を継ぐ。

「……明日の予定、もし体調悪いのなら延期しないか？」

「ううん、大丈夫」

ぐっと親指を修平に見えるように立てた。それでもまだ顔をしかめたままだった。

「……でも、もし体調悪くなるようなら、修平に連絡するよ」

「おう……わかった」

修平は腑に落ちない顔をしていたが、強情に修平を丸め込んだ。

僕らは一緒に駐輪所に自転車を取りに行くと、その日は修平と一緒に帰った。修平は僕を気遣ってくれて、家まで送ってくれた。家につくと、学校の支度を置き、リビングのソファに座ると僕は天上を見上げた。今日の出来事を振り返っていた、二度と思い出したくないが、なんとなくこれは立ち向かわないといけない気がした。ふと時刻を確認するとまだ夕食の時間には早かった。

「……はあ」

長嘆をつく。そういえばすっかり忘れていた、見舞いに行くことを。でも、もうこんな時間だからいけないか。茫然と天井のシミの数を数えて暇をつぶした。何も考えずからつぼの頭だったけれど、なぜかそこで頭によぎったのは凜花のことだった。

「今、何しているのかな」

凜花のことが気になった。ソファから起き上がり、自然と外出に出かける準備をしていた。公園に行くくらいなら大丈夫だろうと自分に言い聞かせた。玄関を出て家を出ようとすると、聞き覚えのある笑い声を聞いた。

「ははは。くくく」

忘れるはずもない、夢の中で何度もこの声を聞いたか。その声は家中から響いて反響を繰り返した。気味が悪くなって急いで家から

出た。家から数十メートル、家がもう見えなくなったところでも聞こえてきたので、自転車を漕ぐ足を急がせた。家が完全に見えなくなったとき、声は途絶えた。

公園につくと、凜花は一人でいた。その光景は出会ったときのままだった。この風景だけは断絶した世界のように変化はなかった。変わったのは季節ぐらいで、木々が目を紡ぎ始め、春のにおいを漂わせているぐらいだった。凜花は僕の姿に気付くと、力強く手を振ってきた。

「おはよう」

凜花は元気いっぱいに挨拶してきた。僕もかえすようにおはようと返事をした。そのまま凜花の隣に座ると凜花はとなりに座るといきなり、ぽんと手を僕の頭に置いた。そのまま、犬を扱うように、「よしよし」と頭をなでた。

「や、やめてよ」

軽くよけようとすると、凜花はしつこく追ってきた。凜花は執拗以上に追っかけてきたので、僕もようやく観念して凜花の手の中に収まった。今は凜花のぬくもりを感じながら、僕はどこか安心感を覚えていた。

「はい、おしまいっ」

凜花はそういうと、ぱつと手を頭から離れた。僕はきょとんとした様子で凜花を見つめると。

「元気に…… なった？」

凜花はたずねてきた。僕は少し驚いたが、うんと凜花に答えていた。その時凜花にはかなわないと心のうちで思った。

「そんなに大変そうな顔をしてた？」

凜花はうんうんと強くたてに首を振った。

「そりゃあ、もう。今にも死にそうな顔をしてよ、本当に気味が悪いぐらいにね」

えへへ、と笑顔を見せてくれた。その笑顔につられて僕も凜花に笑顔を見せた。そして僕らは一緒に笑いあった。

凜花と一緒にいる時間はいつも短く感じて、今日も遅くまでベンチで二人話し合っていた。去り際に、僕らはまた明日といってそれぞれの帰路へと向かった。

「明日が楽しみだねっ、また明日！」

凜花は別れ際にそういつて帰っていった。

家に着くと、出かける前まで聞こえていた例の不気味な笑い声は聞こえなくなっていた。

「今日はもうねむいな……」

そういえば最近まったく眠れていなかった。あきらかに熟睡できていない自分がそこにいた。何にも考えることなくゆっくり瞼を閉じると、僕はそのまま制服姿のまま眠りへといざなわれていた。

母さんの残された時間は刻々と無くなつてゆく。

最終章

最終章 僕は彼女の夢を見る

昨日は夢を見なかった。

今日は皆と遊び日だ。起き上がって、屈伸を二、三回し、ぐるぐると腕を回してみた。特に異常はない、今日はいいい日になりそうなのがした。まずは朝ごはんと思い、一階へと下りた。珍しく鼻歌を歌いながら準備し、大好物のフレンチトーストと、シリアルをテーブルに並べた。

「う……」

ちよつと食べすぎた、お腹が痛い。朝食を食べ終え、テレビのあるリビングへと向かい、テレビをつけて時間を持て余した。ぼんやりとテレビを観賞していると時刻は十時前、少し早めに出ようと思った。

外は雲ひとつない青天白日で、日差しも強く、かざした手からをひりひりとその強さを物語っていた。集合場所には思いの他、早くに着いてしまった。案の定、集合場所にはまだ誰もいない。

「どうしようかな……」

このまま待っていてもよかったけれど、なんとなく近くのコンビニに向かうことにした。駅からコンビニまでは近かった。

「……あ」

なんの場所かすぐにわかった。車道と歩道をまたぐブロックが一箇所だけ挟られているのがわかる。まだ新しく生々しい。事故のことは西崎さんから聞いていたが、この詳細はよくわからなかった。コンビニの前を父さんと母さんが一緒に歩いていたこと、そこに乗用車が誤って突っ込んでしまったこと。

ただそれだけの情報、だった。僕にはそれだけしか知らない。父さんや母さんはどんな気持ちだったのか、何を思って歩いていたの

だろうか。そんなことは誰も教えてくれない。

僕はそこで気が付く。もしかしたらそのコンビニで働いている人なら当時の状況を知っているかもしれない。

「いらつしゃいませ」

コンビニの中はパートのおばさんらしき人がレジ番をしていた。

人当たりがよさそうで、やんわりとした口調でレジの接客をしていた。僕はレジから離れたところでタイミングを見計らい、誰もいなくなつたところでレジに向かった。

「あの、すみません」

「はい？」

「つい最近の話ですが……ここのコンビニの前で人身衝突がありましたよね？」

コンビニの駐車場を指さしながら聞いた。

「ええ……ありましたね」

「その、詳しい話を聞かせてもらえませんか？」

「ごめんなさい、私はきちんと見ていなかったの……そのもしかしたら主人が知っているのかも」

「どの人ですか？」

僕は真剣な表情で訴えるようにおばさんに聞いていた。おばさんは逡巡すると、視線を外に向けた。コンビニの外には水まきをしている中年男性がいた。

「ありがとうございます」

コンビニの外に出ると、眼球を刺激するような強い日差しが僕の全身を照らしつけていた。思わず、手で太陽の光をさえぎるようにした。視界の傍らには肩幅の狭い中年のおじさんがホースを持って、お店周りの水撒きをしていた。

「あのっ、すみません」

おじさんは顔を鷹揚とあげると、僕をみるなり驚いた顔をした。

「十日ほど前にここで人身事故がありましたよねっ？ そのことで聞きたいことがあるんですけど、何か知っていますか？」

「ああ、あつたね……そんなこと」

おじさんは少し答えにくそうに返事をした。

「それで当時のことを詳しく聞きたいんです」

右足を一步、踏み込んでおじさん目をじつと見据える。軽い水飛沫が靴を少し湿させる。おじさんは目を丸くすると恐る恐る口を開いた。

「……もしかして、あの両親の親族の方か何か？」

「はい、息子です」

「そうか……通りで。……ご両親は？」

「……あまり芳しくありません」

「そっか、二人とも良くなるといいね」

おじさんは柔らかくて笑顔を浮かべた。

「そうですね。元気になるといいです」

ほんとうに、それだったらどんなにいいことか。僕の視線が少し下に落とす。水たまりが緩やかに波紋を立てた。

「……当時の、ことだったよね」

おじさんは鷹揚とした口調で語りだした。おじさん自身もすべて見ていたわけではなかったのだ、と最初に忠告を入れて。当時は車通りが多い夕方だったこと、そこに一台のトラックが急に車道からはみ出して歩道へ突っ込んだこと。犯人は逃走して逃げてしまったこと。そして

「本当に仲のよさそうな夫婦だったよ」

父さんと母さん達のことをおじさんは話してくれた。そのおじさんの表情は儚く、心底つらそうに答えていた。

「犯人はもう捕まっているの？」

「……いえ、まだ」

「そう。早くつかまると良いね。ごめんね、あまり役に立てなくて」

「……そんなことないです、ありがとうございました」

おじさんに頭を下げて小走りでその場から離れた。僕は距離が離れたところでぴたりと足を止めて、事故現場を振り返った。おじさ

んの話最後まで聞いて感慨深い気持ちになっていた。目の前では車が途切れることなく、車が走っていた。

『本当に仲のよさそうな夫婦だったよ』

頭の中におじさんの言葉が言霊をなつて連呼される。ぐるぐると何度も反芻し、一語一語が地響きみたいに繰り返される。おじさんの言葉が僕の心に響いていた。

徐々に視界が滲んでいることに気がついた。

「あ……れ？」

目端から何かが溢れた。涙だ。おじさんの話を聞いて当時の状況を理解できたような気がしたけれど、実際のところ想像もつかなかった。でも……なぜだろう、涙は止まらない。ぼろぼろと留まることを知らない涙は拭いても、拭いても止まらない。

目を閉じれば半歩先で歩く父さんに、それを追いかけるように母さんが一緒に歩いていてところが想像できる。父さんらは今を謳歌するように、目の前の生きる世界を愛していた。父さんの横には母さんがいて、母さんの横には父さんがいて、僕を取り囲むように家族の姿があった。僕は父さんや母さんが笑いあっている姿が思い浮かべた。

僕の内から出てくる衝動は止められるはずがなかった。頬を伝い涙は頬から落ち、肩は震え、力が入らなくなった足はそのままよるめきフェンスに体を預けた。

「うう……ああ」

声にもならない嗚咽でひたすら泣いた。おじさんの話を聞けて本当に良かった。ただこの涙に対しての感情はうれしいのか、悲しさの感情からきているのか。そしてその矛先をどこに向ければいいのか僕にはわからなかった。

ただそこにある事実だけが僕の心を大きく奮わせた。

鏡には見事に目の下には腫れぼったく、赤くはれ上がっている自分の姿が見えた。顔を何度もすすぎ、時間いっぱいまで腫れぼった

い顔を水で冷やした。気がつく、集合時間ぎりぎりとなっていたので、集合場所に向かうと、僕以外全員そろっていた。

「よう、遅いぞ。律」

「ごめんごめん」

反応からして一応上手くごまかせたようだ、と胸中ほつとする。

ちらつと修平の横にいる女の子に目をやった。端正な挙措で、どこか品性を感じる。

「あ、紹介するよ。この子が香織ちゃんだよ。隣のクラスの金城香織ちゃんだよ」

「はじめまして、金城香織といいます。今日はどうぞよろしく願います」

丁寧な頭を垂れ一礼した。僕も慌てて「こちらこそよろしくね」と、ときこちなく挨拶を交わした。

「なあ、ちよつと」

と、どこか余裕ありげな修平の襟をひっぱりあげ、女子達から離れたところまで連れ出した。

「おい、なあ。どうしたんだよ、律」

「あんなかわいい子なんて僕気まずいよ、しかもなんかお嬢様って感じだし……」

「だろつ、そうだろ？」

修平はうれしそうに答えた。修平は人の話を聞いていないんじゃないだろうか。僕から見た金城さんはとてもおしとやかで、品があつて、しっかりしていた。その上、見た目も周りの子と比べて、垢抜けていた。

「いや、そうじゃなくてさ」

「そうじゃないのかよ」

「いや、そうだけださ……」

「なんだあ、自慢か？ 凛花ちゃんは可愛いもんな。ほんと、びっくりしたぜ。顔を合わせるのが初めてだけど、正直あんなにかわいいとは思ってもいなかったからな」

「え？　だつて凜花は……」

ちらりと修平の体越しに立っている凜花を見た。チェックのショールパンにハイニーソックス、上半身は少しだぼつとしたティーシャツに頭にはカーキ色のハンチングを被っていた。改めて凜花のかわいさに、僕の胸は少し弾んだ。高校生モデルでも凜花なら大活躍できると思った。うん、凜花は確かに可愛い。

「確かに……でも凜花は　」

と言いかけてきたところで凜花がキツッと鋭い目つきで睨んだ。

「あ……何でもないっ」

僕は何も言えずにそのまま修平の問いに頷いていた。

「じゃ、じゃあ、とりあえず行こうかつ」

全員が集合したところで僕等は駅のホームに入った。今日は休日のことであつてか、ホームにはたくさんの人が電車を待っていた。ほとんどが僕らのような年代の子ばかりだ。数分も経っていないうちに目的の方面にいく電車が間もなくやってきた。

「ねえ、今日はどこに行くの？」

電車がゆらりゆらりと左右に揺れる中、勇気が修平にそう聞いた。そういえば僕も遊びに行くことは聞いていたが、詳しいことまで聞いてはいなかった。

「映画を見に行こうと考えていたんだけど……どう、かな？」

僕らはお互い顔を見合わせたけれど、特に反対する者はいなさそうだった。

「うん、じゃあそうしよう！」

修平は待つていたかの様に、鞆から何か取り出した。映画の上映スケジュールだった。

「えと、何々……超絶宇宙船体ポコロンタコ、首首首、一瞬だけいい。か」

他にもたくさん映画情報があつたが特に真新しいものはなかった。メンバーは一樣になんとなく自分の見たいものが決まったようだ。

「『首首首』がいいっ！」

誰かが第一声を割った。

凜花だった。首首首といえば、学園者のホラー映画だった。最近テレビでよくコマーシャルがよく見かける。僕もちょっとだけみたいと思っていたが、さすがにこのメンバーでは提案することが出来なかった。すると以外な人から後押しの言葉が出た。

「私もぜひ見てみたいです」

金城さんだ。その表情はまるできらきらと子供のように輝いていた。

「私も見たいっ」

勇気もこれに賛同した。これはこの映画に決定だろうか。ダメ押しに僕も乗っかる。「僕もみたい」

「ちよつと、まてまて。せつかくの映画だぞっ。男女がいるのにこれはないだろう」

そこに修平だけ反対した。みんなはきょとんとした様子で修平を見た。

「え？ みんな見たそうだし、これでよくない？ 私もこれがいいし」

勇気が修平に反論する。

「いやいやいや。だつてさ、このメンバーでいきなりホラーなんてなあ。もつとなあ、ああ、ほら！ 他にもよさそうなのがあるだろっ」

「でも、みんながこれみたいっていうんだからさ。ねえ律」

「うん、僕もこれ見たかつたし……」

「え？ そ、そう？」

ちらつとみんなを一見する。ここまできたら修平を引き下がれない、でもといいかけたところで勇気が言葉をさえぎる。

「まさかあんたさ、ホラー系苦手なの？」

くすつと修平を侮蔑したように笑う。

「そんなんじゃないよ！」

修平は顔を真っ赤にし、反論した。けれど修平のその反応が苦手

だということが誰の目にも明らかだった。ここぞとばかりに勇氣は修平を問い詰める。

「うわ、だっさ。男のくせにこんなのも見れないの？」

「うるせー、そうじゃねえし」

「じゃあいいじゃんさ、別に」

「う……いや、まあ」

修平はもう誰かの助けを求めるように僕に合図をしていた。かわいそうだったけど、僕はどうもしようも出来ずに、苦笑いを修平に返すことしかできなかった。ごめん修平。結局、全員一致(?)で『首首首』になった。その後修平は見るからにテンションはダダ下がりだった。一方、女子陣たちはこれをきっかけに話に花が咲いたみたいで仲むつまじそうに会話をしていた。電車が終点の新安城駅にたどりつくところで一度乗り換えた。目的地の栄駅につくまでは後地下鉄を利用して約一時間という時間をかけてたどりついた。

「わあ、楽しみー」

金城さんは最初あったときの印象とはずいぶん変わっていて、テンションをここにきて最高頂を迎えていた。修平はさすがに覺悟を決めたのか、メンバーを先導するように前を歩いた。シネマはパルコの最上階にあった。エスカレーターを上りきったほぼ真正面にあるそこは見た感じおしゃれなカフェであった。

正面にはチケットを購入できるカウンターがあり、その周りはずっとたり待てるようなカフェみたいに設計されていた。多くの人は映画の開場時間を待っているようで、コーヒーや紅茶を片手に団欒としていた。カウンターまで行くと、高校生五人でチケットを購入することにした。

「あつ、学生証を忘れた」

凜花がそう一人ごとのように漏らした。うわ、あざとい。すると店員さんが凜花に気を利かせてくれた。

「大丈夫ですよ、学生さん五人ですね」

「すみません、ありがとうございますっ」

僕はチケットを受け取ると隅に空いていた椅子に座って上映時間になるまでそこで待った。しばらく談笑していると店内アナウンスが流れた。

「おまたせしました、十二時三十分開場の『首首首』が始まります。こちらから開場になりますのでチケットのお持ちのお客様は今一度確認してください！ チケット横に書いてある番号順にお呼びしますので、今しばらくお待ちください。繰り返し……」

フロントの方から開場のアナウンスが響いた。

「おっと、そろそろいくか」

修平はすつと立ち上がった。ぼくも修平に続いて立ち上がった。

「ええと、番号は」

僕の番号は二十九番目。他のみんなも順列になっている。

「続きまして、二十番から三十番のお待ちのお客様」

僕らはチケットを従業員に渡して入場した。入場すると、金城さんと凜花は周りの目もくれずにゲートまで一直線に走りだした。二人はどうやらシネマに来るのが始めてらしく、その興奮を子供のように振る舞っていた。後から三人遅れて暗闇のゲートの中に入ると、凜花と金城さんが通路手前でなにやら吟味していた。

「こちら、後ろが悶えているから早く座るぞっ」

修平が一喝する。何やら二人はどの席がいいか思案していたところだ。

「じゃあ一番前！」

「わあ、やったっ」

「行こ！ 金城さん」

凜花は金城さんの手を引っ張って一番前席の方までかけていた。

「ま、マジ？」

修平はあきれているのか、びびっているような複雑表情を浮かべていたが、凜花と金城さんの強引さに押し切られ、渋々最前列に座った。

「まじかよ、凜花ちゃんや香織ちゃんってこんな子だったの？」

その言葉は本人達に届く様子は全くといっていいほどなかった。二人は目の前に広がる大スクリーンに高揚していた。

金城さんは感慨深く、恍惚に大スクリーンを見とれていた。僕は右から修平、金城さん、凜花、僕、勇気といった順番で座っていた。シネマには次々と人が雪崩れ込んできて、圧倒いう間に後ろの席がうまってきた。ざわざわ、と暗闇で話し声が騒がしい中、大スクリーンの真ん中に横一線の光が走り、間もなく映像が映し出された。

「うわああああああああああ！！！！！！」

[illegible]

怖音の叫びが聞こえていた。しまいには、奇声まで聞こえてきた。

「いるかい、修平」

明らかに周りの客から迷惑な叫び声に勇気が修平を叱りつける。

「いやだつて怖いだろ……っひい！」

僕は映画の内容よりもそっちの方が楽しみであった。

二時間ちよつとの時間を終えて、映画は無事終了となった。さっきまで暗かった場内がいつきに明かりを取り戻した。それが終了の合図となり、僕は立ち上がった。

「首が撥ねた所はびつくりしたねえ」

「ですね、私も今でも心臓バクバクってます」

金城さんの横を見据えるとなにやら、変な物体ともいえるようなモノがあつた。修平は完全に沈黙していた。

そういえば開始数分ごろには修平の奇声が聞こえなくなつたな、
 と思い出す。修平を改めてみると憔悴きつた顔は白く、修平を呼

んでみても全く反応はなかった。

「おい」

仕方がないから軽く平手うちを試みるが、それですら反応がなかった。勇気が見かねて、力任せに頭部に拳骨をかますと、ぱちんと何かが起動したかのようなゆっくりと修平は活動の再開を始めた。

「……あ。俺、寝てた？」

ははは、と力なく笑う様子はもはや別人そのものだった。勇気も僕もさすがに動揺して病院につれていこうか、と思ったけれどこんなにも意識がはっきりしているから、と修平一人にしてしばらく放っておいた。

修平がようやく正気を取り戻したのはシネマを出てからしばらく歩いた後だった。

「おう、さっきの映画面白かったな！」

「え？ 修平、戻ったんだ？」

意気揚々と話す修平に僕は驚く。勇気は隣で肩をすくめ、やれやれうるさいのが戻ったと呆れ顔をしていた。

「ああ、なんかあの映画を見てからちよつと別人格にでも体感したような気分だったぜ……。いやー、俺あんな体験初めてだったわ」「そ、そっか」

ここでぐう、と少し小腹がすいているのが、わかった。時刻は二時半過ぎだったので、それもそのはず。「どこか入ろうよ」と僕が提案すると近くのファーストフード店に入って、席を五人分陣取った。

最初は誰もが食事を取るつもりで入っただけだったのだが、思いの他会話が盛り上がってしまった。気がつくと日が暮れるまでそこで話していた。それも可能な限りだ。でも、僕らはそれぞれ帰るべきところがあり、そして守るべき日常が常につきまとっている。もちろん、それは僕も例外ではなかった。皆が話している最中に突然修平は席から飛び上がった。

「どうしたの？」勇気が聞いた。

「あ、いや。……ははは」

何にもなかったかのよう、修平はすぐに席につく。なんなのと勇気は問いただが、修平はひたすらシラを切った。ようやく勇気の尋問を終えた修平はおもむろに携帯を取り出して一心にボタンを押していた。すると、鞆に入っている僕の携帯が振動した。携帯から取り出し確認すると、送信者は修平だった。『香織ちゃんのプレゼント買うのを完全に忘れていた、律一緒に手伝ってくれ！』画
面から視線を外し、顔を上げると、修平に頷いて合図を出した。一
応、了解と打ち返した。

今度は修平が僕のメールを確認すると、よし、と声に出すと胡散臭い演技で突然こうきり出した。

「あゝ、そういえば冬用のほしいコートがあった、ちょっと見てくるよ」

と明らかに会話の流れに合っていないかった。

「え？ この間、冬用のコート買っていたじゃん」

あ、僕が突っ込んでしまった。しまった。修平はさらにたどたどしい様子になる。

「あ、あれだよ、親父の誕生日だよ。今年は寒いからさー、はは」

「そ、そうだよな」

「修平のお父さんの誕生日って先週だったよね？」

今度は勇気が修平にツツコミを入れた。

「あ、あゝ、そうだった……かも。あは、あはは」

修平は言葉数が減り、いつていることも言葉もあいまいになってきた。目が泳いでいる中で僕を見つけ、コンタクトで助けを請うように訴えた。でも、僕はどうしようもなかったので、俯き知らないフリをすることにした。

「とりあえず、そういうことだっ！ ほら、律もいくぞっ！」

修平はその場の空気をすべて無視し、無理やりに僕の腕を取った。
「律は関係ないじゃん！」

勇気も僕のもう一方の腕をとると、そのまま僕は両者の板ばさみ

に合い、修平と勇氣は口論まで発展していた。

「ちよつと、ちよつと」

「うっさい、律は黙つてて！」

「まあまあまあ」

僕は勇氣の腕を取り、後退つてその場から離れ、勇氣をだけを連れ出した。三人からは話し声が聞こえないくらい離れたけれど、それでも小声で勇氣と肩を寄せ合つて話した。

「まあ、ちよつと話を聞いてよ」

「何々、変なことなら承知しないわよ」

「実はさ、修平が勇氣に日頃の感謝からプレゼントを用意したいつて僕に提案してくれたんだ。僕もさ、勇氣にはお世話になっているから何か贈り物をしたいんだよ。だから今から二人で何か買いに行つてくるつもりだったんだ」

僕は事細かに詳細を話した、ちよつと話はズレているけど。

「えー、なんかうそくさい」

勇氣は怪訝そうな顔をし、明らかに疑い混じりの顔だ。や、やばい。形勢を立て直さないとい。

「そ、そんなことないよ」

「ふーん」

「僕や修平は本当に勇氣に感謝しているんだ、だからお礼はさせてよ」

「……律がそこまで言うなら。うん、わかった」

勇氣は少し恥ずかしそうに答えた。よしこれで承諾はいただけた！ 僕と勇氣は何事もなかったように席に戻ると、勇氣は黙って座った。

「だ、大丈夫だったのか？」

修平が小声で僕に耳打ちしてくる。

「うん、なんとか」

修平は何がよくわからなかったが、じゃあと僕の手を引いていた。「じゃあ、俺らちよつと行つてくるよ」

「あつ、ついでにデパートの裏のたこ焼きを買ってきて！　もちろ
ん、三人分ね！」

と勇気は高らかに修平に言った。うち、と修平は舌打ちすると。
「わかった、わかった。たこ焼きでもイカ焼きでもなんでも買って
きてやるよ」

といっぺお店を後にした。僕もその後を追って店を出た。

「さあ、どこに行く？！」

修平は張り切っていた。

「え？　決めてなかったの？」

「そりゃあ、俺だけで考えてもわかんないからさ」

「ええ、そんな……」

「おいおい、頼むよ、親友。そうだなあ、とりあえずもう一度でデ
パートまで戻ってみるか？」

「うん」

さっきまでいたデパートの中を再び入る。もう辺りはすっかり暮
れているのに、中はまだ混雑していた。僕らは行くあてもなかった
が、ひとつはつきりしていることはそんなにも時間はかけられない
ということだった。さすがに女の子を放っておいて、長時間ぶらり
とするのはよくないと思う。そうすると闇雲に探すよりも、見る場
所はある程度絞ったほうが良かった。

「そういえばさ、金城さんって趣味とかってあるの？」

「え？　そうだなあ、俺もあの人のこと詳しくはわからないんだよ
な。ただ、家柄はすごく純和風って感じなんだ。香織ちゃん茶道と
か華道やっていたって聞いたことあるな。今やっている弓道も小さ
い頃にお母さんに教えてもらって今も続けているらしいし」

品行方正の彼女は今なら納得できる。

「金城さんの家ってすごく厳しいの？」

修平は「ああ」と頷く。

「家柄が厳しいというよりも、お父さんがすごく厳しいらしいんだ。
門限も早くて、高校になっても五時だって話していたし」

「へえー、そうなんだ。ますます修平とは正反対だね」

「はは、と修平に乾いた笑いが聞こえた。」

「どういう意味だ、律？」

「顔は笑っていなかった。」

「冗談だよ、冗談。ねえ、金城さんって見た目よりも、すごく明るいしおしゃべりな子なのにあんまり遊んだことがないようだね。今日の金城さんが凛花と勇気と話している様子を見るとさ、本当はもっと普通の女子高生らしく過ごしたいんじゃないのかなって思った」

「うーん、そうかもな。本人もあんまり時間ないって言ってたしな」

「へえ、そうなんだ」

「うん。律の考えていることはよくわかるな。で、俺は何をプレゼントしたらいいんだ？」

「え、えーと」

「思ったことを率直に言っちゃってしまっただけで結局金城さんの感想になってしまった。そうだ、本題はプレゼントだ。」

「じゃあさ、ネックレスとかどう？」

「……なんで？」

「家柄が純和風とかならあんまりそういうもの持ってないかなってほら、今日も装飾品とかしてなかったし。あつたらすごく似合うと思うし、金城さんも欲しいんじゃないかな？」

「僕の出した提案にすごく納得したのか、修平は「うん、それだっ！　そうしよう！　さすが俺の親友」というと、がしつと肩を組んできた。」

「じゃあ、行こう。あまり時間ないしさ。さすがに女の子をずっと待たせるわけには行かないから、早いところ決めないと」

「おっと、そうだな。勇気のたこ焼きもあるしな。じゃあこっちだ」

「なんだかんだで、修平はちゃっかりしていた。僕らは一階にある、ジュエリーショップに立ち寄った。詳しくはわからないが、そこのショップよりかは大きくて男性用も女性用両方品揃えは良かった。」

「うーん、どれによろかな」

店内にはブランドごとにコーナーがあつて、修平は女性用のジュエリーのところで一人腕を組み迷っていた。僕は男性用の指輪のコーナーにいた。修平の手伝いをしたいと思つたが、入り口付近でこの間見た、サーティーンズブランドのコーナーがあつたから釘付けとなつてしまった。

駅前に比べると、段違いに品がそろえてあり、駅前の店ではみることのないものまであつた。時間を忘れるくらい僕は没頭してコーナーの前に張り付いていた。しばらくすると、買い物を終えた修平が僕のもとにやってきた。

「おう、買つてきたぞ」

「あ、おかえり」

僕はまだ指輪に釘付けだった。

「おい、どうしたんだその顔？　気持ち悪いぞ」
「え？」

近くにある鏡を見ると、目の下に黒いクマがくつきり浮かびあがつていた。いや、目の下だけではなく、よく見ると顔全体が前よりも黒く、ひどくつかれきつたような顔をしていた。そこに映っている自分は気持ちが悪かった。

「な、なんでもないよっ」

鏡の前を逃げるように離れ、修平に背を向けながら急いでその場を後にした。

その後、お店を出てからだった。

僕の視界に異質なものが映った。それは今までとはパーツが何か追加されたような違和感。人々の体の一部が黒くなっていた。頭、腕、胸部、体のどこか、それはとても簡潔にはいえなかった。闇が人の一部を覆っているかのように見えた。

人によつて大きさは異なり、その闇が小さい人もいれば、もう全身に闇が覆いかけている人もいた。自分の体を見る。自分の体の半分以上は闇に包まれていた。横の修平を見ると、目でみても全然気にならないくらい小さい闇があつた。

「律、さつきから変だぞ」

修平は心配そうに僕を見た。

「あ、ううん。なんでもないよ」

自分を隠すように半歩修平の先を歩く。

「結局、どんなものを買ったの？」

「クマの形をしたネットレスにしたよ」

「……へえ、そっか」

僕はできるだけ平静を装いように答えた。僕らはたこ焼き屋に行つて勇気の言う通りにし、たこ焼きを購入すると急いで店まで戻つた。店から出て一時間ちよつと経つてしまつたが、凜花たちはまだ話していた。

「遅れた、ごめん」

僕らが謝ると、三人は全然気にしていなかつた。席に座ると、目の前に見えた、世界に驚愕した。先ほど修平に見えた闇が金城さんにも勇気にも同様に小さい闇が見えた。それが何を意味するかはわからなかつたが、気持ち悪く見ることを僕は避けた。そして最後に凜花を恐る恐る見た。僕はそこで何よりも驚いた。

光があつた。

周りを導き照らすかのような、そんな光が凜花の中に見えた。それは触れれば何もかも包んでくれそうだった。そしてぬくもりがあった。そう、聖母のような包容力と安心感がその光から見えた。

それが凜花の中に見えた。

……すつと、体が浮いたような感覚に陥つた。先ほどまで見た、人の中に見える闇は次第に薄くなつていった、そしてやがては見えなくなった。凜花は僕の顔を見ると、ニコッと笑つた。

「そろそろ行こうぜっ」

修平が立ち上がる。

その合図でみなは一斉に自分のトレイを始めていた。帰りの電車、はじめより明らかに親密になつた僕たちがそこにあつた。凜花がそつとこつちに体を近づけてくると、小声で耳打ちをした。

「律、後で付き合ってくれない？」

僕は一つ頷くと凜花の方を見て頷いた。凜花のことだからまた突拍子もないことでも思いついたのだろうと予想していたが、真剣な凜花の表情で見つめる様子から見るとそうではなかった。

僕等は集合した駅の前で解散した。修平と金城さんは同じ方向で、僕と凜花と勇氣は同じ方向だったので、修平と金城さんは駅で別れた。凜花は自転車を持っていなかったため、僕の荷台の上に乗せて発進させようとすると、勇氣がむっと顔をしかめた。僕らはそれぞれの道に向かって自転車を走らせた。帰りの道中、会話の内容はもちろん今日のこと盛り上がった。勇氣も凜花も僕も今日の楽しかった思い出を振り返っていた、そして思い出すように笑った。

「ばいばーい」

「うん、勇氣またねっ」

勇氣とは別れ、やがて僕と凜花二人きりになった。僕らが最初に知り合った公園の前に通ると凜花は「止めて！」と言った。自転車を止め、公園のなかへと入り、凜花は一人ベンチで座って僕を待った。同様に自転車を公園横に止め、凜花のいるベンチまでその足でかけた。凜花のもとまでほんの数メートルだったのだろうが、僕の足元は覚束なくなり、膝が笑う。

「あ……おっとと」

異変に気付き、小走りをやめ、歩いて向かおうとするが僕の膝はまたもかくん、と折れて、ついには思うように動かなくなっていた。凜花がいるベンチまでほんの数メートル、その数メートルがとても遠かった。震える膝は立ち往生さえできなくて ついには地面に突っ伏した。

「律っ！」

凜花の叫ぶ声が遠くから聞こえた。

「ん……」

僕が目覚めたときは、白一色のベッドの上に寝かされていた。目を横にやると、パイプ椅子にうたたねをしている凜花がいた。凜花は気がつくのと、優しい顔でおはよう、といった。僕が起き上がろうとすると、凜花が制した。

「だめっ。安静にしている。今、看護師の人を呼んでくるから」

そういつて、凜花は立ち上がった。僕は意識が飛んで眠っていたせいか、体はすこぶる調子がいいように感じた。けれど、感じたことのない頭痛を感じた。しばらくすると凜花は医師と看護師と一緒に病室に入ってきた。

「……え」

僕は思いがけない光景に驚愕した。医師の人に、そして、隣に立っている看護師の中に闇が見据えた。だが、それだけではなかった。言葉が物質的に顕著に見える。まるで文字が空气中に浮かび上がっているように見えた。

「浦山律君だね。体調は大丈夫かね？」

（忙しいのに、めんどろな餓鬼だ）

「はい」

「えーと、どうやら過労みたいだね、どこかいたい所ある？」

（早く帰れよ）

「あつ、少し頭が痛みます」

僕はその医師から二つの声が聞こえた。

「うん、わかった。明日一応検査をしてみるが、問題なければ明日中には退院できるよ」

（オマエハ、ジャマダ）

「ありがとうございます」

「お大事に」

看護師が別れ際に言った。

（キエロ）

なんだっただ。まるで人の醜い本心のようにも感じられた。僕は少なくとも、あの言葉にとてつもなく、ショックを受けた。医師と看護師が去ると再び凜花と二人つきりになった。

「ここは？」

「西尾総合病院よ」

ああ、母さんの入院している病院だと僕は気がついた。

「……ごめん」

「ううん、いいよ」

と短く一言だけ凜花は言っていた。

「それより、大丈夫？」

「……うん、多分」

あつ、そういえばと僕は思った。

「そういえば、公園であつた話したいことって結局なんだっただの？」

凜花は「ああ、そのことね」といって、少し顔を曇らせ言葉を濁した。

「え、と……また律が退院した後でもいいかな？ さすがにちょっと疲れたんじゃない？」

僕はそんなことはない、言い返そうか思ったけれど、これ以上凜花には気を使わせたくないと思いその場は踏みとどまった。明日には退院できるじゃないか、それからでもいい。

凜花は話し終わると、椅子から立ち上がった。凜花はいつもの笑顔を残し、病室のドアの取手に手をかけた。

「ありがとう、凜花」

「うん」

それだけ言つて凜花は出て行つた。

翌日、僕は母の入院している病院で精密検査を行い、体に異常が見られなかった僕は早々に退院できることになった。後は、退院の手続きをすればと、早めに退院の準備をし、退院する支度も終えた。それが終わると、母さんの病室まで顔を出した。

部屋に入ると、人工呼吸器の機械音だけが一定のリズムで聞こえた。ベッドの横のパイプ椅子に座ると、その様子を眺めた。布団から母さんの手を取り出し、両手でぎゅっと、握りしめる。

「……母さん」

母さんの腕は痩せ細ってしまい細く、僕の知っている母さんの手ではなかった。でもそれでも母さんが穏やか様に眠っている姿をみるだけで安心した。それだけを確認すると、病室を後にした。

晴れた昼過ぎ、一日だけだったけれど退院することになった。

自分の荷物を持って病院をでると、外では凜花が一人僕を待っていてくれた。白いワンピースに、ビーズが入った水色のサンダル。飾り気はなかったが、それがとても凜花らしかった。凜花は僕が病院から出てくる様子を見つけると、僕に向かって大きく手を振った。

「なに、あの子彼女？」

横についていた看護師さんが僕に聞いてきた。

「い、いえ、違いますよ」

「え、そうなの？　ちゃんとしなきゃだめよ。うちのだんなみたいに甲斐性なしに……」

「……ええと、多分大丈夫です」

そう言った僕を看護師は首をかしげて不思議そうに見た。

「何々、なんの話？」

近づいてきた凜花が話を割って入ってきた。

「なんでもないよっ」

「ふーん」

訝しげに凜花はジト目で僕を見た。僕は慌てて看護師さんの方へと体を向けた。

「あのっ、短い間でしたけどお世話になりました」

ぺこ、と僕はお辞儀した。「もう来るんじゃないよ」と看護師さんは言い捨てると再び病院の中へと戻った。

「で、さっきのはなんなの？」

んー、と凜花は顔を覗き込んできた。

「いやいや、本当になんでもないよっ！」

「ふーん、まあいいわ。ほらっ、行こ！」

凜花は僕の腕をつかんだ。

「え？ どこに？」

「そりゃ、律の家によ。今日は私が一応面倒をみるわ」

「めんどうつて……」

でも、僕は正直うれしい気持ちでもあった。僕は凜花の手に引かれながら、そのぬくもりを大事に噛み締めた。

家まではタクシーを使つて帰った。

凜花と僕は家に上がりこむとリビングへと向かい、そこで一息ついた。僕はソファでだれていると凜花が僕に話かけてきた。

「あつ、そういえば担任の楓先生には連絡はいれておいたから。一応、律からも電話かけた方がいいと思うよ」

「うん、ありがとうつて……凜花、何で？」

「ああ、そりゃあ律の鞆の中を漁ったからね。ほんと、一応変なものが入ってなかったよ？」

「学校の鞆の中に変なものは入れないって！」

「ということはこの家のどこかにあるってこと？」

にやり、と凜花は微笑んだ。

「ないって！」

僕は顔を真っ赤にして否定した。

「その顔で言われても……」

くすつと凜花は笑いだした。僕はそれ以上何も言い返せなくなってしまった。

「もう、いいよ」

僕はそっぽを向いた。

「そんなことより、早く電話かけたら？」

また嫌な笑みを向ける。

「あつ、そうだった」

僕はあわてて受話器を手を取った。三コールで楓先生が出てくれた。

「はい、西尾市立西高校です」

「あ、浦山です」

「浦山か！ 体調は大丈夫か？」

「はい、なんとか大丈夫です」

「まあ、季節の変わり目だしな。風邪を引くこともあるわな。お大事にな」

「はい、ありがとうございます」

「ちゃんと風邪治して、元気よく登校しなさい」

ガチャリ、と受話器を置いた。僕は再びリビングに向かうと、凜花は二人分の飲み物をテーブルの上において待っていてくれた。

「凜花、ありがとう」

僕は感謝の気持ちを込めてお礼を言った。

「何が？」

「色々と気を使ってくれて」

「……そんなお互い様だよ。私が困ったら律になんでも押し付けちゃうよ？」

「うん、そうしてくれると僕も嬉しい」

でも、凜花に出来なくて僕にできることなんてあるのだろうか？
僕の知っている凜花は、本当に気が利く女の子で、人を明るくさせるような、太陽のような存在だ。そんな彼女に何ができるのだろうか。

「できるよ」

「え？」

「律にも私を助けることができるよ」

僕は心を読まれていたのかというくらい、本心を突かれていた。

「だから大丈夫」

凜花はその後の一言付け加えた。ああ、この言葉で僕はどれだけ救われたか。僕は精一杯の感謝と自ら背伸びをして、僕なりの形で

言葉にした。

「うん、頑張るよ」

「うん」

と、凜花は返してくれて、いつものように明るい笑顔を僕に向けた僕もそれにつられて、笑顔を返した。一緒に夕食を終えると凜花は「今日は帰るね」と言って帰りの準備の支度をしていた。僕はそのまま彼女を玄関先まで見送った。

「じゃあ、また明日」

「うん、また明日」

ばいばいと手を振って玄関先を出た。僕は家門まで出て彼女が見えなくなるまで、見送っていた。その姿は軽快なステップで歩いてく姿があつた、それが存在しないものとは僕には信じられなかった。

翌日、いつも通りに学校に向かった。家を出てから学校に着くまで、いつもと変わらないようにと一連の動作を繰り返した。朝起きて、着替えて、朝食を食べ、準備や支度をして、行って来ますといつて家を後にする。自転車に乗り校門前で制服のチェックを行い、校内に入る。教室に向かうまでの階段を一段一段昇ってゆく。

お昼休みにはいつものように屋上へ向かった。案の定誰もいなかった。

「んー、ここが一番落ち着くな」

背筋を伸ばし、ストレッチをした。季節な十二月半ば、この季節になるとさすがに風当たりは強く寒かった。でも、太陽の活動は活発で冬空の下にいる僕をカンカンと照らしてくれた。だから、気持ちと寒くなかった気がした。僕はそのまま地面に寝そべった。

「冷たっ！」

さすがにコンクリートは冷えていた。律は体勢を立て直し、胡坐をかいでしばらく空を見上げることにした。

特にこれといった好きな青空は特別なかった。一日の始まりとも

言える朝焼けも、雲一つない、透き通るような青空も、そして夕暮れに沈む神秘的な赤く染まった空も僕は全部好きだ。でも、なんでだろう。何が？ と聞かれたらよくわからないが、僕自身空を見ることで落ち着くのであった。律は朝とは考えられないほど、自身が落ち着いていることを確認した。

誰かがすごい勢いで階段を昇ってくるのがわかる、その音は屋上にいる僕にまで聞こえてきた。その音は次第に大きくなり、屋上に近づいていることがわかった。

ボタン、と勢いよくドアをあけると同時に僕の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「律！」

修平が僕を呼んでいた。僕は振り返ると、軽く手を振った。よくみると、修平の後ろには楓先生が立っていた。先生も急いできたらしく、息遣いも荒かった。

「浦山、今携帯は持っているか？」

「はい、もちろんもっていますけど……」

「ちょっと見てみる」

そういうと僕はポケットから携帯を取り出した。着信履歴八件、すべて西崎さんの文字で埋まっていた。一分ごとに着信が入っていた。これは、どういうことだ？

「先生……」

「今すぐ校門のところに向かいなさい」

僕の言葉は先生の言葉によってかき消された。先生と修平は事情も話さず、僕を校門まで催促していた。僕は仕方なく、立ち上がり校門の前まで向かった。

「やあ、すまないね」

校門の前には西崎さんが立っていた。西崎さんは警官の制服を着ていたせいか少し、迫力があつた。昼休みのせいもあるのか、周りには数人の生徒がこそこそと小声で話をしていた。無理もない、こ

んな普通の高校に警官の制服を着ている男がきているのだ、当然何かあったのだと誰もが思うはずだ。

「おっと、ごめんね。ちよっとこの格好じゃ目立つよな」

そのところは西崎さん自身が一番よくわかつていているようだった。

「いえ、大丈夫です」

僕は本題に入るように話を逸らした。そっか、そっか、と西崎さんはこちらに笑顔で答えた。すると、西崎さんは表情が一辺して真剣な表情をした。

「律君、留守番電話聞いた？」

「いえ、まだ」

僕は素直にそう答えた。今度はその表情には笑みがなく、むしろ深刻そうな顔をしていた。

「あなたのご両親を轢き逃げした犯人が今朝自首してきたんだ」
そう切り出した。

一瞬、何も考えられなくなった。まだ感情が追いついていない。
「今、うちの署で身柄を預かっている」

西崎さんの表情はこわばる一方だ。僕はどう反応したらいいかわからなかった。よろこぶべきなのか、それとも。僕はただ西崎さんの次の言葉を待った。

「それでなんだが、どうにも相手方がどうしても君に謝罪をしたいと言っているんだ。いや、本当はこう言ったことは駄目なんだけど、その律君が希望するのなら顔を合わせる程度ならなら……」

少し西崎さんは声をどもらせる。

「会ってみるかい？」

西崎さんは僕の目をまっすぐ捉えた。重厚な西崎さんの瞳は僕の心を揺さぶった。どうしよう。どうすればいいのだろう。少し考えたが、やっぱりここは会うべきなのだろうと思い西崎さんの問いかけに頷いていた。西崎さんは、そうかと一回頷くとすぐ車の手配をしてくれた。

署までは高校から十分程度の場所に位置し、ちょうど市役所の反

対側にあつた。西崎さんは同じ警官服を着ている人に一人一人に挨拶をし、奥の部屋まで向かつていった。

「ここだよ」

そういつて僕に先に入るように促した。どくん、とここにきて心臓の音がさらに高まる。そこから聞こえる脈はいつもよりも幾分まして、何か嫌な動悸だった。僕は一步を踏み出して、重たい扉をあける。

扉の先には三畳ぐらいのスペースに数脚の椅子と中央に机が置いてあるだけだった。そこに一人の中年の男性だけが座っていた。てつきりこわもての警官が何人がかりで尋問しているものだと思った。ちよつと拍子抜けだった。中央の椅子に座る男性は反省しているのか、顔を下に向き俯いているように見えた。小さく縮こまってんだか可哀想だと思った。僕が扉を開けても、ぴくりとも動かず、そのまま俯いたままだった。

「顔を上げなさい」

西崎さんがそう言うのと、男は最初少し抵抗する素振りを見せたが、ゆつくりと顔を上げた。そこで一瞬目が合う。力のない目、光が感じられない。僕はその様子を見つめていた。男はすぐさま下を向いてしまった。

「こんなことをやってしまつて……。とてもじゃありませんけど、顔向けなんて出来ません……」

男は嗚咽交じりにそう話した。その後、連呼するように、ごめんなさい、ごめんなさい。と言い続けた。僕はそれを黙ってずっと聞いた。もういいです、なんて言ってしまうのはダメな気がした。僕は男性が謝っている言葉をずっと反芻していた。僕の中でどうしたらいいか答えはでず、よくわからないという疑心に陥った。

ただ、意外だった。すぐく人がよさそうだったから。なのに、なんでこんなことになってしまったのだらう。男の人の薬指には指輪がはめられていた。もしかすると、この人も子供を持っているかもしれない。そう思うと、少し男が惨めなようにも感じた。

「ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさいっ」

でもその一方で別の感情がわいていた。その感情は男が謝罪を繰り返すたびに強く反発した。

憎悪。

殺意に近いものだった。男が言葉を重ねれば重ねるほど、言葉そのものの重厚さをなくし、逆にそれがいらだたせた。自分の湧き上がる感情はやがて、大きくなり抑えられなくなっていた。自分自身もぎりぎりだった、毎日不安というストレスがここにきて爆発仕掛けていた。

それが今、ちょうど爆発した。

殺せ。

体の内部から鈍い音がした気がした。嫌な音だと自分でもわかるぐらい。次の瞬間、律は頭よりも体が先に動いていた。言葉にもならない、まるで獣のような奇声を上げ、本能をぶちまけるように、その矛先を男に向けた。

「あああああああああ！」

動物のように大声でほえた後、男の胸倉をつかみ椅子から引きずり立たせた。

「お前が、お前が！」

「り、律君……」

胸倉をつかまれた男にもその狂気に怖気づき、ごめんなさいと連呼するばかりだ。

「許さない！ オマエなんか、殺してやるっ！」

その言葉がさらにいらだたせ、最後の方にははつきりと口に出していた。腕を振り上げ拳を握りこむと、一直線に男の顔面へと振りぬこうとした。

「律君、ダメだ」

西崎は必死になって、止めようとした。

「やめないか、律君っ」

後ろから西崎さんは僕の両腕を無理やり押さえた。

「律君、落ち着いて！」

「落ち着けるわけじゃないですよ！ この人が僕の父さんと母さんをあんな目にさせたんですよ！」

僕は拳を握り、右手を振り上げる。

「こんな事をしても律君の両親は喜ばないよ！」

「知らないですよ！ もう父さんや母さんはいないんだ！」

が、男性の前にある机を僕は蹴飛ばした。部屋中に大きな音が反響する。

「僕はやられたことをやり返すだけです、その何がいけないんですか！」

物音に気がついた警官が部屋の中に入ってくる。数人の警官が部屋に入りこみ、部屋が人で一杯になるくらい、入ってきた。少年は激しく抵抗したが、さすがに最後は見事に取り押さえられていた。

「ああああ！ 離せ、離せよ、あいつが、父さんと母さんを……！」

大の大人が数人で押さえてから数分、僕はようやく落ち着きを取り戻していた。

「はあ、はあ。……もう大丈夫です」

そういうと、複数の警官は警戒しながらゆっくりと手を離れた。

「すみません、取り乱して」

軽く頭を下げ、西崎に謝罪をした。

「いいよ、大丈夫だから」

西崎は精一杯の笑顔で返した。西崎はその場で腹部を抱えてうずくまった。

「大丈夫ですか、西崎さん！？」

「ああ、大丈夫。ちょっと打っただけだよ」

「……すみません」

僕は西崎さんに申し訳なさそうに頭を下げた。

その後、律は部屋から退出され西崎さんに家にまで送っていつてもらった。車の中では重苦しい空気が流れていて、会話すら交わさ

なかった。それでも別れ際には丁寧にありがとうございました、と挨拶をした。僕は車が見えなくなるまで見送り、そして家の仕切りを跨いだ。

部屋に戻ると、律は最初に携帯電話を取り出した。そういえば、今日はまだ、見てなかったとふと思う。

着信二件、メール三件。

案の定、誰かから連絡があった、今日は学校であれだけ騒いだんだ、無理もない。着信は修平から二件、時間は昼休み時間だ。メールは三人から、修平からと男友達二人。内容はどれも似た様なものだった。気分はどうだ？だの、何かあったら連絡しろよ、など心配をしてくれてメールをくれたんだろう。今更なんだよ、人事みたい

に。
「……くそ」

なぜだか腹の虫が収まらなかった。

その夜、僕はベッドに入って考えることをした。学校のこと、友達のこと、父さんや母さんの家族のこと、そして昔のことを考えた。楽しいことやうれしいこと、つまらなかったことや悲しかったこともすべて頭の中で思い返していた。

それなのに不思議だった。その夜は楽しかった思い出を思い出すことが出来なかった。思い出すことは出来たけど、嬉しいという感情がすべてあいまいであった。だから、おそらくそれは楽しい思い出だったのだろうと信じる他なかった。逆につまらなかったことや悲しかったことのことを鮮明に思い出した。一つ一つの思い出を振り返るたびに僕の腸は煮えくり返りそうになった。胃を誰かがぎゅっとつかまれたような感じだった。このもどかしいやるせない感情は僕の知っている世界は黒く、失望の色へと変色させていった。

やわらかい光が窓から差し込んだ。それが朝だということを僕に知らせた。昨夜は寝たかどうかかわからなかった、とにかく頭が重く体調は優れていなかった。

鏡に映る僕はもう僕じゃなかった。姿、形は僕そのものだったが、周りの纏っている禍々しいオーラはすでに僕のものじゃなかった。全身が黒い闇で包まれ、特に顔の部分はより一層濃い色で塗りつぶされていた。僕は手で自分の顔を確認するとようやくそれで自分というものを認識した。僕は自分の手で少し安心したが、鏡を見るたびに現実に戻され失望を繰り返した。出かける準備をして、僕はそのまま学校へと向かった。

校門を抜け、教室へと向かい、自分の席についた。今日もクラスは騒がしかった。ただ、内容は異なったものだ。僕はすぐ気がついた。その話の内容はなんとなくだけど、わかった気がした。僕がクラスに入ってきてから、小声でひそひそと話す生徒が増えた気がする。事実増えていたのだから。ああ、こんなものか、とただ一人としてその状況を納得していた。その日僕は修平以外に声をかけられることもなかった、無論先生からもなかった。僕は下橋先生の約束をすっばかし、あの場所へと向かった。

八ヶ面の麓に自転車を置き、自らの足山頂を目指した。季節はもう冬とはいえ激しい傾斜を登った後には、僕は汗をかいていた。山頂に着くと、僕は一直線に展望台に向かった。

展望台には先客は誰もいなかった。寂しい所だった。僕は一人手すりに両肘を置き、前のめりになる形で風景を眺めた。前回きたのは凜花と一緒にだったが、その時みた風景とはだいぶ違った気がする。すぐそこには自分の母校が見え、住宅地も見えた、よく見透かすと制服を着た子が自転車を漕いでいるのが見えた。僕が見ているこの景色は前回見た風景となんら変化はなかった。でも、違った。寂しさを僕は覚えた。いつも見えている空も今日はぼんやりとかすんでいた。

すると、別の誰かが展望台に昇ってくる音がした。僕が少し身構えて、客人がくるのを待った。厚着なのにわかる細身のスタイル、長くてつややかな髪、キュっとした大きな目、どうみても凜花以外

他にいなかった。僕の前にくるとこちらに無邪気に笑いかけながらえへへ、と笑った。

「律……どうしたの、こんな所で？」

「うん、ちよつと用事があつてね」

「嘘。わかるよそのくらい」

「……そっか、やっぱり凜花には全部お見通しなんだよね」

「まあね……」

そう言うのと、僕と凜花は黙って街の風景を眺めた。

「ちなみにさ、私は律に用があつて来んだよ？」

「……僕に？」

凜花がこくん、と頷いた。僕はそのまま振り返り、また空へと顔を向けていた。それに続いて凜花も僕の隣で空を眺めた。凜花は一人ごとのように僕に話した。

「律はこの街をどう思う？」

「そんなのわかんないよ」

「でも自分が今住んでいるこの世界よ？」

「わからないよ」

「そっか、そうだよねえ……」

とそれ以上凜花は聞いてこなかった。

「じゃあさ、凜花はこの世界のことどう思っているの？」

凜花はしばらく考えこんだ。

「私も詳しくはわかんないかも……」

それでも彼女はでも、と付け加えた。

「なんだか、この世界はあつたかいと思うよ。そしてこの街も」

「あつたかい？」

「うん、だってみんな繋がっているもん」

そういつて、彼女は遠くを見ていた。

「そんなの……嘘だよ」

凜花は黙って僕の話聞いていた。

「あいつらなんて、皆、みんな」

僕は運転主の男、親戚一同、クラスメイトの人達の顔を浮かべた。

「僕は信じられない」

とはつきりと口にした。

「じゃあ、私達は？ 私や修平君や勇氣ちゃんや香織ちゃんは？」

「信じられなくなるかもしれない」

「じゃあ、神様は？」

わからない、わからなかった。

凜花は少し俯いた、その表情は見えなかった。そして、決意をした顔でこういった。

「私は信じるよ。律のことを信じているよ。たとえどんなことをしても、どんなことがあっても、信じ続けるよ。それはもちろん私だけじゃないと思う」

「どうして？僕は凜花のことを信じていないかもよ？」

彼女はそれでも、と答える。

「もしかしたら、凜花のこと軽蔑してみるかもよ？」

「うん、大丈夫」

「例え僕が自分勝手にいやな大人になっても？」

「うん、信じる」

「僕は凜花のこと嫌いになるかもしれないよ？」

「うん、いいよ」

と強く頷いた。そして彼女はこういった。

「……大丈夫。律は、大丈夫っ」

僕に笑いかけてくれた。どうしてかわからない。でも凜花が笑うだけで、凜花の言葉一つで僕の中にあるジレンマがすべて瓦解していくようだった。同時に心から染み渡ってしまった感情の何かが溢れた。つう、と涙がそのすべてを物語った。凜花はその様子を見るなりに、ぎゅっと僕を包むように抱きしめた。ああ、これだ。僕が生きている世界はこんなにも暖かかったじゃないか、それを今まで忘れていたのに違いない。泣いている僕はどうしようもなかったけど、精一杯の気持ちを凜花に伝えた。えへへとまた笑っていた。僕

はこの笑顔で確信した。僕は这个世界で生きているんだ。

「ありがとう」

「どういたしまして」

「それとね……この間、話そうとしていた話なんだけれど」

僕は頷いた。

「もう限界　かもしれない」

凜花の穏やかな表情が消えた。

「じゃあ、私は一旦家に帰るからまた後でね」

「後で？」

「うん、今からちょうど一時間後に西尾市民病院に集合ね」

それは母さんが入院している先の病院だった。

「うん、わかった」

「……これですべてを終わらせるわ」

「うん」

僕は一旦家に帰宅し、また準備を始めた。ここにいたる経路はつい三十分ほどの前の出来事だ。僕は駆け足で家を出た。自転車を取り出し、急いでペダルを漕ぎ出した。結局僕が着いたのは集合時間の二分钟前。息は切れていたけれど。

「はあ、はあ、はあ……」

着いたのはいいけれど、誰もいなかった。

「凜花は……？」

あたりを探しても誰もいなかった。仕方ないのでしばらく待つことにした。

十分ぐらい待ったけれど、人ひとりとして律の前には来なかった。すると、ポケットの携帯が振動した。メールだ。送信主は凜花。『遅い、何をやっているの？』

僕は慌てて返信を返した。

『え？ もうきているの？』
すぐ返信が返ってきた。

『屋上』

僕は屋上まで走った。病院なのでなるべく静かに音を立てないように階段を駆け上った。ようやくの思いで屋上まで着いた。扉を開くと、吹き抜ける風が体を通り抜けた。

「遅い、遅い、おそーーい！」

ドアの前で待っていたのか、ドアを開いた瞬間目の前に腕を組んでいる凜花がご立腹の様子で匂い立ちしていた。

「はあ、はあ……ご、ごめん」

「んー！」

ぷい、っと反転して、歩きだした。

「でも凜花はなんだかんだ言っても優しいよね？」

というと、歩き出していた凜花の体が百八十度反転し、その勢いで手刀を繰り出した。

「いたっ！」

じーん、と頭に響くような衝撃を受け、ひざまずいた。

「だから、空気を読めっ！」

ふん、とまた反転して歩きだした。

「えへへ、凜花ってやっぱりかわいいね」

「律はずるい！」

するとまた反転して手刀を繰り出そうとした。僕は二度も喰らわないと思い咄嗟に頭を身構えた。だが、何もこなかった。凜花は顔を真っ赤にして時間が止まったように停止した。

「律の馬鹿……」

と言って今度は女の子らしく、くるっ、と回転するように歩きだした。

凜花は切り出した。

「それで、準備は出来たの？」

「なんの？」

とはて、と困った顔をした。

「死ぬんだから、最後に色々したいこととかある？」
とニコッと笑っていた。

「死ぬ準備?!」

「冗談だよ」

凜花から笑みが消えた。

「でもこれからすることは、かなり危ないかもしれない。律、今から私の夢の中に入ってもらおうの」

「夢の……中? えと、よく意味がわからない」

うんうん、と納得している凜花とは対照に僕にはさっぱりだった。
いや、常人の人ならわかんないはずだ。

「簡単に言つと、私の意識を介してあなたのお母さんに会いに行くのよ」

「……意識?」

「そう。『夢』を通じて律のお母さんに会いに行くの。そこで、あなたのお母さんの夢を覚まさせることが今回の目的」

「そうするとどうなるの?」

「もちろん律のお母さんは目を覚ますわ」

どくん、と僕の心臓は高鳴りを感じていた。

「でもね」

と、凜花は言った。

「他人の意識に介入するってことは相当の神経を要することになるの。だから長居し過ぎちゃだめなの。私は平気だけれど、律は普通の人間だから、あんまり時間は長くとれない。持ってせいぜい十分」

「十分……」

聞かされた言葉はあまりにも短く感じた。

「それだけじゃないわ」

「まだ何かあるの?」

「やつがくる」

凜花は真剣な眼差しで僕を見つめた。

「でも……大丈夫」

凜花はいう、決心を奮い立たせ、断固たる思いで、

「律は私が守るから」

時刻は七時前だろうか、この季節は太陽が僕らを照らしていられる時間は短い。夜の七時ぐらになればあたりは真っ暗だ。その中に僕と凜花は二人病院の屋上で潜んでいた。

「それじゃあはじめるわよ。じゃあ、目を閉じて」

「うん」

凜花は僕のおでこに頭をくっつけてきた。一瞬目を開けてしまっただが、凜花の真剣な表情に僕もそれに従った。しばらくすると僕の意識は除除に遠のくのがわかった。意図的に意識が飛んでゆくのがわかる……。

次に気がついたときにはまっさらなキャンバスに何も書かれていない白地の世界のようなだった。遠くから声が聞こえた。

「律、律、聞こえる？」

「うん、聞こえるよ！」

声の主は凜花だとわかった、ただ凜花の姿はどこにも見えなかった。

「私は今、律のお母さんの目の前にいるのだけれど……律はそうじゃないみたいね」

「うん、多分。ここはどこかな？」

「ええと、ちょっと私にもわからない。だから今から律がここまで移動してもらうわっ」

「どうやって？」

「簡単だよ、イメージをするだけ」

「イメージ？」

「そう、律の思っている母親の姿や形、それを強くイメージするのよ」

「母さんのイメージ……やってみるよっ」

「うん、頑張って」

母さんの イメージ。

僕は母さんの動いていたときの姿をイメージした。朝母さんが朝食を作っている姿、父さんと楽しそうに会話をしている姿、そして何より僕が一番印象強く描いたのは毎朝僕を家から送ってくれる母さんの姿。僕はそれだけ泣きそうになっていた。そうするうちに視界は少しずつだが鮮明で色のついた世界へと変わっていった。

「ここは……？」

あたりを見渡す。周りにはたくさんの木々の様な樹木がたくさんあった。その光景の一部に母さんと凜花が戯れている姿が見て取れた。

「律！ よかった、無事についたのね」

凜花はほっとした顔をしていた。

「うんありがとう、凜花。そして……久しぶり、母さん」

僕は母さんになんて声をかけたらいいかわからずそんなことを口にしていた。

「うん久しぶり、律」

ニコッと母さんの笑顔がみてとれた。

「律、やるじゃない」

いきなり母さんがはしゃぎだした。

「え？ 何が？」

「何って……こんなかわいくていい子と一緒になんて。律も男の子だね」

「え、え、ええ！」

僕より先に口に出したのは凜花だった。

「冗談っ。でも本当にありがとう凜花ちゃん」

「はい……」

僕は凜花が圧倒されている姿を見るのがはじめてだった。母さんはきちっと体勢を整え今度はさっきとは違い親としての顔になった。

「律、本当にごめんなさいね」

母さんは頭を下げた。

「いや、やめてよ、母さん。母さんは悪くないよ」

「いいえ、そんなことはないわっ、本当に律にはつらい思いをさせて申し訳ないと思っているわ」

僕はそれでも、弁解しようとしたが母さんの頑な姿勢に僕の方が根負けした。

「うん、でもいいよ。こうやって母さんに会えたことだし」

僕はきらきらと子供のように希望を持った目で母さんを見つめた。そしてこう問い詰めた。

「一緒に帰ろう、母さん」

僕が期待している答えが返ってくると思っていた。しかし、それは間々ならなかった。母さんは首を二度横に振った。

「ううん、それはできないの」

「どうし」

言いかけたところで、地響きみたいなものが聞こえた。

「やつがきた」

凜花が短くそう言った。

地響きが鳴った後、今度は静寂した空気が流れた。空を見上げると青々としていた雲から、月明かりのない闇へと変化しつつあった。その中でも一層に濃い塊からやつが現れた。そこに現れたのは僕が夢で見ていた、騎士だった。僕はその恐怖から身が震えた。凜花は騎士の正面に立ち、その歩幅を止めるように直立不動していた。

「何しにきたの？」

黒い姿をした騎士は何も答えなかった。黒い騎士は凜花の姿を無視して僕と母さんの方向へと歩き出していた。それを凜花は、今度は武力行使してその進行を止めた。

「待ちなさい」

「今更なんだ？」

騎士は初めて言葉を発した。

「もうやめなさいっ」

「……何を言う、それはお前の方だ。もう時間だ。もうこいつらはこの世には必要のない」

「そんなことないわ。意味なんてそれだけで……」

凜花は騎士の言葉を否定するようににらんだ。すると騎士が鼻息を立てて笑った。

「二人には期待すべきことなどない、だから価値などない。それに、そういうと僕の方をむけて指を指した。

「待っているのは絶望だけだ」

そう台詞をはき捨てた。

「そんなことはないわっ。律は……」

そついいかけたところで騎士が言葉を遮った。

「ならば証明してやる」

「ちよつと！ 何をする気？」

「……ちよつとした実験だ」

ぱつと僕に向けて手のひらを向けると、僕の中に闇が入りこんでいった。

「な、なに……うわあああああ！」

僕の視界は完全に闇に包まれた。しばらくすると僕の体を通り抜けるように映像が流れた。そこには一人の男性とその息子の姿が映し出されていた。男性はひたすら誰かに向かって謝っている。その子供は不安そうにその様子を見ていた。

しばらくすると映像がふつと消えた。今度は左右のヘッドホンがついているかのように左右から異なった言葉が流れた。

「ねえ、浦山君最近おかしくない？」

「え？そつかな？」

「そつだよー、なんかこつ……」

「でも、それは前々からじゃない？なんかちよつと気持ち悪いよねえ」

「あはは、わかるわかる。そういえばあそのうち最近親が交通事故故にあつたらしいよ」

「え？ まじで？」

「うん、それで川瀬とか先生とか周りがすごく気を遣っているみたい」

「へー、それってかなりうざくない？」

「うん、川瀬や先生達にかなり迷惑だし」

「だねー、自分でなんとかしろって感じだし」

「はははは、だよー」

「ハハハハハハ」

「今あそのうちはどうなっているんだ？」

「夫の方が最近他界して、母親の方もほとんどごけないうです」

「そうか、そうか。それはいい」

「そうですね、早いうちに相続しないとね」

「まあ、取り分はうちに半分はもっていききたいところですな」

「ははは、そんなことをしたら残った息子さんがかわいそうじゃないですか」

「まあまあそれはなんとかなるだろう」

「ははは、それもそうですね」

「はーっはっはは」

すべての言動と言葉が僕の体を貫く。胃も心臓も肝臓もすべて貫き、もう心も体をぐちゃぐちゃだった。僕の心にもし形があるのなら、それはもう原形すら留められることを許されないまま。

『どうだ？ これが現実だ。いい加減、お前だって分かっているだろう？』

そんなことはわかっていた。

『そしてオマエはこの世界の不浄さと理不尽さに恨みを持っているはずだ、なぜ世界はこんなにも汚れているのか？ なぜ、僕がこん

な目に遭わないといけないのか？ と』

そうだ、いつだってそう思っていた。

『人間は汚い、そして何より弱い。だから傷つけあって生きていくことしかできないだよ。そんな部分をオマエは誰よりも知っているし、嫌っている』

そうだ、本当は自分のことを人に見せたことがないし、嫌いだったんだ。

「……でも」

『なんだ？』

「でもさ、僕は好きなんだ。それでも好きなんだ皆が。学校の皆も、修平だって勇気だって、凜花だって母さんも、そして僕も！ だから、僕は信じるんだ！」

強く握る拳を突き上げてそう宣言した。そうすると、目の前に見えた闇が一扫してかき消された。曇り空が晴れ模様にバツと早変わりするように、世界が変わった。僕は気がつく、横には凜花がいてそして僕の母さんが横に座っていた。

黒い騎士は愕然とした。

「オマエは世界に絶望していたはずだ……なのになぜだ？」

「そんなの簡単じゃない」

凜花が僕の前を出て答えた。

「信じているからに決まっているでしょ？」

凜花は振り返り、僕に軽くウインクした。

「……は、くだらん」

騎士は武器を構え僕達に突進した。それを凜花が体を張って僕達を守る。

「律、早く！」

「どけ天使！ そこをどけ！」

「嫌、絶対にここは通さない！ 律、お願い！」

凜花は叫ぶ。僕はうん、と頷いた。

「母さんっ」

僕は母さんを見た。

「一緒に帰ろう」

そして僕は手を差し伸べる。

「……」

母さんは黙った。すると母さんは突然、笑いだした。

「ふふっ」

「どうしたの、母さん？」

母さんは笑いで涙が出てしまい涙をぬぐいながら。

「いや、本当に律も男の子ねと思ってね。そういうところ父さんにそっくり」

「バカにしないでよ」

「そんなこと言ってないわ。でも本当に母さんうれしいわ。律がこんなにも立派に育ってくれて……」

「母さん……」

凜花がちらつとこちらを見て、何か合図をした。うん、わかってる。僕にはもう余り時間がないことを。

「母さん！ 僕……」

「律」

と呼び止められた。はい、と答えるしかなかった。

「今まで本当にありがとう、そしてごめんなさい」

「なに言っているんだよ、母さん」

僕は泣きそうになっていた。ぐっところえた。

「私ね、すごく懂れていたんだ。結婚して、子供を生んで家庭を築き上げて、そして自分の子供を立派に育てあげること……それがね、全部叶っちゃたんだ」

何を言っただ、母さん。

「私ね……私の人生に後悔なんてものは無かったと思う、だからこんなにも幸せだったのかもしれない」

ああ……だめだ、母さん。だめだ、だめだよ。

「律はどうなの？」

「僕は、幸せだよ。父さんと母さんといられて幸せだったよ」

もう僕はわかってしまった。母さんがこの後何を言おうとしていることを。

「うん、良かった……。ねえ、律」

うん、と僕は返した。

「律は男の子なんだから、ちゃんと凜花ちゃんを守っていかないとだめよ？」

ああ僕は男だ。でも、でも。

「そんなことわかってるか…もう律は男だもんね、もう私がいなくても強く生きられるよね？」

絶対に嫌だ。でも、

「……………うん」

これ以上、母さんを困らせなくなかった。母さんはもう自分のことをわかつている。これからどうしようとしているか。母さんが今どんな気持ちか。その気持ちを少しだけでも僕は分かった気がした。

母さんは自分の死について受け入れている。

でも僕だけが受け入れずにいる。それでも僕はそれでも母さんにはいなくなつて欲しくはなかった。ただこの我が儘も限界だった。

だから僕は返事をした。僕は母さんの望みを叶えたかった、これが僕の母さんの願いなら、最後の願いなら受け入れたい、そう思った。

「律はもう男の子なんだね」

とわが子の成長に少し嬉涙を流していた。

「僕は、もう大丈夫……！」

自分でもそれが強がりだとわかっていた。

「そう、なら安心した。もし、私がこの世界に残ったらお父さん寂しいからねっ、私がいけないとお父さん寂しくて死んじゃうから」

母さんは笑って話すがその頬には涙が流れていた。

「うん、そうだね」

僕も涙が止まらなかった。僕は母さんの消えそうな体をぎゅっと強く抱きしめた。

「本当にありがとね、律」

抱きしめた僕の耳元でそつと僕にささやいた。

「なに言っているんだよ、母さん。いいんだよ、母さん」

それしかいえなかった。

「ねえ、律が私達の子で本当によかったと思っっているわ。だからね、本当に神様には感謝しなくちゃ。私達はね、あなたのおかげでこんなに幸せな人生を歩むことが出来たわ。だから……」

『私の夢は叶ったわ』

ずっと母さんの体が宙に浮かぶように、僕の手から離れていった。

「ま、待つて！ 待つてよ、母さん！ 僕にはまだまだ、たくさん話したいことがあるんだ。僕……！」

母さんは黙って天使の様な笑みでこちらを見ていた。僕はさっきまで堪えていた涙が一気に溢れて、嗚咽まじりに泣き叫んだ。

「僕はやっぱり母さんがいないと……！ 母さん、母さん……！」

やれやれ困った子ねと母さんは首を振るところだった。

「大丈夫。律は大丈夫、律は私達の子供なんだから大丈夫。私達はいつまでも見守っているから」

「ずるい、母さんはずるいよ……！」

やっぱり嫌だ。母さんにはいなくなつて欲しくない。でもこのままじゃ母さんは本当に。

「……律ごめんね」

「………嫌」

僕は腕で涙を拭き、母さんを見た。

「………律？」

「嫌だ！」

そつだ、こんな終わり方なんて嫌だ。

「嫌だ、僕は……嫌なんだ」

本当は嫌だ、こんな結末なんて。

「律……」

だから、僕は変えなくちゃいけない。

僕が　僕自身でこんな結末を変えるんだ。母さんが望んだ母さんが誇れるような僕でいたいといけない。父さんの息子として、僕は母さんに見せないといけない。

「ねえ、母さん」

優しい母さんの顔を見ると涙が溢れそうになってくる。

「僕、母さんにさ」

歯を強く噛み締める。けっして涙がこぼれないように。

「母さんに言っただけなことがあったんだ」

だめだ、こんな顔じゃ。母さんが安心出来ないじゃないか。でも一句一句うだけがもう涙声になってしまふ。まだだ、堪える。言葉が震える。

「何、律？」

まだだつ。

耐える、耐えるんだ。そして作れ、作るんだ。まっすぐ母さんの顔を見る。もうおそらく僕が見られる　母さんに見せられる最後の顔なんだ。だから僕は強く、毅然とした顔で見なくちゃいけない。母さん」

僕は顔を綻ばせる　その瞬間に涙が伝う。ああ、失敗しちゃった。……出来なかったよ、父さん。でも、ちゃんと笑えたんだと思う。

「ありがとう、母さん」

だって母さんはとびきりの笑顔で笑っていたから。

「……律、男の子の顔になったわね」

なっていないよ、母さん。僕はまだ全然世の中のこと知らなくて、よくわからなくて。一人じゃなんにも出来ないんだよ。

「……っ」

母さんの唇が微かに動く。体は透け始めて、体は少しずつこぼれていつているのかの様だった。もうその言葉は僕に届かない。でも、その一言はよく響いた。

ありがとう。

何もない無の状態から命が吹き込まれるように、僕の中の意識が働き始めた。目を覚ますと僕は一人だった。

「……ここは？」

どこかの建物の屋上だった。空はまっくらで月明かりだけが僕を照らしていた、その時点で時刻は夜中を回っているだろうとわかった。僕は早速起き上がり屋上を後にしようとした、だが足元には一羽の羽が落ちていた。

「羽……？」

なんの羽だろう。僕はそのままポケットにそれをしまいこんだ。僕は屋上を後にして階段を通じて下の階に下りた。

「そうだ、母さん」

ふっと、思い出した。なぜそんなことを忘れていたんだろう。せっかくなのでちよつと病室に寄ってみよう。

廊下には誰もいないせいか、僕の足音は非常に響いた。誰かくるのではないかとびくびくしながら病室まで向かった。息を潜め母さんのいる病室までたどり着くと、間もなく僕は中に入った。

「入るよ、母さん」

部屋はなぜか明るかった。ドアを閉め、母さんに近づくと窓辺のカーテンが全開で、月光が入り母さんを照らし光っていた。僕はベッドの横にあるパイプ椅子に腰をかけて母さんの様子を見守った。母さんは本当に気持ちよさそうに眠っているように見えた。僕は母さんの腕に触れたときに気がついた。

冷たい。

母さんから伝わるリアルな温度は僕に現実を教えさせてくれる。僕はなぜか悲しい感情というものが流れてこなかった。幸せそうな顔だった。

「母さん……」

こんな幸せそうにしている母さんの顔を見てしまったら、悲しい感情など流れるわけがなかった。僕は母さんのベッドから届くナーコールを押して、その場を後にした。

僕は病院を後にした。近隣には車一台走っていなかったので僕は仕方なく歩いて帰ることにした。でも今の彼には歩きたかったので都合がよかった。夜道を歩くのはとても気持ちよかった。ちよつと肌寒かったが、風当たりの良いやわらかな風はまるで僕を歓迎してくれているような気がした。空を見上げると、月明かりが歩くべき道を照らしだしている気がした。

だから僕は歩こうと思った。これからどんなにつらいことがあつて、悲しいことがあつても、僕の中に明かりがある続ける限り、歩き続けることが出来る気がした。きれいごとかもしれない、そんな世界などないかもしれない。でも僕が信じ続ければ、きっと出来ると思う。

まずは始めよう、自分の周りのことから。学校や友達のことから。まずはそこからはじめよう。僕は月明かりの道を一步一步噛み締めた。

「凜花ちゃん、凜花ちゃん」

「……どうかしましたか？」

「私の最後のお願い、聞いてもらえる？」

「……はい」

「どうか、どうか……律が幸せになるようにして下さい」

「はい……」

「というのは、嘘」

「え？」

「いえ、嘘じゃないわ」

「……どういことですか？」

「凜花ちゃん……凜花ちゃんは律のことどう思っているの？」

「え、その、なんというか……うう」

「好きなの？」

「………はい」

「だったらお願いがあります。これが私からの最後の願い、聞いてくれますか？」

「はい」

「律を守ってあげて凜花ちゃん。だから私はあなたを」

「ん、朝……」

時刻はいつもセットしている、七時の時刻をさしている。僕は起き上がって朝食の準備に取り掛かった。冷蔵庫から卵をいくつか取り出し、フライパンに少しの脂を注いだ。コンロでフライパンを十分に温めると、急いで卵を割った。塩コショウで味を調べ、菜箸で勢いよく卵をかき混ぜるとそのまま温まったフライパンへと投入する。僕は菜箸で下が焦げないようにと上手く処理し、間もなく火を止めた。卵はちょうど良く半熟になっており、煌びやかな光沢を放っていた。スクランブルエッグの完成だ。その後僕はたっぷりのバターを乗せたトーストを焼き上げお皿に上においた。そこに先ほど作った、スクランブルエッグをトーストの上に乗せた。後はお好みでケチャップを少しつけて完成だ。料理名などおそれくないのだろうが、これは僕の好物だった。とても簡単なのだけれど、朝の時間のない中でこれを作ろうとするとちょっと難しい。でも今

日はすんなり上手くでき、時間にも余裕があった。出来上がった料理をダイニングまでもってゆき、朝食を始めた。

「いただきます」

僕は食事を終え、しばらくして家を出た。玄関でしっかりと靴を履き、僕は玄関を飛び出した。

学校に着くといつものように僕は自分の席についた。クラスは相変わらず騒がしかった。僕は席を立ち上がり、いつも僕に声をかけてくれる友達達に声をかけた。

「おはよう、みんな」

手を上げ、明るく挨拶を交わした。みんな驚いている反応を見せたがほとんどが戸惑った表情を浮かべた。

「おはよう律。珍しいな」

その中で修平だけが挨拶を交わしてくれた。それに続き戸惑っていた連中全員がおはよう、と言ってくれた。修平がクラスに入ってきた。修平はぱつとクラスをひと目見ると、僕が男友達の集団にいることにひどく驚いた。修平は自分の席に荷物を置くことを忘れ、まっすぐに僕のもとに来てくれた。

「おう、律！ 体調良くなったみたいだな！」

「うんっ」

僕と修平は数年ぶりに会った友人の様に話盛り上がった。しばらくするともう一人うるさいやつがクラスに入ってきた。

「あつ、いたー！」

勇気はまるで自分のクラスのように土足で踏み込んできた。

「修平、律、この間はどういうことかなっ？」僕と修平はお互い顔を見合いなんの話なのかと首をかしげていた。

「プ、レ、ゼ、ン、ト」

そういつと僕と修平は同時に「あ」と声を上げた。

「やべ、律逃げるぞっ！」

「うん！」

僕達は教室から出て廊下を駆け抜けた。後ろから勇気の「待てえ

え、こらあ！」という叫び声を耳にしながら僕は走った。そして僕と修平は高らかに笑った。

「あははは！」

「ちよつとお！ 何がおかしいのっ！」

勇気はなおいつそうにムキになって追いかけてきた。僕はホルムルームぎりぎりまで追いかけてこをし、最終的には教室まで逃げこんだ。チャイムと同時に楓先生が入ってくる。先生は自分のクラスじゃない勇気を注意して、自分のクラスに戻るように促した。

「くそー！ 修平、律、後でおぼえてなさいよー！」

そういつて勇気は少々自分のクラスに戻っていった。

先生の声がかかるのと同時に一日の学校の生活が始まる。先生、クラス、生徒、友達、親友、恋人、僕らの世界は普遍的なもので溢れている。このありふれた風景を僕は壊したくない、だから僕は守ることにしたんだ。人は失ってから気付くものかもしれない、人は傷ついた後にすべてを悟るかも知れない・・・それでも僕はこの世界に信じ続けるだろう、まだ見ぬ僕らの未来を、そしてこれから新たに会おう人と絆を交わすときまで。僕らの世界はけっして一人ではない、ましては誰でも繋がっているわけではない。それに繋がりを感ずるとき、繋がりがだと信ずるとき、僕は僕であり続けたいと思う。だから僕は誰かを信じ、繋がりを感ずてゆけるのだと思う。それを教えてくれたのは君だ。

「凜花……」

僕は凜花との約束の場所で僕らの町を眺めていた。数羽のわたり鳥と一緒に飛んでいた。

僕はいつかの屋上で寝そべった時に見た、夢のことを思い出していた。

展望台には父さんと母さんそしてまだ首が座って間もない、自分の姿だった。

「ねー、見てみて、鳥さんの大群だよー」

ぐいぐい、と僕は父さんの服の袖をひっぱる。

「おー、すごいな、ありやジョウビタキだなあ」

「じょー、びたきい……？」

ほら、と父さんの両脇を持ち上げられ、肩の上にちようどすんとおさまった。

「そう、ジョウビタキだ。律、見えるか？」

くるり、と首を反転させ、顔を見せるとやさしくてあったかい笑顔を向けられた。

「うん！　すごい、すごいー！」

そうか、そうか、と声をあげて大笑いすると、つられるように笑った。

「ママもみてー！」

後ろでその様子を見ている、母さんも穏やかな表情でうなずいた。

「うん、うん。すごいね」

でしょーでしょー、と自分のことのように喜んだ。その後も釘付けにされたように、ずっと渡り鳥を見つめていた。

「うん、あったかい」

耳元でぼそつ、と独り言のように父さんは何かつぶやいた。子供は渡り鳥に夢中だったので、そのままその光景を見続けていた。

「ええ、私たちみたいだね」

ぎゅ、と三人は暖めあうようにその手を握った。

「そうだ！」

はっと思い出し、僕は展望台にある壁を隅ずみまでみた。どこかにあつたはずだ。

「あつた」

そこには父さんが達筆に綴った文字が記されていた。三人できた記念日として父さんの名前と母さんの名前と僕の名前がそこには記されていた。僕の名前の横には『誕生日おめでとぅ』とはっきり大きな文字で書かれていた。つーっと一本の涙が頬を伝った。すると、

誰かが肩を叩いた。

「つもつ、だらしのないなあ」

振り返ると、そこには凜花が立っていた。

「凜花！ 消えたんじゃない……？」

凜花はほら、と手をさし伸ばしてきた。僕はそれを受け取る。

「夢、じゃ……ない？」

「ほら、ここにいますでしょ？」

ぎゅ、と凜花は指を絡ませた。

「大丈夫、私はもう消えたりしないよ」

「ど、どうして……」

「これもあの人のおかげ、かな」

「あの人？」

「ううん、何でもなし。とにかく！ 私はもう大丈夫」

「ほ、ホントに？ 本当に凜花はいなくなったりしない？」

「うん」

「本当に？」

「ホントにホントにホントに、ほんと〜に大丈夫！」

「良かった……」

僕は西尾市の町を眺める。

「ねえ、父さんや、母さんは幸せだったのかな……？」

「そんなの当たり前じゃない、だって……こんなにもあったかいじゃない」

ぎゅつと僕の背中を抱きしめてくれた。

「うん、そうだね。そうだよねっ」

僕はぎゅつと凜花の手を強く握った。僕は鞆の中からペンを取り出すと、父さんが書いた字のしたに文字を追加で書き足した。

『ありがとう』

そしてその横に僕と凜花の名前を刻んだ。

「え、これって」

凜花から小さな声が漏れた。

「ん、どうしたの？ わ、恥ずかしいって」

僕は慌てて書いた部分を体で隠した。凜花は驚いた様な嬉しそうな顔をした。そして意気揚々に手を上げた。

「よーし、それじゃあ帰ろうか」

凜花は僕の手をとって立ち上がった。

「え？ どこに？」

「もちろん律の家だよ」

「うん、別にいいけど。……なんで？」

「なんでって……さ」

僕が書いた壁を指指した。

「そうゆうことで、いいんだよね？」

凜花が頬を染めて聞いてきた。

「え、えー！ え？ それってまさか」

「まさか……って自分で書いたんでしょ？」

「うん、そうだけど」

「じゃあ、そういうことでしょ。決まりっ」

「決まりって凜花はいいの？」

「うん、もちろん！」

と何も気にすることはない、という顔をしていた。

「でも、僕まだ高校生だしっ」

「大丈夫、大丈夫！」

「はあ、何が大丈夫なのさ……」

凜花は「大丈夫、大丈夫」といい僕の手を引っ張った。

「もう仕方ないなあ」

僕は凜花につられながらも凜花の後についてゆく。

家に着くと、凜花はささっと台所のところまで入っていった。僕も追いかけるようにリビングに入ろうとしたとき。

ぱーん、と無数のクラッカーが僕に向けて鳴っていた。と同時に「おめでとう！」という声が聞こえた。そこには修平と勇気と金城

さんと凜花の姿があった。

「だいぶ待ったんだからね」

勇氣は今にも不機嫌な様子。

「おう、律！ 誕生日おめでとう」

修平は相変わらぬの様子。金城さんはニコニコと笑顔で僕の誕生日を祝福してくれていた。

「あつ」と凜花は冷蔵庫を開けた。そこから出てきたものは白い大きな箱だった。凜花はダイニングのテーブルの上に持ってくると、みんなの前であけた。

「バースデーケーキだよっ」

と凜花はあけてくれた。あけてみると、ネームプレートにはお誕生日おめでとう。父さん母さんよりと書かれていた。僕はまたぼろっとうれし涙交じりの涙を流した。

「皆ずるいよ……」

と涙交じりに話す。

「父さん母さんありがとう、そしてみんなありがとう」

うんうん、と凜花満足そうな顔をしている。

「はぁ、おいしそう……もう耐えられないっ。ケーキ食べよ！」と勇氣が待ちきれない様子でケーキを眺めた。凜花は小皿とナイフを持ち出して手際よくみんなに取り分けた。

「じゃあ、改めて誕生日おめでとう。律」

「うん、本当にみんなありがとう」

この後僕らは夜まで遊んだ、もう遊び飽きてしまうまでに。途中から修平が勇氣をからかい、家中を駆け回ることもあった。

「じゃあ、そろそろ帰ろうかなっ」

みんなは立ち上がった。僕は玄関先まで見送った。

「それじゃあ、また明日っ！」

「うん、また明日ね」みんなを見送ると僕一人になってしまった。みんなが散らかしていったお菓子やゲーム機を一人でしまっていた。すると、玄関から誰かが家に入ってきた。

「私も手伝うよ」

そこには凜花がいた。

「あれ？ 帰ったんじゃないの？」

「なに言っているの？」

「どゆこと？」

「だ、か、ら。ここが私の家だから帰って来たんじゃない？」

ぽん、と手を叩いてなるほど僕は一人納得した。

「え？ マジ？」

「うん、マジマジ」

くすつと凜花は悪魔っぽい笑い混じりにそういった。僕らは一緒に片付けをした、でも僕はなんかドキドキしてそれどころじゃなかったかもしれない。あれ？これってありなのか？もうどこにでもなれ。僕らは片付け終わると、もうそろそろ寝る時間になっていた。僕らはお互いにシャワーを浴びて、僕は自分の部屋まで向かった。ベッドの中に向かったが、凜花がいると思ったらドキドキして眠るところじゃなかった。

こんこん、とノックをする音が聞こえた。

「律、起きている？」

凜花が部屋の中に入ってきた。僕は咄嗟に寝ているフリをしてその場をごまかしてしまった。凜花はだまって僕のベッドの中に入ってきた。

「じゃあ、おやすみ律」

とそういうと僕の隣で寝息を立て始めた。

僕の心拍数は上昇する一方。僕は体を寝返りして、凜花の方へと向いた。凜花の寝顔はもうどうしようもなくかわいくて、僕自身どうかなってしまいそうだった。僕はなんとか自制心を抑え、僕はその夜を過ごした。

夢を見た。

ずっと前に見たあの夢だった。

一人の女の子と背丈の高い男の人がいた。小さな女の子と父親は仲良く手をつないで、堤防沿いを歩いている。

「りんかはどんな大人になりたい？」

「ん、んつとね」

女の子はしばらく考え込んだ。

「んー……わかんない！」

「はっはっは」

父親は女の子の答えに笑った。すると女の子は父親に対してひどく不機嫌に拗ねた。

「ひどい、なんで笑うの！ もうお父さん、いじわる！」

「いやいや悪いね、凜花。馬鹿にして笑ったわけじゃないよ」

「え……そうなの？ほんと、ほんとに？」

「うん、本当だ。凜花、わからないということは悪いことじゃないんだ」

「え……でもやだよお。私は知りたいもん！早く大人になりたいんだもん！」

「……そうか。なら、夢を持つといい」

父親は言う。

「夢？」

「そう。夢だよ、凜花」

目が覚めると、香ばしい香りがしてきた。僕は着替えて下の階まで下りた。

「あ、もうちょっと待っていてね」

凜花はエプロン姿で料理をしていた。凜花はフライパンをダイニングへと持ってくるとお皿に盛り付けていた。凜花はエプロンを取

ると僕と一緒に朝食と取った。

「あつ、この味噌汁おいしい」

「そう？ 良かった、えへへ」

凜花は笑顔一杯で笑っていた。僕もなんだかその姿に恥ずかしくなつてはにかみながら笑っていた。僕らは朝食を取ると一緒に家を出た。

「ほら、早く行かないと学校間に合わないよっ」

「うん、ちよつと待ってよ、凜花」

よし、と準備が整うと凜花は僕の手を取って引っ張っていた。

「ほら、律。いこうっ！」

「うん、凜花」

僕は彼女の後についてゆく。僕はその手を離さないようにがっちりと握っていた。

これから僕の人生は楽しいこともある、つらいこともあるんだと思う。でも僕は一人じゃない、凜花がいる、親友がいる、友達もいる、先生たちもいる。

そして僕は誰かを信じ、信頼があることで、繋がりがあり、絆が存在する。けど今までは僕の中に繋がりが目には見えなかったから不安だったんだと思う。けど今はちよつとだけ違う。

誰かを僕ら信じることを出来たから。信じることでいつしか、自分や相手の光となって生きてゆく力に変わることを信じることに喜びを感じる事が出来たから。

「よしっ」

僕は信じ続ける、そこで得た大切なものを守りたいし、守ってゆきたいと思う。そうして希望は生まれてくるものだから。だから今日も明日もこの先も、どんなことがあってもこの手を取り続け、絶対に離さない。

僕は後ろを振り返る。そこにはいるはずのない、母さんと父さんの姿が見えた。

「父さん、母さん……」

父さんと母さんが僕を見送っていた。その表情には紛れもなく、笑っている二人の顔だった。僕は感慨深い気持ちが溢れ、思わず叫びたくなってしまう。伝えたいこと、言いたいこと。でも僕はすべての言葉を飲み込んだ。

「……父さん、母さん」

僕は息子として精一杯の感謝の気持ちを胸のうちに秘めて、駆け出した。

そして距離をとったところで、勢いよく手を上げた。

「……っ」

これは僕の気持ちだった。

手を伸ばした僕は父さんと母さんに見える様に、しっかりと。

大きく、大きく、

大人になった自分を二人に見せつけるように高く掲げて。

「ありがとう、父さん母さん」

二人は僕を見てにっこり笑う。安堵した表情で僕を見ていてくれる。

「それじゃあ……行ってきます！」

僕は二人にわかるように、力強く、大きく、

二人に、手を振った。

二人はいつもの様に歩いていた。

けれど女の子はもう少女のままではなく、背もかなり父親と近づいていた。女の子は父親を見上げて言う。

「お父さん、私、決めたんだ」

父親のすらりと伸びた体躯が緩やかに弧を描き、父親は優しい瞳で女の子をのぞき込んだ。

「なんだい、凜花」

「前にお父さんが話してくれた、夢のこと」

「ああ、あつたね。そんなこと」

「前は見つけられなくてお父さんに答えられなかったんだ。それでね……私、見つけたの」

父親は黙って女の子の顔を見つめる。

「私ね、お父さん」

「うん」

「私……いいお嫁さんになるんだ!」

すると父親は柔和な笑顔を見せて、ああ、と笑う。

「いい夢を持ったね、凜花」

父親はそこで立ち止まる。手を繋いでいた女の子もそこで一緒に立ち止まった。父親は女の子に笑顔を向けると、彼女もまた笑顔で返した。二人はもうわかつていた、もう父親の方は歩けないことに二人の笑顔はどこか寂しさを帯びている。

「お父さん、今までありがとう。それじゃあ私、行ってくるね」

彼女は手を繋いでいた父親の手を離す。父親もまた何も言わずに手を離れた。彼女は歩き出すところを、父親はそれを立ち止まって見ていた。

そこに、一人の男の子が女の子に寄り添うように現れた。

男の子は女の子の手を握ると、一瞬だけ父親を見て柔和な笑顔を見せた。その笑顔に父親は安心した。

「行つてらっしゃい」

彼女に送る最後の言葉を父親は言う。

女の子と男の子は歩き出す。

二人は振り返ることなく歩き続けた。

おそらく、二人は立ち止まることはないだろう。

多分、その足が止まるその日まで。

二人はこれからの道を見据えて仲良く手を繋いだ。

決して離さないように、離れないように。

そうして二人は歩いた。

これから幾重にも悲しいこともつらいことが待っていようと。
彼らはこれからの長く険しい道を、
そしてこれから始まるその旅路を、
二人で歩き出そうとしている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1338y/>

僕は彼女の夢を見る。

2011年12月13日19時56分発行